トランスジェンダーをいきる（1）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

1　はじめに

①「自己」を研究素材とした一風変わった修士論文を中心に

「修士論文」と聞くと、執筆者も読者もなんとなく固いイメージがある。実際、私も 2011 年度に修士論文を執筆したときは、毎日机にへばりつきながら、パソコンの音声ソフトを利用して、ああでもなく、こうでもない、というように、顔の表情を堅くしながら書いていた。

しかし、私の場合、そのような堅い表情で書いていても、ある種の楽しみや発見を見出すことができた。それは、修士論文の研究素材になっているのが、「自己の男性性エピソード」だからである。

この修士論文は、視覚障碍・FtM（Female to Male―身体・書類上は社会的に女性、ジェンダーは男性）トランスジェンダーの自己のライフストーリーの中で、日常生活のさまざまな場面において、常に社会に内在する「男らしさ」を意識しながら、その一方で、「男らしさ」に対して矛盾や葛藤を抱き、そのつど問題提起しながら、社会との共生や再統合に焦点を当てた自分史を、自己物語を通してエピソード分析をした当事者研究である。したがって本論文は、男性性の自分史に焦点を当てたエピソードを中心に記述していながらも、そこから社会に内在する普遍的なテーマを見出そうとしているのである。この「自己

の男性性エピソードから、社会に内在する普遍的なテーマを見出そうとする試み」が、この修士論文の一風変わった特徴であり、これから連載していく内容も、かなりインパクトが強いものと考えられる。

②エピソード記述としての「自己物語の記述」

自己の男性性エピソードを、ただエピソードとして記述しただけでは、社会に内在する普遍的なテーマを見出すことができないばかりか、「個人の問題」と捉えられ、「問題の個人化」に繋がる。社会の普遍的なテーマを見出すには、自己のエピソードに、一定のストーリー性を持たせることが必要だ。

そのエピソード記述として試みたのが、「自己物語の記述」である。この「自己物語の記述」の手段として、「自己内対話」を取り入れた。「自己内対話」とは、もともと複数存在している自己のあり方を、あえて 2 人の自己に象徴化させた上で、その 2 人の自己の対話によって、これまでの自己の男性性エピソードについて、インタビュー形式で対話し、それを対話文として自ら記述していくことによる自己省察を主目的に編み出した方法である。この記述方法は、単なる自分史の中から、時間軸に沿って男性性を構築していったプロセスを記述するのではなく、それぞれの体験が構造化されていく中で、単なる私個人の体験ではなく、社会の普遍的なテーマも含めた「ハイライト化された男らしさ」として記述しているのである。

ここでは、自己の男性性エピソードと、そのエピソードを記述している「自己」との間に、一定の距離を置くことで、自己の男性性エピソードを客観的な視点で捉え返すことによって、問題を社会化し、「怒る」、「怒鳴る」などの一見「不の感情」とされる事柄をも赤裸々に物語ってしまうことができる。ただし、そこに至るまでには、自己の男性性エピソードや、それに伴う一見「不の感情」とされている事柄を、個人化するのではなく、社会化するという明確な目的がなければ達成できないことにも留意したい。

また、応用人間科学研究科の授業のひとつであるドラマセラピーという芸術療法による演出や場面設定・集団精神療法によるグループ内での笑いの共有という重要な要素を、「自己内対話」に取り入れたことで、相互に笑いを引き出すことによる本音の部分への気づきや、思わぬ質問から生じる議論の深まりや感情のもつれなどを、ありのままに可視化しながら記述したことも、「自己物語の記述」の特徴である。

③「自己内対話」の基本になっている自己の「多声性」と「ドラマセラピーの授業」

では、「自己物語の記述」だけで、果たして、自己の男性性エピソードと、それを記述している自己との間に、一定の距離を置き、一見「不の感情」とされている事柄をも客観的な視点で捉え返した上で、赤裸々に物語ってしまうことができるのだろうか。ここで重要になってくるのが、「自己物語の記述」の手段になっている「自己内対話」である。

前述したように、「自己内対話」は、もともと複数存在している自己の中から、あえて

二人の自己に象徴化させている。この「自己内対話」の基本になっているのは、視覚障碍・FtM トランスジェンダーという事情から、自己の人生が、現在でも常に「多声的」であるからだ。この「多声的」というのは、思春期という不安定な時期に起こりやすいが、視覚障碍・FtM トランスジェンダーという、社会的マイノリティーな状況の中で、常に社会の矛盾や葛藤を覚え、問題提起しながらも、その一方で、社会との共生や再統合を図ろうとしている。つまり、思春期のような不安定な状況が、中年期に差し掛かった現在でも継続しているため、常に自己の中で、多声的な状況が、自己の人生の中心を占めている。

しかし、そのような状況をただ不安定視するのではなく、修士論文では、複数の声を、以下の二人の自己に象徴化させてみた。

身体・ジェンダー共に男として一致している理想の男像である「ザ・オトコ」（インタビュアーA）」は、身体・ジェンダー共に男の視点で自己を眺めながら、男性性のエピソードを客観的に浮かび上がらせる質問をしている想像化された自己である。したがって、あくまで「想像化された自己」であるので、厳密にはその男性性に誇張性・捏造性が多分に吸引されている。一方、身体は女・ジェンダーは男と言う 2 つの性別の間を常に揺れ動く現実の自己「FTM トランスジェンダー」（インタビュイーB）は、そのような A の質問に悩み、困惑し、時には怒りをぶつけながらも、今まで構築してきた自己の男性性を、語りの中で振り返っているリアルな自己である。したがって、社会の環境や意識・法制度などによって、常に「間」を揺れ動く存在であり、境界人であるからこそ見えてくる脆弱性・フラジャイルな部分を常に意識させられている。このようなドラマ的なディスコースによって、A と B の人間的な対話を通して、多声的な声が相互に対立している声ではなく、交響音楽のように調和の取れた和音として響きあっていく複数の声として再統合されるプロセスを踏むことを目指そうとしている。ちょうど、１曲の音楽を２パートに分けて、お互いの声を聞きあいながら合唱するという感覚である。

④「対話的自己物語」から見えてきた、自己特有の男性性

「自己物語の記述」は、対話的自己物語として成立した。この成立の背景は、創造された男らしい自己「ザ・オトコ」(A)」と、現実の自己「FtM トランスジェンダー（B)」の二項対立的な特徴を浮かび上がらせた。

その結果、男性性エピソード分析のために創造かした「ザ・オトコ」(A)」の存在によって、「FtM トランスジェンダー（B)」が構築してきた男性性の中に、通例であれば気づかない男性性を浮かび上がらせ、自己物語の記述によって可視化することで更に明らかになった。つまり、「FtM トランスジェンダー（B)」のライフストーリーにおいて、常に男性同士のホモソーシャルな関係性を意識していたり、どのような些細な現象からも、時には一般に女性性の高い行動様式とされる事柄からも、男性性を見出そうというセンシティブな心性が浮かび上がってきた。（詳細については次回以降に連載する）そこには、自己の女性または女性性嫌悪に繋がる表現によって、より男性性を構築しようとする心性が明らかにな

っている。このため、自己の中の女性性を不のイメージとして誇張している表現が多いが、それは自己の中にあった誇張された男性性が内面的にイメージされていた女性または女性性嫌悪の性質を含んでいるからである。この誇張された男性性は、社会によって構築された男性性・自己によって構築した男性性・更に男性性を追求するあまり、誇張せざるを得なかった男性性など、さまざまな性質を持つ男性性の集合体であり、現実の男性性との調和を図ろうとしている作業を通して、自己の入り乱れた男性性が明確になったことで、女性または女性性嫌悪に繋がる表現が多用されていることに気づかされた。このこと葉、視覚障碍・FtM トランスジェンダーの自己のライフストーリーに置いて、「視覚障碍」と、「女性の身体」を不のイメージと位置づけた上で、誰よりも強く男手あろうとした結果であろうと考えられる。

⑤終わりに―次回からの連載に向けて

冒頭でも詳述したように、この修士論文の目的は、自己の男性性エピソードを記述しながらも、それを単なる自己の体験だけに留めることなく、社会問題との関わりの中で、自己の体験から浮かび上がってきた問題を社会化することにある。したがって、「対人援助学マガジン」でも、できるだけ修士論文の目的に沿って連載していきたい。ただし、連載の内容については、修士論文では扱わなかったことも取り入れてみようと考えている。

この連載は、手記でもなく、日記でもなく、単に時間軸に沿った自分史語りでもなく、病語りでも病気語りでも、ましてや障碍語りでもサクセス・ストーリーでもない、自己の男性性変容のプロセスを通した確かな当事者研究として位置づけておきたい。

トランスジェンダーをいきる（２）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

幼少期　1

これから 2 回にわたって、私の幼少期のころの「自己物語の記述」を分析する。１回目は、私が小学校に上がるまでの時期を中心に、すでにジェンダーが男の子であると確信した事柄について記述する。

（１）「俺は男の子や」

性自認は１歳半ごろから

私は 1971 年 3 月 9 日に、「視覚に障碍のある女の子」としてこの世に生を受けた。少なくとも祖母や両親たちは、私をそのように見て疑わなかった。

ところが、視覚障碍に関しては、あちこちの病院を駆けずり回った結果、一生背負っていくものとして確定したのだが、「女の子」という性別に関してはすでに 2、3 歳ごろには反発を覚えており、「自分は男の子である」と認識していた。

性科学者のジョン・マネーは、「自分の性別がどちらに属しているかを認識する（性自認）は、だいたい１歳半ごろで確定し、その後の性自認の変更はできない」としている。そうだとすれば、すでにこのころから、男の子であると確信していた事実が、より鮮明に確かさを持って、当時の私に迫ってきた、ということになる。遠い記憶だが、確かに反抗しがたい力によって、自己の性の方向性が、他者（主に女性）とは異なった方向に引きずられ

ている、という感覚を、おぼろげながら抱いていた。そしてこのことが、後に詳述するさまざまな行動様式における不一致や違和感を生じさせることになるのである。

2　男の子としての 3 台要素がもたらしたもの

私の「男の子としての 3 台要素」は、「寡黙」、「過活動」、「行動化」であった。2、3 歳ころの男の子なら少なからず持っていそうなこの 3 台要素は、すでにこのころからさまざまな場面で発揮され、そのたびに両親や父方の祖母の怒りの原因になっていた。

私には、２歳年上の兄がいる。当時、兄の持っていたおもちゃをめぐって、兄との喧嘩が絶えなかった。兄貴に与えられていたおもちゃは、手動または自動式の車やボール・プラモデルといった、いわゆる心身の活動力を喚起させられるような物であったのに対し、私に与えられたおもちゃと言うのは、人形や果物の模型セットなど、ほとんど心身の活動力を期待できないような物ばかりであった。通常であれば、「お兄ちゃん、それほしい」と言えるのだろうが、寡黙であった私は、兄に、そのような活動力を期待できないおもちゃをいきなりぶつけ、時には噛み付いたりするなどの暴力を行使しながら、自己の男の子性をアピールし、正当化したものであった。

そのような私に対し、両親や父方の祖母は、もっとおとなしく、しとやかでいること、すなわち女の子らしくすることを求めてきた。その度に私は、「俺は男の子や」と心の中でつぶやき、祖母や両親に反発していた。

女の子のいたずらを「おてんば」、男の子のいたずらを「やんちゃ」というが、私のこのような行動は「やんちゃ」に属しており、けっして「おてんば」という表現では足りない。そこには、「おてんば」よりも、「やんちゃ」という表現のほうが、行動力においても、行動様式においても、領域が広範囲であると考えるからだ。したがって、ある程度大胆な行動様式をとることによって、「おてんば」の領域を超え、「やんちゃ」へと近づきたい、という欲求が、知らず知らずの内に自己の過活動・行動化を促進させ、変わって寡黙という形で、言語によるコミュニケーションを低下させていったと考えることができる。

一方、盲学校の幼稚園に通い始めたころから、私に対して執拗にやんちゃをしかけてくる男の子 A がいた。彼のやんちゃ振りは、普段の私のやんちゃ振りとは明らかに行動の質や量が異なっていた。私は必死で A のやんちゃぶりに抵抗しながらそれでもなんとか A との間で男の子同士のホモソーシャルな関係を築くための模索をしていた。

しかし、私の行動は、周囲の大人たちの誤解を招いてしまった。すなわち、「仲のよい男の子と女の子」、「喧嘩するほど仲がよい」、「嫌い・嫌いも好きのうち」というように、子供同士の係わり合いの中に、大人たちによってかってに異性の交際として考えられてしまったのである。私の彼のやんちゃ振りへの抵抗は、「彼からやんちゃをされる」こと自体が、もはや私を男の子ではなく、女の子にさせられてしまうことへの恐怖であり、不本意さであった。したがって、大多数の大人たちの連想する子供同士のほほえましい恋愛ムードか

らは逸脱しているのである。

このようにして、私の「男の子としての 3 台要素」は、周囲の大人たちを困惑させることになるのである。

3　自己の中で構築した「方程式」による男性性形成

私の男性性形成は、もともとの男の子としての性自認に加え、祖母と暮らしていたときの体験が大きなシェアを占めていた。当時、祖母は、両親とのいざこざが絶えなかったので、祖母の家だけ別棟にし、別居していた。2、3 歳ごろ、しばらく両親と兄と別居させられ、祖母と一緒に暮らしていた時期があった。そのときの体験が、後に私の男性性形成の中核をなしていくのである。

祖母の口癖はこうであった。「女の子やったら泣きなさんな。女の子はいちいちべらべらしゃべるもんやない」。（ええ。なんでえ？）、（そんなのありえない！）どこからか、そのような声が聞こえてきそうなくらい、祖母は私の行動様式の不備な点や至らない部分について、このように叱責した。

しかし、祖母のこのような要求に対して、私は違和感を覚えるようになった。私はどういうわけか、すでにこのころから、男性の演歌歌手の歌を大声で歌うようになっていた。その歌の歌詞の内容やドラマ・漫画などのメディアの要求する「女の子」と、祖母の要求する「女の子」との間に、食い違いのあることに気づいた。例えば、演歌の歌詞では、「男だったら泣いたりせずに」（小柳留美子『瀬戸の花嫁』）や、漫画・ドラマでは、「女の子なんだから、もう少し機嫌よく話をしたらどうなの？」などと、養育者らしき人たちから叱責される場面が見受けられた。すなわち、ここで言えることは、「女の子やったらいちいち泣きなさんな」、「女の子はべらべらしゃべるもんやない」という要求は、演歌の歌詞やドラマ・漫画などのメディアでは、男の子像として要求していたものであった。

その食い違いに気づいたとき、子供心に一瞬どちらの要求を尊重すべきか、と躊躇したかといえばそうではなかった。私はまるで、数学の方程式を解くような方法で、祖母の「女の子としての要求」を、すべて「男の子としての要求」に代入し、自己の「男らしさ定義」を構築していった。すなわち、「男の子やったら泣きなさんな」、「男の子やったらいちいちべらべらしゃべるもんやない」という風に、「女の子やったら」を「男の子やったら」に代入することで、自己の「男の子としての性自認」とも一致したのである。

また、「女の子やったらつべこべ文句を言わんとさっさと早くしなさい」、「女の子やったら食べ物の好き嫌いやうまいまずいを言うもんやない」という祖母の要求をそのまま「男の子やったら」に代入することによって、もともと有していた「寡黙」、「過活動」、「行動化」に拍車をかける結果になり、そのことが私をいわゆる伝統的な男性性形成へと導いていったのである。

ではなぜ、祖母がそのようにして私に対して要求する「男の子像」をわざわざ「女の子

像」として置き換える必要性があったのか。

祖母は明治の終わりの生まれの人であった。現在でも「障碍」に対する強固な負の感情だけではなく、ジェンダーに規定された思考パターンの強い社会ではあるものの、私の父をはじめ、3 人の男の子を女手一つで育ててきた祖母にとっては、私が「視覚障碍」で、しかも「女の子」であるということを、「社会的な二重の劣等性を持った子ども」として認識した上で、だからこそ将来は独立して一人前にしなければならない、という強い使命感の下、メディアや社会一般に要求される「男の子像」を、わざわざ「女の子像」に置き換えて私に要求したのだろう。したがって、祖母のそうした男の子像から女の子像への「置き換え行為」は、私を将来独立させるための戦略的方法として利用されたものであり、このことが私の「男の子としての性自認」と一致し、ますます男性性を強固にしていったのである。

4　終わりに

このような祖母との暮らしを通じて、いつしか私の中に、「男らしさ」、「女らしさ」が、独特の様相を持って定義されていった。例えば、男は感情を表出しないが、女は感情を表出する、男は涙を見せたり弱さを吐露したりしないが、女は涙を見せたり弱さを吐露したりする、男は活動力に優れ、女はそれほど活動的ではない、というように、男女２分法的な仕方で、自己の行動様式を適宜選択するようになった。しかし、このような時代錯誤的な「男らしさ」、「女らしさ」の定義は、その後、数々の体験や人との出会いを通して、脆くも崩壊していくのである。（続く）

うしわかこうじ（立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士過程）

トランスジェンダーをいきる（３）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

幼少期（2）

前回は、自己の性自認が男の子であると確信し、祖母との暮らしを通じて、自己の性別のあり方や行動様式を規定した結果、独特で時代錯誤的な様相を持った定義の仕方をしていったところまで記述した。

その一方で、男の子でありながら、他の男の子とは相容れない性質におぼろげながら気づき始めた時期でもあった。今回は、そうした時期を、「陰の側面を感じた時期」として捉え、自己物語の記述に基づいて詳述する。

１　「なんか違うでえ」

自己の性自認が男の子であると革新していながら、一方で、他の男の子とはどこか異質な側面がある、という感じ方を、当時の心境になって率直に表現すれば、「なんか違うでえ」になる。特に、兄貴と同じような行動をしたとき、父方の祖母や両親は、必ず女の子であることを理由に私を叱責した。一見自明のことのように思われるこの厚意が、当時の私にとってはいつも納得のいかない結果を残すだけであった。その腹いせに、例えば兄貴とのおもちゃの取り合いや、テレビのチャンネル争いの際に、殴る・蹴る・噛み付くなどの暴力となって、兄貴の身体を攻撃することでストレスを解消していた。

しかし、そうした暴力性の裏側で、常に心理的不安定さにさいなまれていたことも事実

であった。それが「なんか違うでえ」という表現から生み出された「なんか」であり、その「なんか」は、容易に言語化できない迷路のような複雑な感情、いや、もっといえば、言語化してはいけないタブー感であった。そしてこの複雑な感情やタブー感は、素朴な疑問として率直に大人たちにぶつけることをためらわせ、この時期にありがちなざまざまな「なんで？」という質問リストから自然に締め出してしまった。

他の男のことは「なんか違うでえ」という感じ方は、その後、次項から詳述するように、徐々に明確化して、自己の身に降りかかることになる。

２　独特で奇妙な恋愛事情

「初恋の時期は？」と聞かれると、ほとんどの人たちが３，４歳ごろから小学生のころの年齢のようだ。私もご他聞に漏れず、初恋は３歳から４歳ごろであった。しかし、このころから、私の恋愛の特徴が独特かつ奇妙であることに気づかされる。

ある音楽番組を視聴していたとき、ダークダックスやボニージャックスの歌が流れてきた。いずれも、男性ばかりのグループであるが、私はテノールパートを歌っていた男性のやさしい歌い方に心を引かれ、胸騒ぎや動悸・心理的掻痒感を覚えた。そして、番組終了後、しばらくの間、その歌を思い出したとき、無意識のうちにそのような感情を抑えるかのように、部屋の中を走り回りたくなるような荒々しい衝動に駆られ、悪戯や物を破壊したいという粗暴な行動に出てしまい、父方や両親の怒りを買い、女の子らしくすることを求められ、そのたびに極端な「恥辱感」に陥る羽目になった。このサイクルは、一定期間継続し、やがては自然消滅していった。

おりよく、当時、「恋する、、、」という文言の CM が、執拗にテレビから流れていた。私はこの「恋」という言葉にこめられている意味が、ダークダック巣やボニージャックスの歌を聴いたときの一連の「症状」なるものと、その後の荒々しい行動や粗暴な態度、そこから派生する父方の祖母や両親からの怒りを買うことや、女の子らしくすることを要求された際に生じる極端な「恥辱感」という構図とが一致していること、つまり、ダークダックスやボニージャックスのテノールパートを歌っている男性が「好き」という恋愛感情を抱いていることを、子供心に知らされ、これが「初恋である」と確信したきっかけとなった。

しかし、この初恋のあり方が、当時メディアや周囲の大人たちによって植え付けられていた「恋心を抱いたときの女の子の心」、すなわち、「しとやかでうつむき加減、ケア役割を発揮する」などの行動様式とは程遠いと感じていた。それは、特にその後の恋愛に陥った際に、兄やいとこの男の子たちと遊んでいたとき、確かに一連の「症状」なるもの、不必要な荒々しい行動や粗暴な態度は軽減するものの、「男の子を性愛の対象とする女の子の私」を演出しなければならないという苦痛や、FTM ゲイの恋愛は容認されない、という疎外感や恥辱感といったものは、軽減されるどころか、ますます顕著になっていった。当時、兄に好きな女の子がいたかどうかは別として、兄を含めた周囲の男の子たちの私に対

するまなざしが、「男の子を好きになり、その男の子のために、女の子としてかいがいしく世話をする」という図式によって規定されていると感じさせられた瞬間、（確かに男の子は好きだが、それは女の子としてではなく、男の子として好きなんだ）という FTM ゲイの側面を否定せざるを得ないという疎外感が、自ら恋愛市場への積極的介入を阻んだといえるだろう。

３　女の子の身体であることへの違和感と、男の子のジェンダーであることの不一致の始まり

私は父や兄と一緒にいることが大好きであった。プロレスごっこのような遊びを通した身体接触も楽しかったが、３人で食事をしたり、ただ一緒にいること事体に、男の子としての性自認を強め、満足していた。

あるとき、父と兄の 3 人で、家の近くの川で立ち小便をしようということになり、誰の小便が一番飛ぶかを競うゲームをした。子供のころから、何かにつけて兄と競争して勝つことを目標にしていたので、このゲームも絶対に勝つと決め込んでいた私は、立ち小便をした際、自己の小便が父や兄のとは異なり、下にだらしなく地に落ちたことにショックを受けた。そこで父に、「なせ、私の小便は飛ばないのか」と聞いてみた。すると、父からあっさり、「お父さんやお兄ちゃんはちんちんがあるから、おしっこが飛ぶんや。お前は女やからちんちんがないし、それでおしっこが飛ばへんのんや」と言われた。そこですかさず、「でも、私にもそのうちちんちん生えてくるやろ？」と聞いてみると、またまたあっさり、「お前は女やから、ちんちんは生えてきいひん」と言われた。このような父との会話は、一見すると 4、5 歳の子供と父との何気ない会話に聞こえるかもしれない。しかし、当時の私は父の「お前は女やから、ちんちんは生えてきいひん」という言葉は、単に「ペニスは生えてこない」という以上に、父からの「ペニスを持たない体としての宣告」として、私の前に立ちはだかった。それは、父と兄とは相容れない性質、つまり、「男」ではなく、「女」であることで、男性同士のホモソーシャルな関係性から排除されたことへのショックと悲哀を意味した。

しかし、私も気持ちの上で負けてはいなかった。将来ペニスが生えてくることへの一縷の望みを抱きつつ、なおも父に食い下がった。しかし、父からの答えは変わらなかった。

父に「ペニスを要求する」という行為は、どう考えても無謀である。しかし、当時の私の父に対するこのような行為は、父からの「男ではない」、つまり、「女であること」の宣告を受けたショックと悲哀におののいている自己を鼓舞するための叱咤激励であった。しかし、そのような自己への叱咤激励も、父からの 2 度にわたる「ペニスを持たない体としての宣告」によって見事に打ち砕かれ、それ以上食い下がってペニスを要求することを許されなかった。自己の身体の性別に強烈な違和感を覚え、かつ、ジェンダーの性別との間の不一致を証明させられた瞬間であった。

このような体験は、FTM の、特に身体的違和感が著しいトランスセクシュアル（TS）に

おいて顕著に見られ、さまざまな手記やインタビュー調査を基にした研究論文においても、ペニスへのこだわりや欠損感についての語りが見受けられる。

４　「自己物語の記述」から見えてくる光と影

以上詳述したように、自己の独特かつ奇妙な恋愛のあり方と、身体が女の子であることへの違和感・それに伴う男の子のジェンダーであることの不一致によって、他の男のことは異なった様相が明確になり、「なんか違うでえ」という感じ方の「なんか」の正体が鮮明になってきた。「自己物語の記述」を元に、前回の投稿と合わせて次のように考察する。

①　自己の不の側面や感情を赤裸々に記述し、論じることによる「影の重要性」の焦点化

「自己物語の記述」に当たってのルールとして徹底して行っていたのは、「自己にとって都合のよいエピソードだけではなく、負のエピソードも含めて記述する」ということであった。そこで、今まで封印し、決して語ってはならないとしてきた、あるいは社会から要請され、教え込まれてきた負の感情や負の部分を赤裸々に論じたことによって、自己の中に内面化している暴力性や排除の構造が露呈してきた。兄への暴力行為という負の行動様式の中に存在していたのは、他の男の子とは「なんか違うでえ」の「なんか」の側面が、容易に言語化できなかったことによる過活動・行動化として表出したものであり、「身体が女の子」という社会的立場上許されないことの裏返しであることが明らかになってきた。このようにして、負の感情や負の側面を、その時期の「影の部分」として赤裸々に語り、論じることであえて焦点化することによって、今まで気づかなかった自己の行動様式に隠されていた重要な問題性に気づかされた。

②自己の体験を社会化する

「自己物語の記述」によって、自己の体験を可視化するという作業を通じて、その可視化した自己の体験を、単なる個人の体験に留めるのではなく、そこから浮かび上がってきた問題を社会化することで、社会の負の仕組みにも目を向けるようになり、あらゆる視点が開かれるようになった。恋愛市場への消極的かかわりというのは、すでにこの時期において、異性愛中心であること、FTM ゲイである自己野恋愛のあり方それ自体への忌むべき感情が、すでにこのころから存在していたことが明らかになり、社会の恋愛のあり方に対する厳格で排他的な側面を垣間見ることができた。「恋愛は二人でするもの」、「男の子にはペニスがあり、女の子にはペニスがない」という事柄が、性別２元論に基づいて自明のように語られることによって、社会に対して身動きが取れないような閉塞感を抱き始めたのもこのころからである。

このようにして、特にこの時期の影の部分を考察することで、その影の部分から光を見出し、その後の行動様式の傾向性を省察することができるのである。

５　終わりに

「光があれば、陰もある」。これは一見すると自明なことであるが、ともすれば光に多く

の焦点が当たりがちになり、陰の部分を排除してしまいたくなる。しかし、「自己物語の記述」は、焦点が当たりやすい「光」よりは、むしろ「影」の部分に焦点を当てるというスタイルによって、そのエピソード特有の問題性が浮かび上がってくる。更に、その問題を社会科することで、社会の負の仕組みをも垣間見ることができ、今まで光であると思っていた事柄が、実は影の部分を構成していることにも気づかされた。

次号からは小学生時代のエピソードを分析するが、ますます「影の部分」への考察によって、更に問題が明らかになってくる。どうかお楽しみに。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士過程）

科後期博士過程）

トランスジェンダーをいきる（４）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

小学生（1）侵襲的介入への嫌悪

これから数回にわたって、小学生時代のエピソード分析を記述する。第１回目は、現在でも自己の課題として残されている、主に女性たちからの侵襲的介入に対する嫌悪、そのの元になっている「世話焼き」、「おせっかい」そして「優しさが怖い」という現象について記述する。

１　盲学校で体験した「女性の園」

私は幼稚園から鍼灸マッサージ師の資格を取得するまでのやく 17 年間、盲学校（現在の視覚特別支援学校）で教育を受けた。盲学校の児童・生徒は圧倒的に男子が多かったにも関わらず、ジェンダーが男である私の周囲には、右を向いても左を向いても、前を向いても後ろを向いても、そして上を向いても下を向いても圧倒的に女性が多かった。小学生のころから、一貫して一クラスの人数が一桁台と少なかった上に、クラスのメンバーはほとんどが女子ばかり、たまに男子と同じクラスになっても、なんらかの事情で女子ばかりになってしまった、という状況下、担任も女性教師が多かった。このような環境の下で、私は自己の位置取りを確保するのが難しかった。すなわち、ジェンダーが男である私にとっては当に、女の園の中に、男が一人混じっているような、また、身体が女性であるという

だけで、自己の意思とは無関係に、女の園の中に無理やり押し込められたような心理状態に置かれた。担任の女性教師によってしばしば女の子としての礼儀作法やジェンダー役割を強制されたため、自己の男性性が崩壊されそうな危機に追い込まれることが多かった。

だが、そのような「女の園」の中で、いつも冷ややかに過ごすことで、かろうじて自己の崩壊されそうな不安定な男性性を何とか保持するすべを見つけた。すなわち、泣いているクラスメートの女の子をなだめようとしない、自分が担任の女性教師から叱責されていても、他人事として理解し、直接応答をしない、怒りっぽい口調で寡黙になることで、事故の感情を封印する、特に小学校１、２年当時、盲学校の近くで祖母と下宿していたときは、祖母の厳しい言いつけを守り、学業を遂行することで、祖母の自慢の「孝行息子」を演じる、といった方法で、「女性の園」との距離をとり続けてきた。その結果、担任の女性教師たちからは、「友達への同情や思いやりが薄い」、「自分の感情を言葉にするのが乏しい」「女の子としての可愛気がない」という評価が下され、通知表に記された。

このような評価は、一見残酷のように思われるが、当時の私にしてみれば、たとえ不安定な男性性ではあっても、その男性性を一定の水準にまで引き上げた、という達成感があったのかもしれない。そのような意味で、女性教師たちからのこのような評価は、私にとってはむしろ「高評」ですらあったといえるだろう。

２　三つの侵襲的介入

小学校３年生から中学校１年生にかけて、盲学校の寄宿舎に入射していた。ジェンダーが男であるとはいえ、身体が女性であるため、女子寮に入れられたのは当然である。園分、「女の園」はいっそう拡大した。

祖母を始め、小学校の担任の教師や寄宿舎の寮母など、私の周りには、世話焼きでおせっかいという侵襲的な介入によるコミュニケーションを図ろうとする女性たちが多かった。この侵襲的な介入には、以下の三つのタイプがあった。

①学業向上を目的とした侵襲的介入

このタイプは、主に担任の教師による学業向上を目的としたかかわり方で、学業を基調としている。したがって、侵襲的な介入の中では、まだ軽度である。そこには、学業という業績構築に関わる要素を含んでいるので、その学業成績を上げるための侵襲的介入はやむを得ないという自己の中の了解可能性によって苦痛を軽減させたといえるだろう。また、一定のまたはそれ以上の学業成績を収めた場合や、表彰状を授与された場合などは、そのことが男の勲章と化して結果をもたらした、という意味で、ジェンダーが男の私の心中を満足させていた。したがって、少々過干渉的な侵襲的介入であっても、結果さえ出せば男性性のランクを向上することができるなら、それに越したことはない、という了解の仕方で、この侵襲的介入を自ら積極的に受け入れた、と言い換えてもいいだろう。

②QOL 向上を目的とした侵襲的介入

このタイプは、小学校 3 年生から中学校 1 年生まで入舎していた盲学校の寄宿舎の寮母のかかわり方で、日常生活の質を向上させることを貴重としている。このかかわり方には、家族から引き離されて入舎している私たちの寂しさに付け込んで、「母親代わり」と称して行われていた侵襲的介入を意味する。したがって、前者の学業向上を目的とした侵襲的介入とは異なり、日常生活の一部始終にわたってきめ細かく、しかも「母親的存在」としての要素が強かったために、その関わり方に粘着性、押し付けがましさ、無用ナおせっかいを見て取った。

③混合型侵襲的介入

このタイプは、祖母に代表されるように、学業と QOL の両者の向上を目的とした混合型の侵襲的介入である。このように記述すると、２重のベルトで締められたような閉塞感を感じるかもしれないが、学業で結果を出しさえすれば、日常生活における問題についての干渉は少なかった。ただし、学業が向上しなければ、日常生活におけるさまざまな問題は容赦なく叱責された。

３　男性性を保持するために編み出した、いたずら心を含んだ想像力

このような侵襲的介入の中でもっとも問題視したのは、寮母たちの関わり方である。つまり、「母親的存在」をベースに、善意と称してさまざまな場面でのおせっかいや押し付けがましいかかわりかたは、ともすれば子供である私たちにもたれかかるような息苦しささえ感じさせた。そのようなかかわり方に反発しながら、私は彼女たちの行動を次のような感性で見ていた。

私は子供のころから祖母によく牛乳を飲まされていた。その際祖母は、必ず牛乳を温め過ぎて、「膜」を張らしてしまった。ところが、私は牛乳の膜が大嫌いであったので、カップの中の牛乳の液体が半分以下になり、膜が舌に触った瞬間、途中で牛乳を飲むのを止めてしまった。すると祖母は、そんな私を叱責し、最後まで、つまり、牛乳の膜も含めて飲むように言った。ところがある日、例によってまた祖母に牛乳を飲まされたとき、下に沈んでいると思われるはずの膜が、この日に限って、カップの一番上に張り付くように張っていた。そこでまた、飲むのを躊躇していると、祖母から厳しく叱責され、やむなく一番上の膜を含め、牛乳を飲んでいた。

このような体験から、以下のようなことを考察した。すなわち、牛乳の膜の触感はねっとりしていて唇や舌にまとわり付くという性質から、母親的存在を前面に打ち出した寮母のかかわりを連想した。その牛乳の膜が、液体内に浮遊するように沈んでいるときは、寮母の怒りをやりすごしている自己を見て取ったり、「私はこれだけあなたのためを思ってしているのに、なぜあなたはわからないの？」という台詞を重ねてみた。また、カップの上にしっかりと張っているときは、「あなたたちのために守ってあげてるのよ。この子たちには私が必要なの」という寮母の勝ち誇ったメッセージを読み取った。さらに、牛乳を「温

め過ぎる」という行為においても注目してみた。「牛乳」という飲み物の性質を母性と位置づけ、その牛乳に負の感情や意味づけをすることによって、自己を納得させていた。特に、熱を加える（反発する）ことで、牛乳に含まれるたんぱく質（母性）が変質し、「膜」を生成するというプロセスを想像したり、その牛乳の膜の張り具合や液体内での膜の浮遊の仕方による母性のあり方を規定しようとするいたずらを含んだ想像力によって、なんとか彼女たちの母性から派生する怒りを楽しんでいた。

このような想像力を武器として用いることで、女子寮の中でもかろうじて男性性を保持したといえるだろう。その心性は、寮母をからかっている無邪気な少年と同じであり、唯一この行為が、女性の身体を否定し、男性のジェンダーを肯定する最良の方法であった。

４　終わりに―「あなたの優しさが怖い」というメッセージ

『神田川』という歌の歌詞の中に、次のようなフレーズがある。

若かったあのころ、なにも怖くなかった、
ただ、あなたの優しさが怖かった

このフレーズは、私が小学生のころから置かれていた「女性の園」の環境になじめなかったもっとも大きな理由であった。すなわち、女性の身体を持ちながら、ジェンダーが男であることで、女性たちから「優しくされる」という行為によって、男性性崩壊への危機を招き、代わって身体が女性であることで、彼女たちから女性への同一化を無条件に要求されていることへの怒りが、私を「優しさの恐怖」に陥れ、優しくされることを拒む結果になるのである。

そして現在でも私は、特に女性たちからの「優しさ」を、川に流すようにして拒み続けながら、男性性を維持しているのかもしれない。その「優しさ」を川に流してしまう前に、次のようなメッセージをどれだけ発信していくかが、今後の私の課題であろう。「私はあなたの優しさが怖い」。

（立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士課程）

トランスジェンダーをいきる（５）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

小学生（２）外発的男性性

１　始めに

「男は寡黙で口数が少なく、感情表現が乏しい。女は多弁でおしゃべりで、感情表現が豊か」、「男は人前で涙を見せたり弱さを吐露したりつまらない言い訳をしたりしない。女は人前で平気で涙を見せたり弱さを吐露したりつまらない言い訳でその場をごまかしたりしようとする」、「男は食事の好き嫌いを言わず、甘い菓子などは好まない。女は食事の好き嫌いを平気で言い、甘い菓子を好む」

こんないささか時代錯誤的で虚構ナ男性性・女性性定義を固く信じて疑わなかった私の前に、ある日、一人の男の子がクラスメートとして現れた。

Ａは活発な男の子。スポーツ万能で優秀な成績を収めていたが、そのことを周囲に吹聴することはなかった。また、特に担任の女性教師との間でいさかいを起こし、その度怒りを露にしたり、寡黙に陥っていた私とは異なり、自由に感情表出したり、その感情を言語化したりするところや、争い事を好まないという性格が、当時の私にとっては「女性性が高い」と写った。男の子でありながら、高い女性性をフルに利用して、周囲とのコミュニケーションを円滑に行っていた彼のそうした行動様式に対して嫌悪感を抱くどころか、いつも羨望のまなざしで見ていた。しかし、彼とのこのような出会いは、下に詳述するように、

これまでの男性性・女性性定義を揺るがす「驚異的な出来事」として、さまざまな場面で立ち表れてきた一方で、女性性の高い彼の行動様式を利用して、更に強固な男性性を形成していくことになる。

今回は、彼の感情表出を通じて、自ら男性性を構築・強化していったものを「外発的男性性」と位置づけ、について記述する。

2　男の子が「泣いたり弱さを吐露したりする」ということにショックを受ける

私は A と出会う前、走っていてつまずき、顔を酷く擦り剥いて血まみれになったことがあった。しかし、ジェンダーが男である私は、「男は涙を見せたり弱さを吐露するべきではない」という定義に従い、大人の前では決して涙を見せずに気丈に振舞っていた。また、教師や周囲の大人たちから酷く叱責されたときも、目にうっすら涙をためることはあっても、決して外に出してはならないという訓辞にも似たような誓いを立てて厳格にそれを守っていた。まして、本屋テレビなどによる感情移入など言語道断、といった具合に、極度に感情移入を自らに禁じていた。

① ところが、男の子である A は、例えば走っていて転んでどこかを打ったと言っては泣いていたし、教師や周囲の大人たちからの叱責に対しても、自分の弱さを吐露しながら謝っていた。また、本を読んでいて感情移入したといっては涙を流しながら、その場面を語っていたこともあった。その度に私は、彼の「泣いたり弱さを吐露したりする」という行為に少々奇異な感情を抱きながらも、なんとかその場を取り繕うようにして、彼の涙を見ないようにしてきた。

そんなある日、私はクラス全員の前で、自分がいじめられていることを告発した。とつとつと語る私の話に、彼がたった一言、「かわいそう！」と言って涙を流した。今まで彼の涙を見ないようにしてきた私であったが、この日は彼の涙を真正面から目撃したこともあって、大きなショックを受け、それ以上語ることをしなかった。

私がショックを受けたのは、自分の話によって彼を泣かせてしまったことではなく、「男の子でも泣く」という事実を目の当たりにしたことであり、もはやその事実から逃げることを赦されず、直視しなければならないという強制にも似た感覚であった。しかし同時にそのことは、男性性に縛られない彼の感情表出のあり方を知った瞬間でもあった。つまり、トランスジェンダーの私とは異なり、トランスジェンダーではない彼の方が「私の話しに感情移入して泣いた」という事実によって、「男は涙を見せない」という自己の男性性定義のハードルを「超えたこと」が、ショックとして立ち表れてきたのである。

それ以来私は、彼が涙を見せる度に、「男は人前で涙を見せないが、女は人前で涙を見せる」という自己の男性性定義を彼に当てはめ、「人前で涙を見せる行為」は女性性の枠組みとして捉えるようになった。その上で彼を男の子ではなく、「女の子」として位置づけた上で、彼のそのような高い女性性を利用し、「男とは、女とは違って、泣ける事柄やスペース

が限られているから、俺の前では思いっきり泣けばよい」というように、男性の涙を見せてもよいキャパシティーを狭く限定することで、自己の男性性をいっそう強化していった。その結果、彼が涙を見せるたびに、自己の中で彼より上位の男性性を担保しながら、男としての懐の深さや面積を拡大していったのである。

３　男の子が「甘いお菓子を口にする」という事実を作文で知る

４年生になって、担任が若い女性教師になってから、私たちはクラスで文集を作成することになり、毎週 2 時間ずつの詩や日記や作文の時間が組み込まれた。1 時間は作文を書く時間、1 時間は先週の作文を文集に発行したものを読みあう時間に割り振られた。その際、自己の書いた作文を自己の肉声で読みあう時間と、クラスメートの作文を互いの肉声で読みあう時間が週ごとに決められた。

たまたまその日は、自己の書いた作文を自己の肉声で読みあう週であった。私の作文はいわゆる「レポート作文」で、事実や事柄などをただ列挙するだけの無味乾燥な内容か、怒りを露にした「怒りマネジメントの低い作文」であった。それに対して X の書いた作文はいわゆる「ラポート作文」で、そのときの情景や感情の変化などを細やかな筆致でわかりやすく描いていた。

文集が配られると、私は真っ先に彼の「ラポート作文」を読んでいたのだが、この日の彼の作文は、私にとっては読むに耐えないものがあった。すなわち、そこに記されていたのは、またしても自己の男性性定義を根本的に揺るがされる驚異的なものであったからだった。

作文の内容は、家でのクリスマスパーティーの場面であった。ケーキを食べようとしたとき、誤ってクリームが指先についてしまい、それを舌でなめると、ふんわりした甘いクリームの味が、口いっぱいに広がった、という、なんともほのぼのした表現であった。

これを読んだ私は、「男の子が甘いお菓子を口にする」という事実と、「指先にくっついたクリームをなめたことを作文に書く」という行為に、２重のショックを受けた。すなわち、「男は甘いお菓子を食べない」という自己の男性性定義を揺るがされたこと、指先にくっついたクリームをなめたことで、クリームのふんわりした甘さを味わったことを作文に「書く」という一連の行為が、「男としてあるまじきこと」として認識したからである。その一方で、「男は甘いお菓子を口にしないが、女は甘いお菓子を口にする」という自己の男性性定義に、彼の一連の行為を当てはめ、そこから彼の女性性を引き出した。その結果、彼に対する「男の癖にこんなこと書いて恥ずかしくないのか」という批難ではなく、凝り固まった男心にぱっと明かりをともしてくれた女の子の存在を、彼の中に見たのである。したがって、この場面でも私は彼の女性性を利用して、自己の男性性を強化していった。

４　外発的男性性形成に見られる性別２元性と、社会とは異質の異性愛規範の構築

上記 2 つのエピソードに共通しているのは、彼のこのような女性性の高さに対して、「凄

いやつ」とか、「俺にはないところを持っている尊敬に値する行為」として認識していたことである。その一方で、「それは、A が身体的に男の子であるから、涙を見せたり弱みを吐露したり、甘いお菓子を口にしてもいいけど、FTM トランスジェンダーの私がそのような一連の行為をすると、女性として見られるので危険である」として、厳格に禁じていた。したがって、いつも私は FTM トランスジェンダーであることを楯に、常に彼の女性性の高い感情表出の仕方に対して距離を置くことで、唯一自己の男性性を外発的に強化する手段を見出した。その結果、私にとって、人前で涙を見せたり弱さを吐露したり、甘いお菓子を口にすることは「当たり前ではないこと」として受け止め、「俺には到底できひん」、「俺やったらようせん」というように、自己の感情をシャットアウトしていたのである。

そこには、男女という性別２元性を疑う余地のない、または男女どちらでも選択の余地はありうる、というようなグレーゾーンを赦さない、という排他的な要素も含まれていた。自己の男性性・女性性の定義に固執し、なおかつ女性性の定義に当てはまるものをシャットアウトさせなければ、外発的男性性を強化することができないという脆弱性を垣間見ることができる。一見強固な男性性を形成しながら、実は３画定規やものさしなどの決まりきった定規がなければ、この外発的男性性はもろくも崩壊してしまう、という危うさも感じられる。

更に、彼の高い女性性を更に高く見積もることによって、自己の外発的男性性が鼓舞され、彼との間に社会とは異質な「異性愛規範」を構築しようとしていた。これは、彼の高い女性性を利用して、彼をジェンダーレベルで女性と見立てて、自己の外発的男性性を鼓舞し、強調することで、通常の身体レベルでの異性愛規範とは異なった仕方で、彼との間でジェンダーレベルでの「逆転した」異性愛規範を構築しようとしていたのである。

５　終わりに

外発的な男性性が鼓舞されるとき。それは、彼らとのコミュニケーションにおいて、彼らの行為が、自己の定義つけた男性性より下位にあると判断した場合、つまり、彼らの行為より、自己の行為のほうが上位の男性性を獲得している、と判断した場合である。この傾向は現在でもおおむね変化していないものの、絶えず彼らとのコミュニケーションにおいて、特に男性性構築に関して、そのつど優劣を意識しなければ、外発的男性性を構築することができない、という脆弱性にも気づき始めた。

次回は、A の女性性の高い感情表出を利用しながらも、それとは別に、ほとんど信仰的に内面化しているもうひとつの自己の男性性を「内発的男性性」と位置づけ、そのエピソード分析を記述する。その上で、外発的男性性と、内発的男性性との相互補完性によって、どのような男性性を形成しようとしてきたかを考察する。

（立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士課程）

トランスジェンダーをいきる（６）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

小学生（3）１内発的男性性

１　始めに

前項では、外発的男性性について、女性性の高い A とのコミュニケーションにおいて、彼の行為が、自己の定義付けた男性性より下位にあると判断した場合、つまり、彼の行為より、自己の行為の方が上位の男性性を獲得している、と判断した場合に鼓舞されることを明らかにした。したがって、絶えず彼とのコミュニケーションにおいて、特に男性性に関して、そのつど優劣を意識しなければ構築することができない脆弱性を持った男性性の領域であることを示した。

本稿は、そのような外発的男性性とは別に、A の高い感情表出を利用しながらも、それとは別にほとんど信仰的に内面化している男性性を「内発的男性性」と定義付けた上で、外発的男性性との相互補完性によって、どのような男性性を構築してきたかについて考察す。。

２　内発的男性性に関わるエピソード分析

内発的男性性は、外界からの刺激によって構築・強化される男性性の領域とは異なり、すでに内面化し、半ば信仰的な男性性の領域、すなわち、外界からの刺激とは無関係に、すでに確固として出来上がった男性性の骨格をなしている部分である。

その内発的男性性強化を下支えしているアイテムが「骨っぽさ」、「怒りっぽさ」、「悪戯っぽさ」、「理窟っぽさ」、「荒っぽさ」、「不良っぽさ」である。これを総称して「6 っぽさ」と呼んでいる。次のエピソード分析は、この「6 っぽさ」が見事に凝縮された内容である。

① エピソードの概要

現在でもそうであるが、私は極めて正義感の強い子供であったから、教師がある特定の生徒をえこひいきする場面には敏感に反応していた。前項で詳述したように、常に優秀な成績を収めていた A は、よく女性教師たちからのえこひいきの対象になっていた。彼に対して憧れと羨望を抱きながらも、女性教師たちからのえこひいき行為に対する彼の盲目的な受け入れに対して、少なからず怒りの感情を抱いていた私は、よく「寡黙になる」という手段で女性教師たちや A に抗議していた。

小学校 4 年生のある日、授業中に考え事をしていたところを、担任の若い女性教師に叱責された。そのとき、体調が優れなかったのか、嫌なことがあったのかは忘れてしまったが、その彼女の叱責が気に障って、2、3 日ほど寡黙に陥った。

いったん寡黙に陥った私を再び会話の中に引き戻すのは至難の業であることは、彼女も含め、クラス全員が知っていた。だが A は授業中や休み時間を問わず、無言の私にあれこれ話かけてきた。にも関わらず、私はそのような彼の関わり方に一切答えないことで、かえって一種の快楽を覚えた。それは、普段彼女からのえこひいき行為を盲目的に受け取っている彼に対する「反抗」が、私を「寡黙」へと駆り立てていることを、彼にも知ってもらいたかったからである。

しかし、いつまでも黙っていてよいのかという疑問が沸きあがってきた。そこで、作文の時間、私は思い切って次のような内容を、彼女にぶつけるようにして抗議文を書いた。

「なんであのとき、いきなり私に「天井向いて」なんて怒ったんや。A がちょっとでも上の空やっても怒らへんのに、なんで私やったら怒るねん。A と私はおんなじ人間ちゃうんか。、、、A と私でもし人間が違うんやったら、どれだけ違うんか言うてみい」

抗議文は、彼女によって読み上げられた。それを聞き終わったとき、クラスは一瞬騒然としたが、A と泣き虫の女の子が、なんとしても私の口を開かせようと説得にかかり、彼女は泣きながら謝っていた。しかし、私はそれにも動じず、今度どんな作戦に出るか、ずっと観察していた。というのは、次の時間が校外学習で、1 年から 6 年まで全員集まるので、そのときに他の学年の教師や生徒たちから話しかけられても黙ったままでいると、彼女の立場を悪くするだろう。だからなんとしてでも私をしゃべらせるために、わざわざこんな時間を設けたのでは？という疑念を抱いていたので、心中で駆け引きをしながらも寡黙を守り続けていた。しかし、A の次のような言葉によって、その形勢を揺るがされた。すなわち、今にも泣き出しそうな声で、「もういい加減にしてよ。僕、そんな牛若さんを見るのがつらいし嫌だ。頼むから僕のためになんかしゃべってくれよ」と言われたのである。「僕」という一人称で感情を吐露した彼の言葉にびっくりしながらも、今にも泣き出しそうな声と哀願の仕方に、ますます男性性が鼓舞されていった。そうだ。もともと寡黙を継続している目的は、確かに彼への反抗ではあったものの、授業中に突然叱責した彼女への抗議である。したがって、これ以上寡黙を継続することは、彼を泣かせてし

まう結果になり、彼女への抗議という当初の目的からは大いに逸脱してしまう。そう考えた私は、いきなりAの方に振り向きざまに、足をばーんと開いて、「わかったよ。あんたのためにしゃべってやる」と、何か決断や覚悟を決めたように男らしく言い放った。周囲は一瞬騒然としながらも、彼は「やったあ！牛若さんがしゃべってくれたあ！」と言って、女の子のように無邪気に喜んでいた。そんな彼の様子に、男として「可愛いやつ」と思いながらも、態度では、「なんて単純なやつめ」というようにふくれ面を決め込んでいた。このようにして、彼の前で乱暴な態度で沈黙を破って男らしくアピールしたこと、そのような態度による彼の女性性を引き出したことに成功したという喜びを味わったのである。

②エピソード分析

上記のエピソードを考察すると、次のようなことが言える。授業中に考え事をしている場面を教師から注意されることは一見どこにでもある光景だが、上記のエピソードでは、そのときの体調や心理状態、更には私に注意した彼女の口調などのさまざまな要因が複雑に絡み合って「寡黙」を引き起こした。その「寡黙」の中核にあったのは、「男は感情を表に出さない」という前節の定義であり、この「寡黙」が「骨っぽさ」と「怒りっぽさ」を象徴している。更に、私が「寡黙」に陥ったことで、Aの女性性が発揮された。すなわち、黙して一言も話さなかった私を無視するのではなく、授業中や休み時間を問わず、粘り強く話しかけていた光景は、ともすれば痛々しささえ感じたほどであった。そのような彼の涙ぐましい関わりに対して、なおいっそう「寡黙」を強め、男性性を誇示した。この場面では、寡黙を継続することで、女性性の高い彼に対して、普段から彼女たちからのえこひいきの対象になっていることへの抗議の意味を含めた「悪戯っぽさ」によって、黙して語らない私を前に、手を焼いている彼をあざ笑うかのように楽しむという心性を垣間見ることができる。

その一方で、「これ以上黙り続けていいのか？」という疑問が沸き上がってきた。なぜなら、寡黙に陥った私への彼の女性性の高い関わり方に対する事実上の「敗北」、つまり、彼の私への粘り強い関わりが、私をそれ以上、寡黙にさせることを躊躇わせたからである。

それと同時に今度は、「男だったらただ黙っていていいのか？」という、自己の男性性を問う疑問が沸きあがってきた。そこで、沈黙を破って自己の感情を言語化して彼女に抗議したのかといえばそうではなかった。私の中では、「沈黙を破る行為」は、たとえ感情を言語化しなくても、無条件に彼女に敗北し、自己の発声によって、今まで堅持してきた男性性が崩壊し、一気に女性に引き戻される危険を意味していた。そこで、次の手段としてとったのが、「寡黙」を継続しつつも、作文の時間に「彼女への抗議文を書く」という行為であり、「理窟っぽさ」を持って自己主張したのである。

彼女によって代読された私の「抗議文」を聞き終わったとき、クラスの中は騒然としていたが、次の校外学習のために、なんとかして私の口を開かせようとする戦略的態度が見

て取れた。彼女の涙を含んだ謝罪・泣き虫の女の子の執拗なまでの説得というのは、私にとってはどちらも女性性を利用した手段での対応であったため、半ば辟易し、疑念を抱きながらも、「沈黙を破る機会」を伺っていた。そこに、A の決め台詞、つまり、「僕」という一人称を背景に、感情を吐露したフレーズによって、形勢を揺るがされ、彼の私への接近行為によって、これ以上の寡黙継続の目的や必要性までもが疑わされた。このことは、私の強固な男性性より、彼の高い女性性の方が勝っていたこと、つまり、女性性の高い彼の関わり方への「全面敗北」を男らしく認めた。その結果、彼の方に振り向きざまに沈黙を破ったことで、「男らしく全面敗北したこと」を態度表明したのである。この態度表明の仕方が「荒っぽさ」、「不良っぽさ」の一面を示している。

しかし、女性性の高い彼への全面敗北を態度表明した先に、更に自己の男性性を揺るがされるような泥沼の敗北が待っていたのかといえばそうではなかった。男らしく全面敗北したことへの態度表明によって、更に彼の高い女性性が引き出されその引き出された彼の高い女性性を自己の心中に取り込むことで、全面敗北した男性性を復元させた。要するに、「負けるが勝ち」と言う言葉通り、全面敗北の中に、ある種の「勝利感」を見出したことによって、それ以上の敗北感を味わうことを食い止めたのである。

上記に示したエピソードには、内発的男性性強化に欠かせない「6 っぽさ」のアイテムが見事に凝縮されている。この「6 っぽさ」は、場面によって単独・複合し、強弱の差を生じさせ、年齢と共に手を変え、品を変えて変容している。

3　外発的男性性との相互補完性――本場の「男」より、更に 1 段高い「男」を目指す

このように、内発的男性性は、A の女性性の高い感情表出を利用しながらも、最終的には自己の信念に基づき、納得した上で行動を規定するという意味で、男性性を半ば信仰的に位置づけ、内面化した領域である。では、このような内発的男性性と、前項で詳述した外発的男性性がどのような相互補完性を持って、男性性を強化していったのだろうか。

「自己物語の記述」では、特に FTM トランスジェンダーとの関連、つまり、服装や行動様式・言葉使いなどの社会的な女性ジェンダーの役割を、周囲から押し付けられたことへの抗議や反発を、どのように外在化してきたかが問われた。ここで明らかになったことは、「本場の「男」より、さらに 1 段高い「男」を目指すこと」であった。すなわち、A を含めた周囲の男の子の服装や行動様式・言葉遣いといった外界からの男性文化を、外発的に自己の体内に取り入れる。しかし、外発的に取り入れた男の子の行動様式や言葉使いの中には、必ずしも男性性を誘発させるものばかりではない。したがって、それらをただ一方的に内面化するだけではなく、前項で示した内発的男性性を強化している「6 っぽさ」を総動員し、ときに脆弱な反応を示す外発的男性性の作用を制するように働く。このことが、さらに 1 段高い男性性を強化する結果になり、「本場の「男」より、さらに 1 段高い「おと

こ」を目指す」という目的達成を生み出すのである。そこには、女性の身体を持ちながら、ジェンダーレベルにおいては、周囲の男の子より、さらに 1 段高い男の子象をいつも信仰的に強化して言った（現在でもそうである）という構図が浮かび上がってくる。「女性の身体である、ましてや視覚に障碍がある」という二重に客体化されやすい現状に対する強い反発と欲望が、外発的・内発的男性性という２種類の男性性を生み出すことで、より男性性を強化させている、といっても過言ではないだろう。

４　終わりに――次回の予告

このようなプロセスで男性性を強化してきたが、早くも危機が訪れる。次回からは２回にわたって、「男性性存続の危機」と題して詳述する。（続く）

立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士課程

トランスジェンダーをいきる（７）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

小学生（４）男性性崩壊の危機――「男らしく耐える」という課題

１　始めに

ちょうど、「9、10 歳の壁」と言われる小学校 4 年生から 5 年生にかけて、立て続けに 2 つの出来事が起こった。この 2 つの出来事は、両者とも私を「男性性崩壊の危機」へと直面させた。まず、２つのエピソードを記述した上で、その体験が現在、どのように現れているかを分析する。

２　A との突然の別れ

①「俺を男にしてくれる女っぽい男の子はもういない」

小学校 4 年生の 2 学期後半辺りから、A が学校に来なくなった。前述したように、高い女性性を利用した彼の行動様式によって、男性性を強化してきた私にとって、この出来事はショックであった。では、なぜそれほどまでに「ショック」だったのだろうか。

私にとって A は、「自分を『男』にしてくれる、女っぽい男の子」であった。彼が私を「男」にしてくれたときというのは、寡黙ながらも冗談を言って彼を笑わせたことや、彼の苦手な算数や点字を教えたことである。この「教える」という行為に至っては、自己の男性性をフルに発揮することができたので、当に「天にも昇りたいような心境」であった。そのような彼の前では安心して「男の子」になることが許されたし、また彼の高い女性性が私をよりいっそう「男」へと駆り立てた。しかし、彼が学校に来なくなったことで、私を男へと駆り立てる女性性の高い人物がいなくなったことがショックとして立ち表れ、自己の

男性性崩壊の危機を迎えることになった。

では、彼以外に女性性の高い男の子はいなかったのだろうか。ここで、当時の盲学校の男子児童の大まかなジェンダー傾向について説明する。

私が通っていた当時の盲学校には、比較的女性性の高い男児が多かった。「視覚障碍のある人たちは無性である」とか、「性別を感じさせない視覚障碍のある人たち」などと表象されることが多いが、実際の盲学校の教育現場や私生活では、障碍のない児童よりジェンダー化された要求や扱いによって、自らの感情を抑圧したり、行動や思考を規定させられていた。「男の子だったら、、、」、「女の子だったら、、、」と、わざわざジェンダーを利用して、個々人の行動や思考性を規制したり規定したりする背景には、「この子達は視覚に障碍はあっても、将来、社会に出しても恥ずかしくない大人にしなければならない」という、盲学校教師や保護者たちの視覚障碍のある児童たちへの強迫的な関わりを垣間見ることができる。つまり、盲学校の教育現場でも私生活においても、個々人が社会の中で生きていく権利保障のための「権利としての社会化」ではなく、視覚中心の「社会適応のための社会化」を個々人に意識化させるためにジェンダーを利用して「一人前の社会人」を生産するための戦略的方法が取られた。

だから、盲学校の教師や保護者から女性性の高い男児たちに対して、「男の子らしくしなさい」と注意されているところを目撃した。しかし、当時の私は、そのような彼等に対して、自己の男性性を強化していったかといえばそうではなかった。このときすでに A に初恋していたので、彼が特別女性性の高い男の子であったというよりは、そのような彼への恋愛感情によって、男性性が鼓舞され、強化されていった結果であろう。

②「男らしく耐えること」による感情の封印

小学校 5 年生になって、担任が再び年配の女性教師になっても、A は学校に来なかった。そこで私はある決心をすることになる。それは、この局面を「男らしく耐えること」、つまり、A がなぜ突然学校に来なくなったのかを、当時の担任の女性教師に聞かない、たとえふとしたことで A の話が話題になったとしても、自分からは絶対にしないし、聞いても聞かなかったことにする、ということであった。それでこそ、男の忍耐、すなわち、男は本当につらいことがあったとき、口数が少なくなる、ということを自身に言い聞かせた上で、A の話それ自体をタブー視していた。そのような感情封印を繰り返した体験の結果、現在でも、自己にとって本当に大事な人であればあるほど、例えば病気の容態や災害時での安否を気遣うことを「男らしくない」とタブー視して感情を封印し、その話題からの逃走を図っているのである。

3　気まぐれな祖母の言動

A が学校に来なくなったことと軌を一にして、「男性性崩壊の危機」に関わったもう 1 つ

の出来事が、「気まぐれな祖母の言動」であった。

①男の子にしてくれた気まぐれな祖母

祖母は、その日の気分や状況で態度をころころと変える人であった。よく言えば気前はよいが、悪く言えば一貫性がなく、思い込みの激しい部分もあった。

当時、私の家では、祖母が最年長であった。「年長者を大事にする」という家訓に従い、祖母のどんな無理難題にも、家族総出で従わなければならなかった。にも関わらず、実際には祖母と両親との間のいざこざは絶えなかった。そのようなとき、祖母はいつでも「最年長者」を楯に、その気まぐれさをいっそう発揮させ、家族の中を混乱させては、しばらくの間家出をすることを繰り返していた。その家出の際、時々私がターゲットとして付き合わされ、しばしば両親と 2 歳年上の兄と離れなければならなかった。

小学校 1 年生から 3 年生の途中まで、実家から盲学校までの道のりが遠いことを理由に、祖母と 2 人で盲学校の近くにアパートを借りて通学していた。祖母との生活の中では、事あるごとに「女の子としての要求」はされていたものの、そのつど「男の子としての要求」へと代入したことによって、ますます男性性を強化していった。だから、そのような祖母に対しては、何のためらいもなく「男の子」になれたのである。

また、家訓に従い、祖母のいうことは何でも素直に聞いていたので、祖母にとっては「自慢の子」として人前で誉めそやされる存在になり、同時にそのことは、子どもであることを理由とした無理難題や弱音を吐くことを許されなかった。そのような厳格さを背景に、自らも祖母に対して、子どもであることを理由とした無理難題や弱音を吐くこと＝「男の子」から「女の子」へと転落する恐れを感じ取っていた。

要するに、私の男性性は、身体が女の子であっても、人前に出たときだけ「自慢の孝行息子」として、祖母からうまく利用された。そのことを「男の子としての喜び」として存分に味わいたかったので、そのような祖母からの戦略的な利用のされ方とは無関係に、とにかく「男の子にしてくれる」というメリットによって、その無理難題をどこまでも引き受けたというのが、当時の私の心境であった。

②短期間の祖母の家出

小学校 5 年生のことである。当時、盲学校の寄宿舎に入舎していたので、週末になると実家に帰省していた。その帰省していた土曜日の夜、例によって、両親と祖母の間で言い争いになった。その原因はどうやら私のことのようであったが、言い争いの詳細についてはなにも聞かされていなかった。

翌日の日曜日の朝、朝食を取っている私を前に、祖母が家出をすると言い出した。祖母は、いったん言い出すと利く耳を持たない人であったことは子供心に知っていたので、そのまま聞いているしかなかった。

これは、後年亡くなった母から聞いた話であるが、祖母が家出をする際、私に「言ってはならないことを言った」と言う。私が記憶していたのは、祖母が泣きながら何かを言ってはいたのだが、その「何か」を記憶していない。その記憶していない「何か」は、生前母が言っていた「言ってはならないこと」に繋がるのかもしれない。しかし、母はその「言ってはならないこと」について口にしなかった。ということは、どのようなことが考えられるだろう。前項で述べたように、A が突然学校に来なくなったことのショックやつらいことなどを、両親や友達や担任の年配の女性教師に吐露することなく、男らしく感情封印してきた。しかも、その感情封印は、A の件だけではなく、他に自己にとってつらいことや悲しいことにも適用された可能性が高く、その「言ってはならないこと」も、自己の記憶から抹殺しなければならなかったほど、残酷な言葉であったことが考えられる。

③再び「男らしく覚悟する」が

しかし、祖母の涙ながらの次のフレーズだけは、今でも記憶に新しい。それは、「たとえ家族や学校の教師や友達がいたとしても、あんたは独立独歩で生きていく覚悟をしなあかん」であった。そこで私の決心は、石のように固まった。すなわち、どうせ A もいなくなったし、これからはどんなにつらいことがあっても、「男らしく覚悟して」生きていく」という自身への宣言であった。

しかし、今から考えると、祖母のフレーズは、幼いころから聞かされていたこととはいえ、この日の私にとっては当に「男らしく覚悟する」という意味で、苦言を呈する内容であった。すでに A がいなくなったこともあって、その覚悟の仕方に中途半端は許されないという厳格さをも伴っていた。

自己を「男にしてくれる人物」が、一気に 2 人もいなくなったことによって、これからの男性性の維持・構築をどのようにしていくか。私は事故を鼓舞するように、小学校 5 年生の自己の心身に重い課題を突きつけた。だが、思ったより、この課題は重すぎて、ほとんどこなすことはできなかった。たとえば、音楽の時間に歌いながらふっと泣き出しそうになったり、座学では教科書を忘れ、授業も上の空だったので、担任の女性教師から叱られ、成績も低空飛行だった。そのような中でも、つらいことを誰にも吐露しなかったことだけが、唯一男性性を堅持していた側面であった。

④「裏切られた決心」は感情の封印へ

しかし、「男らしく覚悟する」決心は、ものの見事に裏切られた。

家出から約 2 週間後、突然祖母が戻ってきた。土曜日、盲学校の寄宿舎に平然とした面持ちで迎えに来た祖母に対し、びっくりしたのと同時に、「なんで今頃俺の前に来やがった」という怒りの感情が沸き上がってきた。では、戻ってきた祖母への「怒り」とはいったいどのようなものであったのか。前述したように、家出する際、涙ながらに私との決別の言葉を発したり、どんなことがあっても誰にも頼らずに独立して生きていくようにと苦言を

呈した上で、不十分ではあったものの「男らしく覚悟すること」を決心させられた。にも関わらず、その決心がたった 2 週間でものの見事に裏切られたことへの怒りであった。しかし、その怒りを決して言葉にすることはなかった。そのときに唯一許されたのは、自己の感情を凍りつかせること、つまり、怒りの感情を感じなくさせることだけであった。また、怒りの感情を言語化するすべを見出せなかったこともあるが、その怒りの感情を言語化することは、即座に女の子へと転落してしまう危険性を意味した。したがって、この場合でも、戻ってきた祖母を黙って受け入れることで、感情を封印した。くしくもこの体験が、「女性の口は、むやみに人の同情を買おうとする道具、女性の決心は決心ではなくてただの気まぐれ」というように、祖母を代表して、自己の女性イメージをいっそう悪いものにしていったのである。

4　感情の封印は、そのまま外傷体験に

上記 2 つのエピソードを通じて考えなくてはならないことは、感情を封印した体験が、そのまま外傷体験として残存し、ことあるごとに出現していることである。なぜ、上記 2 つのエピソードが、未だに外傷体験として残存しているのか。

前者のケースでは、社会人になって A と再会した。そのとき、彼が突然学校に来なくなったことへのショックに対する自己の心理状態や行動様式に関する話をした。彼に対するこのような話は、彼との間での「過去の清算」はなされたものの、この体験がもたらしたもう 1 つの「過去の清算」、すなわち、彼が学校に来なくなったことによるショックやつらいことを誰にも吐露することなく、「忍耐を持って男らしく耐えた」という体験がもたらした「内面の過去の清算」がまったくなされていなかったことに気づかされた。この体験が、そのまま現在にまで持ち込まれた結果、本当に大事な人であればあるほど、その人の消息を確かめようとしない。そればかりか、消息を確かめること＝男らしくないという図式を内面化していることである。

後者のケースでは、しばしば両親との間でいざこざを起こしていた祖母の家出によって引き起こされたつらい体験を誰にも吐露しなかった部分、つまり、「内面の過去の清算」がなされていなかったところは前者と共通しているが、その気まぐれな祖母との「過去の清算」もなされなかったところが、前者との大きな相違点である。しかも、後者のケースでは、家出をする際の不必要な「決心を促す言葉」に対する謝罪の言葉がなかったことが、外傷体験の重度化を引き起こし、いっそう女性イメージを悪くしていった。

したがって、A との「過去の清算」がなされたのは、ジェンダーレベルでの男性同士のホモソーシャルな関係性の下で行われた相互行為であったから、「内面の過去の清算」がなされていなくても、外傷体験の重度化は最小限に留まっている。しかし、祖母との「過去の清算」がなされなかったのは、気まぐれな祖母を代表していっそう悪くなった自己の女性イメージによって、祖母に対してもそれ以上の「過去の清算」を望まなかった。その代わ

りに、外傷体験の重度化を自己の中に「男らしく」引き受けた結果、現在にまで至っている。

5　終わりに

「たかが小学生時代に貸した課題」、「されど小学生時代に貸した課題」。外傷体験は残っているものの、私はそのような自己に拍手と栄誉賞を送りたい。実現不可能な重い課題ではあったが、苦しかった中にも、自らサバイブしようとしていたからである。この時期に流行した歌やテレビ番組など、今ではいとしい思い出として残っている。

うしわか　こうじ（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

トランスジェンダーをいきる（８）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

小学生（5）――父の涙に男の子泣きに泣く

１　初めに

Ａが学校に来なくなったことで、私はある「事件」を起こすことになる。その「事件」が、思わぬ展開で、父の涙に繋がり、「男の子泣きに泣く」という体験をすることになる。

実は、この体験を団先生の授業（家族をテーマにした実習）でシェアした。した。その際、興味深い考察が得られたので、「自己物語の記述」と合わせて詳述する。

２　問題行動の概要と背景

前述したように、私にとってＡが学校似来なくなったことは、（私を精神的に男の子にしてくれる女の子のような男の子はもういない）ということで、ショックとともに、これからどのようにして「男らしく覚悟していくか」という意味で、男性性構築のあり方を問われた重要なイベントであった。だが、実際には、小学校４年生から５年生にかけての私に、このような課題をこなすことは難しかった。

小学校３年生から、盲学校の寄宿舎に入射していた私は、Ａが学校に来なくなってしばらくしたころ、何がきっかけであったかは忘れたが、多分間が指したのだろう、同室の１年下の女の子の鉛筆をほしがるようになった。私も同室の彼女も点字を使用していたので、直接鉛筆を使うことはなかったし、私も両親から何本か鉛筆を買い与えてもらっていたのだったが、彼女が持っている鉛筆の方が新しかったのか、毎日のように彼女の鉛筆ほしさに、「なあ、この鉛筆頂戴」と言っては、彼女の引き出しから鉛筆を取るようになった。その度に彼女は「はい」と言いながら、私の行動を黙認していた。

私にしてみれば、ちゃんと彼女に断りを入れた上で、鉛筆をもらった、という意識があ

ったので、別にそのことで誰からも何も言われないだろうという、安易な気持ちも手伝ってか、最初は１、２本だったのが、日を追うごとにエスカレートし、一気に１０本以上取るようになった。しかし、そうはいっても、自己の行動をまったく正当化していたわけではなかった。

３　問題行動に対する家族の対応

①兄の優しさがかすかな不安を呼ぶ

クリスマスのあくる日、二つ年上の兄が、私を外へ連れ出してくれた。そして、家の庭の土をスコップで穴を掘って、山を作り、夕方まで遊んでいた。

今から考えると、この日の兄は、なんだかやけに優しかった。そのことが、私の心の中を、かすかに不安にさせた。（確かに同質の女の子に「この鉛筆頂戴」と言って取っていったんやけど、これって俺が彼女の鉛筆を盗んだことになるんやろうか。でも、彼女は俺が「頂戴」と言ったとき、１度も「いや」なんて言わなかった。でも、やっぱりこれは「おれが彼女の鉛筆を盗んだこと」になるんやろうか）

②父の涙に男の子泣きに泣く

その日の夜、仕事から帰宅した父に呼び出された。その父の厳然とした呼び出し方から、（もしかして、例の鉛筆のことかな？）と推測し、たちまちの内に真っ青な顔になり、おずおずと返事をした。

父の前で正座をしたとき、父は私に「筆箱を持ってくるように」と命じた。（ついにその話になるんだろうか。やっぱり「盗んだ」と思われて殴られるのかなあ）私はそれこそ「男らしく」覚悟して、、彼女の鉛筆ではちきれそうな筆箱を持って父の前に座り直した。「その筆箱を開けてみろ」言われるがままに筆箱を開けると、鉛筆がコタツのテーブルにばらばらとこぼれた。「これは誰の鉛筆や」そう言って父は１本の短い鉛筆を差し出した。「私の」と答えると、「じゃあ、これは」と言って、今度は丸くて長い鉛筆を差し出した。（これは、彼女に「頂戴」と言って取った鉛筆や）心の中ではそう言ったが言葉にならなかった。「だれのや」少々声を荒げた父を前に、私は凍りつきながら、それでも何とかうそをつく道を探そうとしていた。「誰かにもらったんか」「・・・」、「誰かにこうてもうたんか」「・・・」一行に答えない私に、父はなおも畳み掛けるようにして言った。「お父さんやお母さんは、お前にこんな形の鉛筆をこうてやった覚えはないぞ。この鉛筆はどうしたんや」「これは・・・」と言い掛けたとき、「取ったんか」と静かな声で問いかける父。（別に、「取った」っていう意識はないけど、やっぱり「取った」ことになるんやなあ。もう、ここまで着てしまった以上、本当のことを話すしかない）と思った私は、とりあえず、力なく小さくうなずいた。そして、殴られることを覚悟して、体をちじめながらそのときを待った。すると父は静かな声で次のように聞いてきた。「誰の鉛筆取ったんや」「同じ部屋のひとつ下の

子」「その子は鉛筆をよく使うのか」「私と一緒で、点字を使うから、鉛筆はほとんど使ってない」「じゃあ、なんでその子の鉛筆を取ったんや」、、、。しばらくの会話の後、またまた口を貝のように閉ざしてしまった私に、「確かにお前はお兄ちゃんと違って点字を使うから、鉛筆を持つことがほとんどないので、友達が持っている鉛筆がほしい気持ちはわかる。でも、そんなお前にも、少しだけ鉛筆をこうてやってるやないか。お父さんは、お前をこんな風に、友達のものを取るような子供に育てた覚えはない、、、」そう言って父は静かに泣き出した。

私は子供心に、強烈なショックを受けた。「お前をそんな風に育てた覚えはない」という父のせりふではない。一家の大黒柱である父が、大の男が、子供の私の前で「泣いた」という事実に。父の泣いている姿に、私も泣いた。しかも、「男の子泣き」に。このとき、私は思った。（俺のしたことで父を泣かせてしまったということは、それだけ俺は重大な悪いことをしてしまったことになる）

③そして「男らしく」誓う

年が明けて、３学の始業を前に、家族４人で集まって、もともと持っている私の鉛筆と、盗んだ彼女の鉛筆を仕分ける作業をした。父と兄はナイフで私の鉛筆にしるしを入れた。母は、盗んだ友達の鉛筆を輪ゴムで止めて私に明日、寄宿舎に言ったら、友達にすぐに返すように命じた。その際、両親から、長々と説教をされた記憶はない。

あくる日、寄宿舎に行った私は、真っ先に同質の彼女の引き出しに、輪ゴムで止めた鉛筆をそのまま入れた。そして、机の上に、「鉛筆を盗んでしまってごめんなさい」とだけ書いた手紙を置いた。そして、次のように心に誓った。（そっか。どんなに彼女が「いや」って言わなくても、これはやっぱり「盗んだこと」になるんやな。もう、どんなにつらいことがあっても、絶対に人のものを盗むようなことはしない）と。

４　考察

団先生の授業の実習では、主に父との関係について聞かれたので、そのことを中心に考察する。

① 父が「選ばなかった手段」についての質問

実習の最初に聞かれたことは、「もし、お父さんに殴られていたとしたら、どうなっていると思いますか？」という、父が「選ばなかった手段」についての質問であった。物心ついたときから、「俺は男だ」と思っていたので、「悪いことをしたら殴られること」を覚悟していた。とはいえ、実際に殴られたとしたら、その痛さより何より、（お前に、俺のつらさなんて分からんやろう、いや、わかってたまるか）というように、父に対する憎しみの感情を増幅させ、ひいては盗みがエスカレートしたり、最悪の場合には、万引きの常習犯

にもなりかねないことを想像する。

②父が「殴らなかった意味」についての質問

次に聞かれたことは、「お父さんは、あなたのつらさを誰よりもよく知っていたから、あなたを殴らなかったのではないでしょうか？」という質問である。日ごろから、私と父との関係はあまりよくないので、最初はこの質問に対して否定的に受け止めていた。しかし、父の私への対応は、１対１で話し合ってくれたこと、家族全員の前で私をなじるようなことはしなかったこと、その上で、家族全員で問題を解決してくれたことなどを含めると、父は普段から口下手で、すぐに喧嘩ごしでものを言ったかとおもえば、つらいことを一切口にしない私の胸中を察していたのかもしれない。（A が学校に来なくなったことが、今の俺にとってつらいなんて、口が裂けても言えないし、言ってもしょうがない。それに、そんなこと父の前で言ったら、「やっぱり女の子や」なんて思われるのがいややから、絶対に言ってはならないし、言ってたまるか。そんなことを言ったら男として恥ずかしいし、男が廃る）と強固なまでに口を閉ざしていたことが、父にとっては私以上につらかったのかもしれない。普段なら何かあるごとに、よく私を殴っていた父が、このときだけは「殴らない」という手段を選んだ意味を考えたとき、父との関係に対して、「あまりよくない」と言いながらも、実はこのような「危機を救ってくれたときもあった」という感謝の思いがわきあがってきた。その意味でこの団先生の授業実習は、私にとって、とくに父との関係性について再考するよい機会であった。

５　終わりに――辛い体験をシェアするということ

辛い体験を、ただ辛い思い出としてではなく、何かの機会にシェアすることで、新しい考察が生まれる。その考察を通して、辛い体験が、「そのときに体験しなければ意味をなさない重要なこと」として再び立ち現れてきたとき、それは単なる辛い思い出ではなく、私を納得させる重要な体験として、意義の深いものになるのである。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

トランスジェンダーをいきる（９）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

中学・高校生（1）

今回から中学・高校生に掛けての記述に入る。嫌いだった読書が好きになった「男読み読書術」の発見、冗談が通じなかった「ひもて」から、「もて」へ、そしてついに立ち現れてきた「第２次性徴と恋愛」について、「自己物語の記述」に従って記述する。

「男読み読書術」の変容（１）

１　はじめに

今回から 3 回に分けて、読書が嫌いだった私が、どのようにして読書を楽しみ、現在の研究活動にまで活かすことができるようになったのか、「男読み」という概念を生み出し、読書術を構築してきたプロセスについて詳述する。

２　読書は「男らしくない、非行動的行為」

盲学校時代から私は全盲であったので、点字を使用していた。しかし、私は極めて読書が嫌いな子供であった。しかも、「机の上で、点字図書を読む」という行為は、身体が静止している状態であるから、それだけでも非行動的であり、「男らしくない」というレッテルを自らに貼っていた。

夏休みになると、高校生までは毎年のように、「課題図書」が出され、読書感想文を書くことが義務付けられていた。私は読書感想文の宿題が大の苦手であった。そこで、なんとかこの苦手さを克服するために、夏休みの終わりぐらいになると、寝転んで股を開きながら、腹の上に課題図書の点字本を置いてさらさらと点字を触りながら、形だけは「読書を

した」振りをしていた。だから、読んだしりからざるのようにどんどん内容が抜け落ちていき、結局読み終わっても何の感情も沸きあがってこなかったのは言うまでもない。そのような読書の方法を改めるどころか、「男はもともと本を読むような非行動的行為をするものではない」と言わんばかりに、ただ事実を羅列したようなレポート的な読書感想文を提出して、担任の女性教師から叱責されたことも多かった。そればかりか、「なんで「課題図書」なんて窮屈なものがあるんだろう？おまけに、この「課題図書」ときたら、まったく堅い内容か、お涙長大風の情緒的なものばっかりじゃないか」と、私は毎年の夏休みに出される「課題図書」への憤慨をどんどん強めていった。

この傾向は、読書感想文だけではなく、国語の教科書に掲載されている小説や伝記などを読む課題でも同じであった。私が一番困惑したのは、国語の時間、担任の女性教師から、ある小説や伝記の内容に対して、「作者は何を考えていたのでしょうか？」という質問をされたときであった。(そんなもん、俺は作者とちゃうから分からん) と心では言えたものの、決して声になることはなかった。

また、その小説や伝記の作者の思いや意図に対して、担任の女性教師からの「ここをこのような意図で書かれています」、「彼、彼女（作者のこと）は、このような思いがあって書いているのです」などの解説にも違和感を覚えた。（なんであんた、作者でもないのにそんなことが言えるのさ）この言葉も、心の中では言えたが、決して声になることはなかった。

その背景には、「男はいちいちそういうこと（小説や伝記に関する作者の思いや意図）は言わないもんだ。ましてそのようなことを口にすることは、男として恥ずかしいし、もしうっかりそんなことを言ったら女になってしまう」という恐怖感が、いつも頭の中を支配していた。

3　「男読み」は録音図書から

①録音図書との出会いで「男読み」を発見

小学校 5 年生から 6 年生にかけての 1980 年代前半、『窓際のとっとちゃん』は大ベストセラーになった。この本は、著者の黒柳の小学校時代のことが描かれている。録音図書で、しかも彼女自身の肉声で録音されていたこの本を、年配の女性教師に勧められて、図書室で聞いていた。たちまち本の内容と、彼女の肉声に聞きほれてしまった私は、図書室の先生にお願いして、その本をテープにダビングしていただき、週末になると実家に帰省して、家でそれを聞いていた。

あるとき、例によってその録音図書を聞いていたとき、私は何気なく「ながら族」をしながら聞いていることに気づいた。つまり、録音図書を聞きながら体を動かしたり、他のことをしたりしながら聞くことができることを発見した。それは、読書に対して必ずしも非行動的になる必要性はないという気づきを得た瞬間であり、この体験が私のこれまでの

読書に対する印象を徐々に変容させる契機になった。つまり、読書とは、必ずしも点字で読む必要性はないこと、録音図書でも十分に読書が楽しめること、更に読書のスタイルとして、録音図書であれば、必ずしも体を静止した状態で聞かなくてもよいことがわかった。当時、体を静止して点字図書を読むのが苦手だった私は、この録音図書の「必ずしも非行動的になる必要性はない」というメリットに対して「男らしさ」を付与した上で、このような読書方法を「男読み」と名づけた。ただし、先ほどから録音図書を「読む」ではなく、「聞く」と表記しているのは、まだ当時は録音図書のメリットに対して「男読み」と名づけたのが精一杯で、真の意味で録音図書を「男読みした」という実感には至っていなかったからである。

4　女の子への共感性は必要か

中学校 1 年生になっても、毎週実家に帰省し、実家のカセットテープレコーダーで黒柳の自伝を繰り返し聞いて読んでいた。

そんなある日、次のような場面に遭遇し、はっとした。。以下、該当個所を要約する。

時代は、第 2 次世界大戦が始まる少し前。彼女の通っていた小学校の同じクラスに、大江君というやんちゃな男の子がいた。たまたまその日、おさげをして登校した彼女の前に現れ、「あれえ？とっとちゃんの毛、いつもと違う！」と大声で言った。男の子も気がついてくれたことに嬉しさを感じた彼女は、得意気に彼に「おさげ」を見せた。すると彼は彼女のそばに近づいて、いきなり両手でおさげを持ち、「ああ、今日は疲れたから、ぶら下がるのにちょうどいい。電車のつり革より、楽チンだ！」と言ってぶら下がった。クラスの中で一番体の大きくて太っていた彼が、痩せて小さい彼女のおさげにぶら下がったことで、彼女がよろめいてしりもちをついた。その彼女を立たせようとした彼は、彼女のお下げを持ったまま冗談で「オーエス！オーエス！」と言いながら、運動会の綱引きのようにして引っ張ったことによって、彼女は泣き出し、走って校長室まで行った。校長先生は涙でびしょぬれになった彼女の目の高さまで態勢を低くして、彼女に聞いてみた。彼におさげを引っ張られたことを話した彼女はそこで、校長先生から「泣くなよ。君の髪は、素敵だよ」と慰められたことで、気持ちが治まった。

彼女が校長室を出て、運動場でみんなと遊んでいたとき、彼が頭をかきながら彼女の前にたって、少し間延びした大きい声で、おさげを引っ張ったことに対して謝罪した。そのとき、彼は次のように言った。「校長先生に叱られたよ。女の子には親切に、だって。女の子は大切に、やさしくしてあげなきゃ、いけないってさ！」

彼女が小学校時代というのは、第 2 次世界大戦開始の少し前のことである。一般家庭でも男の子が優遇され、女の子は冷遇されていた時代、「女の子には、やさしく、親切に」という校長先生の言葉は、彼女にとっては不思議でもあり、嬉しくもあり、また、彼にとっては強いショックだった（黒柳, 1981 pp165－169）。

彼女の通っていた小学校は、身体障碍を持った子も多く、1クラスの人数も一般の学校に比べて少なかったようだ。だから、校内の対人関係も密であったことは、校長とのコミュニケーションのあり方を通じて物語っている。

また、この学校の教室は、古くなった電車を教室として利用していた関係上、「電車の教室」と呼んでいたので、教室内につり革もあったのだろう。彼が彼女のお下げを見て「電車のつり革」を連想したのはそのためであろうと予測できる。

ところで、大江君におさげを引っ張られて泣いたとっとちゃんが、走って校長室に行った場面について、当時の私は、その彼女の行動を次のように理解した。すなわち、　私の中では、いくら彼女が子供であったとはいえ、男の子の前で「おさげ」を得意げに見せたという行為が、まずは、彼女自身の性を簡単に男の子の前でさらしたという認識の下、それを彼に引っ張られたことを泣きながら、大の男の校長に話した、という行為が自業自得である、つまり、彼女自身の性を彼に簡単に売ってしまったにも関わらず、それを買った彼に対して「傷ついた」という感情の下、涙を流しながら校長に話したという行為が、「校長への告げ口」として感じ取った。「女の子は、特に男の子の前で、たとえ髪の毛であろうと得意げに見せるものではない」という思考性が、彼女の行為を性的な行為として受け止めた。自ら性を売っておいて、傷ついたと言って泣いている女性たちは多い。多感な時期であったことも手伝ってか、彼女のこのような行為に共感することはできなかった。

それと同時に、戦前の時代背景を鑑みれば、大の男の校長が、小さな女の子を手厚く扱うという行為に対しても違和感があり、彼女にいたずらをした彼に対する「女の子には優しく、親切に」という訓示にも似た言葉をかけたという行為すら、信じがたいものがあった。この言葉は、「どんなに小さな女の子でも、大事にしなくてはいけない」という自己への訓示にも似た感触を覚え、「冗談ではない」という反発を持って打ち消したことを、いまさらながら記憶している。その裏には、女の子にうっかり優しく親切にしてしまうと、彼女から自己の身体の性別に付け込まれて、無理やり女の子にさせられてしまうことへの恐怖感があったからである。

5　終わりに

録音図書によって自ら発見した「男読み」で、徐々に読書に興味を持った私は、中学生から高校生に掛けて、三浦綾子の長編小説『塩狩峠』を録音図書で読んだ。次回は、この『塩狩峠』をベースに、女性への嫌悪と自己の暴力性について詳述する。

うしわかこうじ（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

トランスジェンダーをいきる（１０）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

「男読み読書術」の変容（２）三浦綾子『塩狩峠』を読む

１　始めに

前回から、読書が嫌いだった私が、どのようにして読書を楽しみ、現在の研究活動にまで活かすことができるようになったのか、「男読み」という概念を生み出し、読書術を構築してきたプロセスについて詳述している。今回は、三浦綾子の長編小説『塩狩峠』を「男読み」しながら、自己の男性性と暴力性について記述する。

『塩狩峠』を読んだきっかけは、中学校 2 年生の夏休み、担任の女性教師に勧められたことであった。

この本は、実在した長野政雄の自伝を小説化した内容である。ざっと要約すれば以下のような内容である。

時代は明治の中期で、キリスト教を「耶蘇」と言って忌み嫌われていた時代である。主人公の長野信夫は、東京の本郷で生を受ける。小学生時代まで、父方の祖母と父の 3 人で暮らしていた。その暮らしの中で、信夫は祖母のトセから「お前の母はお前を産んで 2 時間で死んだ」と聞かされて育つ。しかし、祖母の死後、死んだと聞かされていた母が、突然自分の前に現れる。そこで彼は、母がキリスト信者であったことを理由に、彼の出生時、祖母が母を長野家から追い出したことが分かり、ショックを受ける。祖母の死後、信夫は両親と彼の知らない間に生まれた妹と暮らすが、どうしてもキリスト信者である母になじむことができずにもんもんとしながら、キリスト教への入信はありえないことを公言する。小学校時代の親友との別れ、性への目覚めを経験し、20 歳を過ぎて小学校時代に分かれた親友と再会する。そこで、親友の妹に恋をするが、肺病とカリエスで寝たきりの状態であ

ることが分かり、親友の住む北海道に引っ越し、一人暮らしをする。しばらくして、あれほど嫌がっていたキリスト教に入信し、キリスト教青年会などで活躍する。親友の妹の結婚が決まったその日、塩狩峠で鉄道事故が起こり、鉄道職員として乗務していた信夫は、線路に飛び込み、殉職した。

この小説でもっとも共感したのが、事項で詳述するように、小学生時代まで祖母と暮らしていたこと、その暮らしの中での男性性の刷り込み体験、そして、あれほど嫌がっていたキリスト教への入信を前に、聖書の言葉との激しい葛藤の場面である。

２　男の子が女の先生を思うのは「恥」ではないのか

前項で要約したように、主人公の信夫の出生時、祖母は、彼の母親をキリスト教信者であることを理由に、長野家から追い出した。彼は小学生時代まで、祖母と父の 3 人暮らしの環境の中で育つ。

秋も終わりの日曜日、信夫は父に小学校 1 年生のときに担任だった根本芳子先生が退職し、お嫁に行ってしまうことを、つまらなそうに話していた。そこに、縫い物をしていた祖母が、「それはおめでたい話じゃありませんか」と言って、2 人の話に割り込んだ。根本先生が好きだった彼は、祖母の言葉に「おめでたくなんかない」と反発した。その様子に、祖母は彼のそのような口調を戒めながら、他の学年の先生が退職することと、彼とは何の関係があるのかとたしなめる。そして、「そんな女の先生のことなど、男の子は考えるものではありませんよ」という祖母の言葉が、彼をなんとなく不快にさせ、（なんで女の先生のことを男の子が考えたら悪いんだろう）という疑問を持たせる。

そんな彼の様子に、「お母様、先生を慕うことはよいことではありませんか」と助け舟を出したのは父だった。母親のいない彼が女の先生を慕う哀れさ、祖母では母親の代わりにはならないという父の思いがその言葉にこめられている。にも関わらず、祖母は父の言葉に、「男の子が女の先生を思うなんて、女々しい恥ずかしいことですよ」と一蹴する(三浦, 1972 pp22-24)。

私の祖母も、この作品に登場する主人公の祖母とまったく同じ考えの人であり、私自身も小学校の 3 年生くらいまで、信夫と同じような環境で育った。だから、この場面は人事とは思えないほどの共通点が多かった。

しかし、彼との相違点は次のようなことである。たとえば私は、祖母から「女やったらくよくよ考えるもんやない、まして好きになった男の子のことなんて」というフレーズの「女やったら、、、」というフレーズを、「男やったら、、、」とわざわざ代入した上で、女性性の高い男性に対する恋愛感情を口に出すことを禁じていた。また、この作品に登場する彼とは異なり、父との関係性も決してよいとはいえなかったので、たとえ誰かを好きになっ

ても、それを誰にも言うことはなかった。そのような積み重ねが、誰かを好きになることを「恥」とし、まして、男の子が女の子のことを思うことを「女々しい」という心性を構築したといえるだろう。それに加えて私の場合、FTM トランスジェンダーという事情から、当時の自己の女性への身体変容を否定すべく、更に女性を異質な存在とみなした上で、女性を好きになる心性を初めから持ち合わせていなかったことが、ますます女性に対する恋愛感情を「女々しいもの」として意味づけていったことも事実である。

したがって私は、この場面では、祖母の信夫に対する厳しいまでの接し方を擁護し、信夫に対しては、男の子であることを理由に、恋愛感情を淫らに口にするものではない、という厳しい見解を示していた。

3　聖書の言葉から浮かび上がってきた自己の暴力性

次に、信夫が小学校時代に分かれた親友と再会し、その親友の妹に恋をするが、肺病とカリエスで寝たきりの状態であることを知り、東京から親友の住む北海道に引っ越し、一人暮らしをしていたときの場面である。

23 歳を過ぎたある日、信夫が北海道の一人住まいの借家で、妹の夫から送られた聖書を手にとって読んでいた。つまらないと思っていた聖書の中に、次のような成句が信夫の目を釘付けにした。「悪しきものに抵向かうな。人、もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。汝を訴えて、下着を取らんとするものには、上着をも取らせよ」この成句に、彼は、子どものころに教えられた祖母のトセからの言葉を重ね合わせる。「信夫。男の子というものは、一つ殴られたら二つ殴り返すものですよ。三つ殴られたら六つ殴ってやるのです。それでなければ男とはいえません」って。彼は、この 2 つの言葉の間でシミュレーションしながら、「果たしてどちらの自分になりたいか」と自問自答している場面である（三浦，1972 pp296-297)。

聖書の言葉の口語訳は以下である。

悪いものに手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つようなものには、左の頬も向けなさい。あなたを告訴して、下着を取ろうとするものには、上着もやりなさい。（新約聖書、マタイの福音書、5 章 39-40 節）

この場面で私は初めて「主体的な録音図書の『男読み』」を実践した。つまり、信夫の自問自答している場面は、そのまま私の自問自答にも繋がり、「殴られることより、殴り返さないことの方が『男らしい』のか」という共通した自問自答をしていたことに気づかされた。

ここで、父との関係性が浮かび上がってくる。当時の私は、父から殴られると、自らも

殴り返していた。また、父から物を投げられたりすると、自らも父に食事を投げて応戦していた。つまり、「目には目を、歯には歯を」というように、やられたらやり返すことが、「男らしい」と信じて疑わなかった。そこには、「お父さん、なんで私を殴るのか」などの言葉は不要、といわんばかりに、殴りあったり、物を投げつけあったりしている最中は、言葉をさしはさむ予知は与えられていなかった。たとえ、言葉があったとしても、それは互いに攻撃し合う手段としての言葉でしかなかった。つまり、「男は、ものの「言い方」ではなく、「言った内容」ですべてが決まる」という荒っぽさだけが際立っていた。
このような父との関係性から、聖書を否定し、主人公の祖母の教えに同意した。すなわち、「男だったらやられたらやり返すのが当然」という、当に、仕返しが可能かどうかで男性性の有無が決まるというごく単純な根拠に基づいた結論を出したことで、自己の暴力性が浮かび上がってきた。（確かに聖書は正しいことを言っているだろう。しかし現実は、そんな綺麗事ではすまない。「殴られること」より、「殴り返さないこと」の方が「男らしい」という一面はあるのかもしれないが、少なくとも、FTM トランスジェンダーの私に、そんな悠長な考え方は通用しないだろう）

４　終わりに

現在でも時々、『塩狩峠』を再読することがある。本稿では言及しなかった部分で、自己の男性性や暴力性に関して考えさせられる場面は多々ある。しかし、前項で詳述した聖書の言葉から浮かび上がってきた自己の暴力性に関しては、現在でも大きな課題となっている。

次回は、「点字」という文字情報を性格に読むことを通して、これまでの読書方法の変更を迫られ、新たな実線の場へと移行していく内容である。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士課程）

トランスジェンダーをいきる（１１）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

「男読み読書術」の変容（3）灰谷健次郎『太陽の子』を読む

1　始めに

高校生のある日、友人のＣが、点字の本を読んでいた場面ではっとさせられる。そのことをきっかけに、これまでの読書の変革を迫られ、「点字による男読み」を発見し、灰谷健次郎の長編小説『太陽の子』を読む。そして、「点字による『男読み』」が、後に大学進学や、現在の研究活動へと活かされていることに気づく。

2　点字図書でも「男読み」は可能

Ｃは、休み時間になると、よく読書をしていた。そんな彼に、私は時々何気なく、「今読んでる本を、声に出して読んでみてくれる？」と頼んでみた。彼は嫌がることなく、その度ごとに、すぐにその場で声に出して読み始めた。何度かそのようなことを繰り返していたある日、私は彼の点字の読書の仕方に衝撃を受けた。

①「文化的マッチョ」と男性性

最初に衝撃を受けたのは、彼の点字図書との向かい方である。彼は、点字の文字を一つ一つ確認しながら、その確認した文字を単語にするように、まるで１言半句読み落とさない、という正確さを心がけるようにして読んでいた。もし、点字の読み間違いや、読んでいて意味が分からないと判断した場合は、どの辺りから分からなくなったのかを考え、意味が分かるまで何度も何度も読み直していた。最初は、彼のそのような読書の仕方に、辛気臭いような読み方だと思ったのだが、彼が声に出して読書をしているのを繰り返し聞いているうちに、私は、彼と私の間の点字図書との向かい方に、決定的な差異があることに気づいた。

極めて点字による読書が嫌いで、しかも、「点字の読書は男らしくない非行動的行為」とまで思っていた私は、一定の時間内に何ページ読めるかという競争原理に基づいた効率重視の読書で、なんとか学業をやり過ごしていた。だから、そこには当然、どのような内容が書かれているか、などの知的レベルの高い読み方ではなかった。

これに対して、彼の読書の仕方は、点字による文字情報を正確に理解するという１点に集中しているという意味で厳格さを有していた。この厳格さが、「読解力」に結びつき、知的レベルの高い読書の仕方であることを思い知らされた。すなわち、特に点字による読書に対して非行動的で男らしくない、という従来の自己イメージとは別に、点字による文字情報を正確に理解するという彼の１点集中型読書の仕方が「文化的マッチョ」として自己認識され、新たな男性性を発見したような思いであった。確かに点字による読書は、録音による読書と比較して、身体の行動は制限されるものの、知的・心理的行動は録音による読書とは比較にならないほど活発であることに気づかされた。

②「腹式呼吸」で男らしい声を

次に衝撃を受けたのは、読書をしている彼の声の出し方である。話をしているときの彼の声は、さほど低くはないのに、いったん読書モードになると、彼の声は腹に答えるような野太い声に返信してしまうのである。最初は、このような不思議な現象を、どのように理解してよいか分からなかったのだが、保健体育の時間に、「男は腹式呼吸、女は胸式呼吸」と習ったことを思い出した。

何度か彼が読書をしている声を聞いているうちに、私は、読書をしている彼の声の出し方が、「男の基礎的な声の出し方」であると確信した上で、「腹式呼吸で声を出すこと」に徹しようと努めるようになった。そこで、家の中で、片っ端から点字の本を、長時間大声で読んだり、腹筋や背筋などの基礎体力作りに励んだ。もちろん、私の体は「女性」であるから、たとえそのような努力をしても、男のように低い声にはならないのは十分に分かっていた。だが、せめて、腹式呼吸で声を出すことで、男の声の出し方の基礎を身につけたい、というささやかにして切実な願いが、私をそのような行動に駆り立てたのである。

彼のこのような読書の仕方は、改めて尊敬に値した。このことは、今までの自己の点字図書への向かい方の変更を迫られただけではなく、今までの自己の読書の仕方の変革・再構築をも迫られた。そこで、彼のこのような読書方法を「点字による『男読み』」と命名した。

灰谷健次郎『太陽の子』を読む

3　、「自己に課せられた通過儀礼」を読み解く

Cのそのような「点字による男読み」を発見した私は、程なくして彼の読書の仕方を実践した。その実戦舞台になったのが、灰谷健次郎の小説『太陽の子』に登場する、沖縄出身の旧不良少年が、不良から足を洗い、成人男性へと移行していくプロセスを描いた場面である。

①「不良少年」から、「成人男性」へと移行するための通過儀礼

主人公の小学生の女の子の家業である沖縄料亭で、旧不良であった沖縄出身の少年が働いてい

た。彼が不良への道を歩んだ理由は、沖縄出身であるということで、子どものころからあちこちでいじめられていたからであるという。働き始めたころの彼はすさんではいたが、主人公をはじめ、客を含めた沖縄料亭の関係者たちのサポートによって仕事にもなれ、料理の腕前も上げていった。

あるとき、彼が主人公と公園で遊んでいたところを、旧不良仲間に絡まれ、仲間に戻るように説得され、暴行を受けた。仲間たちの暴行に無抵抗であった彼が、そのうちの 1 人の少年から発せられた「根性ないなあ沖縄は」という一言によってきれ、2 人は取っ組み合いになり、重症で病院に搬送された。

そのとき、彼を介抱したのは、長らく彼と離れ離れになっていた母親と、主人公をはじめとする沖縄料亭の関係者たちであった。何度も警察の補導を受けていたのか、警察官を見て暴れる彼の事情聴取を無理やり断行しようとした警察官に対し、沖縄戦の集団自決によって片腕をなくした男が立ちはだかり、警察官に抗議した。主人公に当てた自らの思いや、長らく離れ離れになっていた母親の過去をつづった手紙を最後に、彼は不良から足を洗うことになる（灰谷,1978 pp338-388)。

この場面は、当に、不良から成人男性への「通過儀礼」を描いている。さらに、この小説をさかのぼって読んでみると、この通過儀礼の場面に至るまでには、沖縄料亭で働き始めたころのすさんだ彼の周囲に、たくさんの人的資源があったことを忘れてはならない。

ところで灰谷は、この少年を 15、6 歳と描いている。この時期の男の子であれば、このころから、特に父親との関わりの中で、何らかの形で、少年から成人男性に移行するための「通過儀礼」を経験するだろう。その「通過儀礼」としてなされる儀礼的行為の多くは、父親との身体的・心理的直接対決である。彼の場合は、父親の代わりに、旧不良仲間との身体的・心理的直接対決と、その行為による周囲からの人的サポートによって、この「通過儀礼」を経験したといえるだろう。すなわち、旧不良仲間からの暴行に対して無抵抗であった彼が、沖縄出身であるという理由で「根性がない」と言われたことへの反撃は、彼が旧不良少年であれば必ずしなければならなかった旧不良仲間との身体的・心理的直接対決であり、そのことは、不良少年から成人男性に移行するための「儀礼的行為」を意味している。彼のそのような「儀礼的行為」に対して、長らく離れ離れになっていた彼の母親や、主人公をはじめとする沖縄料亭の関係者のかかわりは、彼が不良少年から成人男性に移行するための「通過儀礼」として乗り切るために、なくてはならなかった人的資源であっただろう。

身体は思春期から成人に達しても、心理面では不安定である。その心理的不安定さに対する人的資源の有無によって、この時期を「通過儀礼」として乗りきることができるかどうかが勝負の分かれ目であることを痛感させられた場面であった。

②自己に課せられた「通過儀礼」を読み解く

では、翻って当時の私は、どのような立ち位置の時期にいたのか。灰谷の描いた少年と対置させてみると、次のようなことがいえる。

当時の私は、C の読書の仕方を目の当たりにして、自己のこれまでの読書の仕方への変革・再

構築を迫られたことによって、自己の生のあり方や知的好奇心が大生になっていった。灰谷が描いていた少年の年齢よりは少し上であった当時の私の年齢は 18、9 歳であっても、これまでの読書の仕方を変革し、再構築することは、私にとって、灰谷の描いていた少年同様、この時期にしなければならなかった「儀礼的行為」という新たな意味性を持っていたことへの気づきを得ることができた。

では、「儀礼的行為」としての意味性を持っていた自己の読書の仕方の変革・再構築に対する周囲からの人的サポートはあったのだろうか。

確かに、親や教師や周囲の大人たちからは、しばしば「本を読みなさい」と言われたことは覚えている。だが、そのほとんどは、「本を読まないと、えらい人になれない」、「あなたは眼が見えなくても、点字や録音図書で本が読めるでしょ？」などの、半ば脅迫的な上から目線でしか、読書の昂揚を進められていなかったので、「人的サポート」とはいえなかった。そのような意味では、読書の仕方の変革・再構築に対する人的サポートが乏しかった、といわざるを得なかった。

しかし、そのような状況の中、彼の「点字による『男読み』実線」は、たとえ彼から「本を読みなさい」などと言われなくても、無言の内に、自己のこれまでの読書の仕方に警鐘を鳴らしたのである。このことが、唯一、私の読書の仕方の変革・再構築に対する人的サポートであり、その数少ない人的サポートをうまく利用した、ということができるだろう。

4　終わりに――点字による「男読み」は、現在の研究活動へ

このように考えてみると、点字による「男読み」の実践は、単なる当時の実践した記憶だけではなく、その記憶がその後の人生においても深く影響している。

そのひとつが、現在、大学院での研究活動である。特に、論文資料を精読する際に、点字による文字情報を正確に読み取り、文意がつかめなくなった、と判断した場合に、もう一度そのつかめなくなった文意のところまで立ち戻ってみる、という読み方は、論文読解に際して重要なことである。

また、点字による「男読み」は、点字による文字情報によって得られた自己理解や自己探求に対して、快楽を喚起し、知的向上心へと発展していくプロセスへと導かれ、このプロセスへの欲求は、際限なく継続することを確信しているのである。

トランスジェンダーをいきる（１２）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

「非もて」から「もて」へ

１　はじめに

今回は、男性性に拘るあまり、寡黙で冗談が通じなかった私が、どのようにして冗談を駆使した言語表現を身に付けたか、その際に意識した「男性からもてること」を含め、今後どのような課題に直面しているかについて記述する。

２　笑顔を要求した女性教師たち

小学生のころの私は、「冗談の通じない堅物」であった。だがそこには、小学生の私なりの「計算」が多分にあった。すなわち、「男はいちいち冗談を言わない」、「男は、言われた冗談にいちいち反応しない」という、自己の強固な男性性に基づき、そのつど冗談を排除していた。

冗談の発信者の多くは、担任の女性教師たちであり、私の苗字や身体の特徴を背景とした質の悪いニックネームもその中に入っていた。当時、私が担任の女性教師たちから発せられたニックネームの一つに、「牛若丸」というのがあった。このニックネームは今でもよく言われるのだが、私はこの「牛若丸」というのが大嫌いであった（今でもそうである）。日本の社会の人たちが、都合よく構築した歴史的人物に対して、何がしかの反発を抱いていたからである。また、当時私は、クラスの中でも痩せていたので、「電柱」だとか、「きゅうり」などの棒状の物を私の体系と関連付けて呼んでいた。私にとって、これらのニックネームは、質の悪い冗談としてしか受け止められなかったので、笑うに値しなかった。その質の悪い冗談を真に受けて怒り、抗議の意思を表明したとき、担任の女性教師たちはいっせいに「笑顔を要求する」という方向性に転じた。その背景には、女性のジェンダー役割として、冗談の質とは無関係に、「笑顔の無償提供」を是とし、そこに教師であることの権力性を上乗せした暴力と恐喝がはっきり見て取れた。そこで私はそのよ

うな女性教師たちの顔前に、「男は、女から求められて笑うような単純な生き物ではない。笑いたいときに自発的に笑うのが男であること」を示した上で、ますます担任の女性教師たちとの確執を拡大していったのである。

一方、特に一部の男子児童たちからもそのような私へのバッシングが強かった。「男・女」「女の癖に根暗なやつ」というブーイングも含め、一部の男子児童たちの中からも、女性ジェンダーを背景にした、冗談の質とは無関係に「笑顔の無償提供」を要求する声が相次いだ。これは、一部の男子児童の中にも、女性としてのジェンダー役割に「笑顔は必須」という心性が内面化していた結果であろう。そのようなバッシングやブーイングにも関わらず、質の悪い冗談やからかいに対しては、徹底的に抗議の意思を表していた。

要するに、小学生の私は今でいう「非もて少年」であった。この「非もて」こそ男の要、といわんばかりに、自己の看板として掲げながら、数々の冗談を「質の悪いもの」として貶めながら、その「非もて看板」をひそかに守っていた。

3　抗議の意思を含めた「うけを狙った悪戯」は、男の子からの賞賛を得られたのか

だが、中学生になって「男の子からもてたい」と考えるようになった。そのきっかけは、男の子同士の友人関係を観察していたときのことである。男の子同士のホモソーシャルな関係性において、「一定の冗談やからかいを受発信する必要性」を痛感した。このことは、男の子から「つまらない根暗なやつ」と思われることによるジェンダーレベルでの少年同士のホモソーシャルな関係性からの脱落に対する恐れや恐怖もあったが、「おもろい少年になりたい」という、自己の男性性のキャラクター変革への挑戦を試みたいという欲求が日々強まっていったからである。すなわち、「男は、冗談を言うものではない、まして冗談に対して、いちいち笑うものではない」という感情を封印した自己のこれまでの男性性のあり方から、「冗談をどのように他者に発信していくか、他者からの冗談をどのようにして軽やかに受信することができるか」というスマートでタフな男性性のあり方を模索しようとして試みた挑戦であった。

しかし、当時の私には、そのような冗談に対する受発信を、他者とのコミュニケーションツールとして円滑に行うスキルはまったく持ち合わせていなかった。特に、他者から発信された冗談に対する免疫力がまったくなかったので、いつも真正面から抗議の意思を表していた。そのような自己に対して男らしくない、つまらないという感情を沸きあがらせたのは、第二次性徴に伴う身体の女性化とジェンダーの男性化の間での葛藤であったことが考えられる。

そこで、まずは自己にとって難しい他者からの冗談への受信者になるのではなく、自らが何らかの形で他者への「うけを狙う発信者になること」を試みた。その試みとして行動化したのが、「うけを狙った悪戯で、抗議の意思を表す方法」、すなわち、直接抗議の意思を表すのではなく、他者からの「うけ」を狙った悪戯で、抗議の意思をカムフラージュすることによって、特に男の子からの賞賛を得たいというイレギュラーな戦略であった。そのターゲットになったのは、中学校 3 年生のときの公民の男性教師であった。

当時のクラスメートは、私を含め、女子ばかりの 4 人であった。彼は女子ばかりのクラスであることを理由に、授業中卑猥な言葉や表現で私たちをからかいの道具として利用していた。女の子として扱われたことへの怒りとは別に、授業をまじめにしないで、卑猥な話題を口にする彼に対する抗議の意思をどうしても表したいという思いで、授業をボイコットし、担任の女性教師を

通じて彼に抗議文を書いた。

ところが、担任の女性教師は、私の抗議文を読むどころか、そのような抗議文を書いた私を叱責した。その叱責した内容の中に、次のような文言があった。「大の男が頭を抱えているという行為に至らしめたあなたの抗議文が、どのような意味を持っているか反省しなさい」。黙しながら逆上した私は、今度は直接彼への抗議の意思を表すために、次の方法を編み出した。

その年のバレンタインデーは、彼の授業があった。私は彼にチョコレートと称して、使用不能になった単3乾電池を、チョコレートの箱に入れ、包装して渡した。授業中にも関わらず、喜んで受け取り、包装紙を開いて愕然としていた彼の反応は、他の女子のクラスメートの「うけ」を誘った。この女子ばかりのクラスで起こった出来事は、たちまち他の学年の男子生徒にも知れ渡り、驚きと要注意人物という、自己にとっては望まない不必要なラベルを添付された。

このようにして、「悪戯」によってカムフラージュされた「抗議の意思」は、どれだけ彼に伝わったのか、また、この「悪戯」によって確かに「うけを狙うこと」は達成したものの、それは当初自己の設定した目的とは大幅にずれた「要注意人物」という不必要なラベルによって、「男の子からの賞賛を得たい」という目的達成の難しさと、スキルの未熟さを同時に痛感した。

4　漫才や落語へのアクセスによる笑いを誘う言語表現の探求

先の悪戯による失敗を踏まえつつ、高校生になってもなおも男の子からの賞賛を得るための探求は続いた。その素材になったのは、漫才や落語による言語表現の場であった。中でも、読売テレビ系の『笑点』は、私の笑いの言語表現を身に付ける格好の素材になった。関西系の方言とは異質な風情で、人々の笑いを誘うという言語表現に魅力を感じたのは、関西生まれ、関西育ちにも関わらず、当時は関西系の笑いを誘う言語表現への強い嫌悪感も手伝って、自己の独創的なキャラクターを他者との間で構築したかったからである。

しかし、そのような言語表現を探求した成果を、他者とのコミュニケーションツールとして使いこなすには相当の時間を要した。自己の表現したい冗談や笑いのネタを、他者に先読みされてしまうということが多々あった。しかも、言語表現の素材にしているネタを利用してアレンジした冗談は、関西系ではないために、ほとんどが関西系である他者との間でしばしばずれが生じ、自己のキャラクターが極端に浮いてしまう場面も多かった。このことは、同じ国内でありながら、文化の差異を表していると言う意味で、関西圏であれば、関西人なりのステータスを身に付けるべきという決め付けや強制が、暗黙のうちに自己に課されたためであろう。

5　点字による「男読み」によって分かってきた関西圏での「笑いを誘うときのステータス」への違和感

では、思い切って、強く嫌悪していた関西系のネタや冗談を話題にした笑いを誘う言語表現を身に付けることへと方向転換したのかといえばそうではなかった。ここで登場してきた最後の手段が、前回詳述した点字による「男読み」で、漫才や落語関連の書籍をはじめ、多方面のジャンルを濫読することによって、さまざまな言語表現のあり方を身に付けていくという手段であった。

確かに、関西圏での笑いを誘う言語表現には、一定のルールがあるようだ。その代表的な手法が、他者から発信された冗談やネタをただ受信するだけでなく、その発信された冗談やネタに「乗る」という方法で、冗談に冗談を重ねて、共に笑いを誘い合うという相互行為によって、社交辞

令をも含めた他者とのコミュニケーションを円滑に図るという役割を果たしている。しかし、この方法は、互いの冗談やネタに対して「乗ること」を強制し、その役割を相互に押し付け合っている。また、他者から発信された冗談やネタが、どんなに笑いを誘うレベルに値しなくても、それを無理して「笑わなければならない」という強制力を生み出している。このことは逆に、その冗談やネタを、笑いへと誘うレベルに引き上げることを暗黙に、時には言語化して相互に要求し合っていることにも繋がる。さらに、複数人の間でこのような笑いを誘う言語表現を伴ったコミュニケーションがなされた場合、その笑いを共に感受することができなかった他者に対する排除ははなはだしく、特にその他者が、何らかの理由で、関西圏との関わりがあればあるほど、関西人としてのステータスを要求される。そこには、同じ関西圏であっても、笑いの感度はそれぞれ異なっているという認識や考慮はまったくなされていない。私が関西系の笑いを誘う言語表現のあり方に強い嫌悪感を抱いた理由は、このような社交辞令をも含めて、冗談やネタに対して相互に「乗ること」への押し付け合い、相互に笑いを誘う言語表現のレベルを高めることへの強制力を発動し合うこと、さらに、複数人の間で交わされる笑いを誘う言語表現を伴ったコミュニケーションに対するリアクションがない・または希薄な他者への排除と、関西人であることへの強烈な仲間意識による他者へのステータスの要求、個々の他者への笑いの感度に対する配慮の欠如であることがわかってきた。

6　終わりに――すべては、「非もて」から「もて」への移行のために

私がこのようにして、「笑いを誘う言語表現」に着目した理由は、「非もて」から「もて」への移行を目指していたからである。そこには、男性性に内在するタフさ・スマートさを単に強調したいというだけでなく、女性の身体を有していても、男であることを表現する媒体としての言語コミュニケーションのあり方を研究することによって、男性同士のホモソーシャルな関係性の中に参入したいという欲求を全面に出す必要性を痛感したからである。

だから、この場合の「もてる」対象は女性ではなく、男性である。すなわち、男として男にもてるには、どのようにすればよいかを、日々考えなければならなかった。

とかく、男性同士のホモソーシャルな関係性においては、「冗談」や「からかい」を「共有すること」を重視し、たとえその冗談やからかいが行き過ぎたものであっても、それをうまく交わさなければ「男としての承認」は得られない。これは、須長が「ハゲをいきる――男性と男らしさの社会学（勁草書房 1999）の中で指摘しているとおり、男性同士の間で「人格のテスト」（須長, 1999 p170）が行われているからであろう。そのような男性同士のホモソーシャルな関係性の中に、不必要な仲間意識の共有を是としない私が参入できるのか。このことは、自己に対するある種の苦渋の問いである。では、この問いに対してどのように結論を出すのかが、現在でも課題として残されている。

うしわかこうじ（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

トランスジェンダーをいきる

（１３）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

第 2 次性徴の出現

１　はじめに

体の性別（セックス）と、自己の認識している性別（ジェンダー）の不一致で一番悩ましいのは、第 2 次性徴の出現である。すなわち、私の場合は、自己の認識している性別（男性）とは逆に、体はどんどん女性になっていくことで、自己の認識している性別との間で乖離が生じる。そのことで、心身ともに苦痛を感じる。それだけではなく、周囲からも体の性別（女性）にふさわしい役割を求められてしまう。

では、私の場合は、どのような形で第 2 次性徴が出現し、どのような苦痛が生じたのか。「自己物語の記述」にしたがって論じる。

２　思春期の身体変容

思春期は私にとっては当に「悪夢の時代」、すなわち、第二次性徴に伴う身体変容によって顕在化してきた身体の性別とジェンダーの性別の「不一致」よりも更に深刻な「乖離」へと認識し始めた時期でもあった。

①「胸のふくらみ」による悪夢への序幕式

小学校 6 年生の夏休みのある日の午後、室内で遊んでいたとき、私は微かな胸の痛みとしこりに違和感を感じた。そのとき私は、たまたま小児がんで亡くなってしまった子どもの本を読んで

いたので、（もしかして、自分の体にもがんが発症したのでは）と思い、一瞬顔が蒼白になった。そして、その日の夜、母に胸の痛みとしこりへの違和感を訴えた。すると、母から返ってきた答えは、私を愕然とさせるものだった。

「あんたも女の子やから、胸が膨らんできたんや。そろそろブラジャーをせんとなあ」

「　この母の答えは、単なる胸のふくらみ」を意識させられただけではなく、私に男性ジェンダーから女性ジェンダーへの移行を迫るイニシエーションであり、もはや言葉を差し挟む余地を与えなかった。軌を一にして、このころから、両親や周囲の大人たちからも、私に女性としてのジェンダー役割を強制するようになった。当に、「悪夢への除幕式」であった。

②新たな父からの宣告

悪夢への除幕式に続いて、次に訪れたのはまたしても父からの宣告であった。

子どものころから、父とプロレスごっこをするのが楽しみの１つであった私は、中学校１年生になっても、父にプロレスごっこをせがんでいた。このプロレスごっこは、盲学校の寄宿舎から週末ごとに実家に帰省していた私が、唯一「男の子になれる（もしくはなってもよい）貴重な場」として機能していた。

そんなある日、私は父の異変に気づいた。それは、どんな技でも向かい合って対応してくれた父とは違う、何かよそよそしいムードが漂っていた。そこで私は父に、なぜいつもとは違うよそよそしい態度をするのかについて聞いてみた。すると、父からは予想もしなかった答えが返って来た。私は父からの「予想もしなかった答え」に、思わず涙を流してしまった。

「お前ももう女の子やもんなあ･･･」

この父の答えは、幼少期のころに、「お前は女の子やから、ちんちんは生えてきいひん」という答えと同様、「宣告」という形で私の身に降りかかってきた。しかし、「宣告」の意味するところは、幼少期のころとは違った「神聖かつ厳格な宣告」として自己認識させられた。つまり、自己の女性への身体変容によって、それまで唯一機能していた「男の子になれる（もしくはなってもよい）貴重な場」が、父からの新たな宣告によって奪われたことである。

また、父の前で流した涙というのは、父が自己の女性への身体変容に対して、単に手加減しただけではなく、女性への身体変容によって、ジェンダーの性別を男性から女性へと変更させられたことへの屈辱感であった。そのことが、「一人前扱いされないようになった」こと、つまり、ホモソーシャルな男性同士の関係性から排除されたことを意味した。

③身体化された症状は「不良になりきれなかった自己への消化不良」

小学校３年生から中学校１年生にかけて、盲学校の寄宿舎生活を送っていた私は、女子寮の中でも粗暴な行為と寡黙を繰り返していた。その行動様式が「女の子らしくない」という理由でいじめの対象になった。また、第Ⅲ章で詳述したように、寮母たちからも「母親代わり」と称して、不必要な善意を押し付けられたことに対して反抗していた。

その行動様式は中学校１年生になり、高校の女子の先輩方と同室になってから更に顕著になった。それは、女性への身体変容にしたがって、男性ジェンダーとの間の不一致が更に顕在化し、

自暴自棄に陥ったことでいっそう粗暴な行為と寡黙が強化されていったからである。女子の先輩方とのいざこざが絶えなかったことを理由に、中学校2年生から電車通学に切り替え、最寄り駅で同じクラスの女子の友達と待ち合わせて一緒に盲学校に通うようになった。

そのころのクラスは、私を含めて女子ばかりの4人、担任は女性教師という、私にとっては当に、女の園の中に、男が一人ぽつんといるような状況であった。そのために、寄宿舎での生活と同様、クラスの中でも浮いた存在、つまり、「空気を読めない逸脱した存在」として扱われ、いじめの対象になった。また、クラスの中で何か事件が起こる度に、いつも担任の女性教師からの叱責のターゲットにもなっていた。そのような女性たちからの扱いに対して、いつも「粗暴な行為と寡黙」という決まった行動パターンで自己の感情を言葉にすることなく、男らしく封印してきた。

しかし、「男らしく封印してきた感情」は、思わぬ手段で自己の身体に警告を発するようになった。ある日、いつものように友達と電車通学していたとき、突然下痢や腹痛に襲われた。その日は学校を欠席し、家に引き返して病院で診察を受けたが、異常は見つからなかった。それ以後、ほとんど毎日のように、いつも決まった駅で下痢や腹痛・時には嘔吐を催して途中下車を余儀なくし、場合によっては学校を欠席した日も出てきた。

そのような症状に悩まされ、途中下車して学校を欠席し、家に引き返した私に、祖母は、「何で引き返してきたんや、お前はそんな弱虫やったんか」と罵倒した。私は、祖母から罵倒される度に、「ああ俺は何でこんなに「男らしくない」んか」って嘆くしかなかった。

祖母は私がクラスや担任の女性教師からいじめられていたことは知っていたものの、そのような逆境に耐えることこそが「女の子」であり、将来独立するための試金石であると思っていたのだろう。ところが、祖母の私への女の子としての役割期待をすべて「男の子」に代入していた私にとっては、祖母からの「弱虫」という言葉、女性たちからいじめられたことによる腹痛や下痢などの身体化された症状が出現したこと、その身体化された症状に屈して学校を欠席したこと、更には、女性への身体変容と、男性ジェンダーとの間をうまく統合できずに悶々としている自己に対する「弱さ」が、そのまま「男らしくないこと」と認識し、ますます自暴自棄に陥った。

また、祖母罵倒されたことによって、このような身体化された症状が、登校拒否を表していることにもうすうす気づいていた。しかし、登校拒否をすると、ますます女性たちからのいじめへの敗北を意味するので、男らしく耐えていた。そこには、「男は攻撃されないもの」、あるいは、「まして、男が女から攻撃されるなんてありえない」、「攻撃される男に問題・欠陥あり」など、「男は攻撃しても攻撃されない」という思い込みが内面化していたのだろう。

そのような心性の下、私は自ら「不良になりきれない自己」に直面した。当時、「不良」をテーマにした歌やドラマなどのメディアの影響もあって、「不良」に憧れていた。そこに描かれていた「不良」とは、粗暴な行為に加え、多弁で反抗的な口調、序列意識の厳格化などであり、女子ばかりのクラスの中や担任の女性教師の前で発揮してみたい行動様式であった。しかし、現実はといえば、「粗暴な行為」のわりに「寡黙」によって感情を封印していたために、根っからの「不良」になりきれなかった。その代わり、腹痛や下痢・嘔吐などの身体化された「消化不良」が出現したことは、私にとっては皮肉な結果であったと言わざるを得ない。

④身体化された症状のもう１つの側面

中学校３年生の夏休み前、原因不明の高熱に襲われ、学校を欠席した。その２日後、ついに「あってはならないこと」が自己の身に起きてしまった。

他の女子より遅ればせながら、私にもついに「初潮」が来訪した。それは、今まで味わったことのなかった「有無を言わせぬ身体感覚」で、私に男性ジェンダーから女性ジェンダーへの変更を迫る現象として、いっそう明確に突きつけられた。

前項で述べたように、腹痛や下痢・嘔吐などの身体化された症状は、確かに登校拒否の症状としての役割を果たしていた。その一方で、この身体化された症状は、初潮来訪に対する拒否反応の前段階としての役割をも果たし、「原因不明の高熱」は、いよいよ初潮来訪を警告するとどめの症状であったと理解することができる。

よく、「初潮になったら赤飯を炊いてもらう」という話があるが、私の場合はどうだったか、覚えていない。よほど、初潮来訪への違和感や拒否感が鮮明だったのだろう。

⑤レイプ・妊娠への妄想に悩まされる

初潮を最後に、女性への身体変容が完了すると、今度はレイプ・妊娠に対する妄想に悩まされた。

高校生のころ、交際していた男性がいたとはいえ、親密な関係性を構築するまでには至らなかった。ただし、交際していたとはいえ、決して自身が女性として、相手の男性を好きになったのではなく、男性として相手の男性を好きになっていたので、ジェンダーレベルではゲイである。それにも関わらず、当時視聴していたドラマの１シーンで、レイプされた女性が妊娠してしまった場面への強烈なショックが引き金になり、それ以来、レイプ・妊娠に対する妄想に悩まされた。さらに、そのレイプされ、妊娠してしまった女性の身体と自己の体との距離を適切に取ることができずに、このレイプ・妊娠の場面を直に感じてしまったことへの恐れ、つまり、実際はレイプされたり、妊娠させられたりしていなくても、いつ自己の身に降りかかるかという予期不安が重なった。それは、ジェンダーレベルで「男が妊娠するなんてあってはならない」という強固な思い込みも手伝って、完了した自己の女性の身体を否定しつつも、現実にはレイプ・妊娠する可能性を否定できないことへの予期不安に悩んでいる自己に対する「男らしくない」という否定的感情が、更に妄想を強化していった。そこには、盲学校教育の中で教えられた保健体育などの授業で、「女は妊娠する」という内容を自明として受け止めていたことも関与しているだろう。

⑥私にもちょっとした「変声期」が

最後に、私にとって残酷だった第２次性徴の中でも、ちょっとした「嬉しいエピソード」を紹介しよう。

中学１年の音楽の時間に合唱をしているときである。合唱のパートを選ぶときに、先生が突然私に言った。「あれ！もしかして変声期？」。そのとき、私は「まさか」とは思いながらも、他の女子とは違って、自己の声が少しずつ低くなってきてるんだろうか、と思い、にやにやしてしま

った。女子にも多少の「変声期」があるというのは当時知ってはいたものの、他の女子とは異なって、自己の「変声期」が、音楽の先生である他者に気づかれていることへの優越感を覚えたことを今でも覚えている。

3　終わりに

第 2 次性徴に差し掛かったとき、誰しもが少なからず「戸惑い」を覚えるだろう。その現象は、男女に関わらず同じであろう。問題は、私のように、体の性別と、自己の認識しているジェンダーの性別が不一致である場合、この第 2 次性徴とどのように「付き合うか」である。

次回は、FTM トランスジェンダーの自己の恋愛または恋愛感情のあり方について記述する。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

トランスジェンダーをいきる（１４）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

「思癖」と「嗜癖」に挟まれた恋愛または恋愛感情

「恋愛市場主義」を問い直す

1　はじめに

「今、好きな人はいますか？」、「今、恋愛してますか？」

この手の質問をされる度、私は答えにつまってしまう。なぜだろうか。

確かに、「誰かに恋愛したり、恋愛感情を抱く」という感覚は、それだけで胸がときめき、どきどきする、あるいはあまりにも相手への思いが強すぎて、何も手につかない、ということもある。だが、基本的には、恋愛または恋愛感情を抱いたときの感情の動きというのは、心身ともに悩みながらも、華やいだ気分になる、と考えられているようだ。

しかし、今回テーマにする恋愛または恋愛感情というのは、そうした通常の「心身ともに悩みながらも華やいだ気分」という性質のものではない。

自己の恋愛または恋愛感情に伴う行動様式は、恋愛対象になっている他者への思い癖（思癖）と、アディクション（嗜癖）によって、特異な様相を示す。今回は、自己のそうした恋愛または恋愛感情に対してどのような行動様式をとるか、またそうした恋愛または恋愛感情をなぜ「嗜癖的」と言わなければならないのかについて記述した上で、社会に内在する「恋愛市場主義」を問い直す。。

2　そもそも私にとって、「恋愛」とは何か

『広辞苑』（第 6 班）には、「恋愛」について、以下のように記述されている。

「love の訳語。男女が互いに相手を恋い慕うこと。また、その感情」

ついでに、「恋」というのも調べてみると、

「1　一緒に生活できない人や亡くなった人に強く引かれて、切なく思うこと。また、その心。特に、男女間の思慕の情。恋慕。恋愛。」

なるほど。恋愛というものは、「男女間でそれぞれが思いやったり、思いやられたりするものか。この定義に従うとすれば、身体・書類上の性別は女性・性自認の性別は男性という私のようなケースではいったいどのように考えればよいのか、という疑問が沸きあがってくる。

これは、GID（性同一性障害）当事者から聞いた話であるが、身体・書類上の性別は女性・性自認が男性（FTM）のやく 90 パーセント以上は、ヘテロまたはバイセクシュアルの女性を恋愛対象にしているようだ。ところが、私に限っていえば、恋愛対象は女性ではない。そうではなくて、女性性の高い男性である。女性性の高い男性とは、あくまで私の主観的な間隔であって、例えば声のキーが通常の男性より高い、背が低い、顔の髭が薄いなどの身体的にも女性的であるという側面もあるが、むしろそれよりは、細やかな感情表出、周囲への気配りの高さ、涙もろい部分といった「内面的な女性性」と、生真面目さといった「文化的マッチョな側面」の両面に焦点が当たりやすい。すなわち、心身共に男性であること、それでいて、内面は女性性が高く、マッチョな生真面目さを持ち合わせていることの 3 条件のうちの全部または 2 つを満たしていれば、恋愛対象になりやすい。この現象はすでに子供のころから自覚しており、現在でも普遍的な習性として、自己の中に顕在化している。

このように考えてみると、私にとっての「恋愛」というのは、単なる男女間で恋い慕い合うのでもなければ、大多数の FTM トランスジェンダーの人たちのように、ヘテロまたはバイセクシュアル女性を恋い慕うのでもない。私にとっての恋愛とは、恋愛対象は男性であるから、体・書類上の性別は女性であることで、一見異性愛のように思われるが、性自認が男性であり、しかもこの男性という性自認を中心にしていることから、ジェンダーレベルでは男性同性愛という「ねじれ現象」が生じているのである。

3　「ねじれ現象」の中で生じた恋愛または恋愛感情に伴う３つのフォビア

このようなねじれ現象の下で生じた恋愛または恋愛感情を自覚し始めた初期のころに、下記に示すような 3 つの「フォビア」によって、恋愛または恋愛感情を「忌むべきもの」として自己の中から排除しようとする現象である。

① ホモフォビア

② 前述したように、私の恋愛対象は、女性性の高い男性であるが、彼らの多くは、身体・性自認ともに男性として一致していると思われる。したがって、私の性嗜好というのは、身体レベルではヘテロ嗜好・ジェンダーレベルではゲイ嗜好である。身体・ジェンダーともに圧倒的にヘテロ嗜好の恋愛市場においては、私のジェンダーレベルでのゲイ嗜好は容認されない。そればかりか、ジェンダーがゲイ嗜好であることで、他者とは異質の存在であると自覚し、自己への嫌悪感が生じ、恋愛感情を封鎖する。

③　②ヘテロフォビア

④　女性の身体を否定している私が、周囲からヘテロ嗜好とみなされた場合、性自認が男性であることを否定され、無理やり女性のジェンダーを押し付けられる。このような破滅の危機を防ぐために、自らヘテロ嗜好であるとみなされることに抵抗し、恋愛感情を封鎖する。

⑤　③恋愛フォビア

⑥　上記 2 つのフォビアによって恋愛感情を封鎖することで､恋愛対象になっている男性たちとの間で、いったんつながりを断ち切り、周囲から恋愛感情をひた隠しにし、自ら恋愛感情を「忌むべき感情」として排除しようとする。私はこのような現象を、「恋愛フォビア」と呼んでいる。

4　恋愛または恋愛感情に伴う男性性の構築

恋愛または恋愛感情を自覚した初期の後半になると、徐々に 3 つのフォビアが緩和され、恋愛対象になっている男性たちとの関係性を構築しようとする。しかし、いざ彼らとの関係性を構築しようとすると、心理的緊張や注意散漫などを引き起こし、自ら構築してきた男性性に悪影響を及ぼす。そこで、次の段階では、いったん自覚した恋愛または恋愛感情に対して否認・抵抗するために、行動が活発化したり、さまざまな業績を構築するなどして、自らの男性性を意地・向上しようとする時期に移行する。たとえば、スポーツや学業でよい成績を収める、芸術や創作活動では、新しい発想によって一つの作品を生み出す、持ち物や服装が一気に男性化したり、スポーツ系ブランドを着用する、などのファッションのイメージチェンジを試みる。

このような行動様式の背景には、恋愛対象になっている男性たちへの一方的な自己の「思い癖（思癖)」の要素が強い。すなわち、自己の一方的な妄想によって、恋愛対象になっている男性たちの存在を自己の中で肥大化させることによって､「フィクションとしての監視のまなざし」を自ら構築することで、あたかもそこに彼がいるかのような錯覚をも引き起こす。そのことが､「思い癖（思癖)」として、自己の恋愛感情の一端を担い、ますます男性性を意地・向上させる結果に繋がるのである。

5　嗜癖的恋愛―あくなき男性性追及

しかし､このような恋愛または恋愛感情が長続きするわけではない｡突如として倦怠期が訪れ、今まで構築してきたスポーツや学業成績が落ち始め、男性性の意地・向上への意欲も減退するなど、いわゆる「バーンアウト現象」が生じる。しかし、いつまでもこの「バーンアウト現象」に留まっているわけにはいかない。そこで、新たな恋愛対象者を見つけて、再び「忌むべきはずの恋愛または恋愛感情」を体験しながら、男性性を意地・向上させる。このサイクルから抜け出せない、あるいはこのサイクルによって、あくなき男性性の追及をある種「楽しんでいるところ」が､「恋愛への嗜癖性」といわなければならない｡｡

また、恋愛対象の男性によって、自らの男性性を意地・向上していくということは、それだけで恋愛または恋愛感情が、一種の格闘技としての意味性を持ち、恐れや恐怖を含んだ恋愛との勝負を繰り広げているようにも思える。つまり、私にとって恋愛または恋愛感情というのは、決して華やいだ甘いにおいのするものではなく、そこに人生の勝負氏としての意味をも含んでいるよ

うな気がするのである。

6　終わりに――恋愛市場主義を問い直す

現在でも、このような「嗜癖的恋愛」を繰り返しているのだが、ここにきて、恋愛または恋愛感情に変化が表れている。

「あなたは自信のある人だから、恋愛してそうな気がする」

あるとき私は、友人からそのように言われた。そこで私は逆に、友人にこう聞き返した。

「恋愛してるからって､それだけで人は自信があるように見えるんですか？恋愛してなくても、それなりに自信を持って生きている人は多いはずですよ」

友人が私に言った言葉は、社会に内在する「恋愛市場主義」に基づいているといえるだろう。また、その友人は、私が FTM トランスジェンダーであることを知っているので、恋愛対象を女性であると思っていたのかもしれない。しかし、いずれにせよ、恋愛をしているからといって、「自信がありそうだ」とか､「心理的に安定している」などと思われることに、私は疑問を抱く。なぜなら、これまで述べてきたように、私にとっての「恋愛」というのが、一般に考えられている「恋愛」とは質を異にしているからだ。恋愛しているかどうかに関わらず、それぞれがそれぞれの生きかたをしていればよい。そういう意味で、今一度､「恋愛市場主義」を見直す必要があるのではないだろうかと私は考える。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

トランスジェンダーをいきる（１５）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

私と三療とトランスジェンダー

1　はじめに

「三療」とは、あんまマッサージ指圧・鍼・灸の総称で、視覚に障碍のある私達の職業選択として、古い歴史を持っている。

高校卒業後、3 年の就業年限を経て、免許を取得し、将来、病院や治療院に勤務したり、自宅で治療院を開業したりして生計を立てていくというのが、視覚に障碍のある人の社会的ステータスとして自明化されている名残は、現在でも残っている。

私も例外なく、高校卒業後、三療の免許取得のために、盲学校の専攻科理療科に進学した。その勉学を進めていく中で、特に心身の性別の不一致によるさまざまな違和感と直面し、どのように対処したかについて記述する。

また、治療院で女性として働くということがどのような意味を持っていたか、そして現在、男性として就職し、在宅マッサージという私にとっては新しい仕事に着くことになったことで、私と三療とトランスジェンダーとが、対人援助の場面で、今後どのようなかかわりを持つのかについて記述する。

2　あんまマッサージ指圧・鍼・灸免許取得の勉学におけるさまざまな場面での性別違和感

①　基礎医学・臨床医学・東洋医学の学びにおける自己の身体の性別違和感からの逃走

専攻科理療科に進学して、基礎医学・臨床医学・東洋医学を学んでいく中で、「男女の性別の

差異」は付き物であった。基礎医学では、例えば解剖学や生理学のように、人間の体の骨格や筋肉の付き方・運動能力などの男女の差異を生態観察や模型によって触察することを通じて、自己の体内にある細い骨格を否定し、太い骨格を自己のものであるべきだというように、自己の身体を「間違った身体」として認識した。また、臨床医学では、統計的に男女によってかかりやすい疾患を逐次反転させ、自己の身体は男性にかかりやすい脳卒中や高血圧症などであって、女性にかかりやすい骨そしょう症や貧血などにはかからない、というように自己説得していた。

東洋医学では、総合的に患者を診るというスタンスが基本である。にも関わらず、男女の性別の差異は否めないということに、いやというほど気づかされた。

東洋医学の中でも特に注目したのが「陰陽論」である。「陰陽論」は、古代中国に起源を持つ自然哲学思想である。最初は、カオスのような宇宙万物であると考え、その混沌とした中から明るい光に満ちた陽気が上昇して天となり、重くにごった陰気が下降して地となった。この陰と陽の2つの気によって、宇宙万物のさまざまな事象を理解しようとしたのが陰陽説であった。

陰と陽は、もともと天候と関係する言葉で、陰は曇りや日陰・陽は日差しや日向をさしていたが、BC4世紀ごろ、すべての事物において、消極的なものを陰、積極的なものを陽とみなす「陰陽二元論」哲学原理に体系化された。そこでは、陰陽は、共に対立する性質を現しており、受動的な性質を陰（女・弱・静・地・月・冬・裏など)、能動的な性質を陽（男・強・動・天・日・夏・表など）に分類した（汪, 2011 pp50-51)。

このような東洋医学の哲学思想を受けて、自己の身体を、男のように陽の性質を持ち、女のような陰の性質は持たない、というように、陰陽論を自己の都合のよいように利用して、男女を二分させ、自己を男性の部類に帰属させていた。

このようにして、さまざまな医学の学びに置いて、随時自己の性別に違和感を覚えながらも、自己を男性の生き物として帰属させることによって、「性別違和感からの逃走」を図りながら勉学に励んでいた。

②マッサージ実技は、男女の体力の差異と体重差が表面化した「修羅場」

男女の体力の差異がもっとも表面化した場が、マッサージ実技であった。女性の身体であるということで、マッサージ実技では劣位の位置に立たされ、自己の身体がマッサージの術者（マッサージをする側)・非術者（マッサージを受ける側）の別を問わず拒絶していた。加えて当時は、同じクラスメートの女子に比して痩せ型で筋肉や筋力がなかったため、女子の中でも劣位の座は変化しなかった。そのことが、技術の向上を阻み、比較的技術の優れたクラスメートの中で、私の技術だけは「下手のピカ 1」という烙印を押されるくらい、他のクラスメートとの技術の差は歴然としていた。そのような状況の中で、もともと体を動かすことが好きだった私は、スポーツを通じて体力を身に付け、それに伴って技術も向上してきたものの、マッサージ実技への拒絶の仕方に変化はなかった。

③鍼実技の性質から、自己の男性性を見出し、「武器」として技術向上へ

マッサージ実技が修羅場であったのに対し、鍼灸の実技はオアシスの場、つまり、鍼灸の実技

は、男女の体力の差異がほとんど認められないという利点によって、逆にクラスの中でもトップの技術を維持していた。中でも、マッサージ施術では解消できない凝りや炎症性のある痛みへの鍼施術の即効性は、即効性＝男性性、すなわち、もんでさすって解消できなければ鍼を刺して解消する、炎症性の痛みには、下手に長くもむより鍼の弱刺激で短時間の施術、というように、鍼施術の性質の中に男性性を見出した。ここでは、マッサージ施術と鍼施術を対比させ、マッサージ施術の体表に当たる面積の広さや治療に要する時間の長さ、コミュニケーションツールへのアクセスのしやすさから、女性性と位置付け、逆に鍼施術はピンポイント性の刺激による絶大な治療効果、マッサージ施術に比して体表の当たる面積が狭く、コミュニケーションツールへのアクセスの希薄さという性質から、男性性と位置づけた。その上で、男性性の高い鍼の技術を武器として向上させることで、自己の身体への性別違和感に対処した。したがって、前述したように、マッサージの技術が鍼の技術に比して向上しなかったのは、マッサージの技術全体を女性性と位置付けたことで、その女性性を嫌悪、拒絶したからに他ならない。

3　マラソンとの出会い

このようにして、さまざまな授業の場面で、絶えず性別違和感を意識させられたのだが、専攻科理療科の２年生から、盲学校の近くの老人ホームに治療奉仕に行くことになった。それは、盲学校の臨床の授業で強制的に行かされるというのではなく、専攻か理療科の生徒たちを中心に理療科研究クラブを発足し、そのメンバーで月に１度の土曜日の午後に、老人ホームに出向いてマッサージ･鍼灸を行うというボランティア的要素と、この奉仕活動を通じて、社会勉強をしたり、マッサージや鍼灸の技術を向上させるという目的でで行われていたものであった。

ちょうどそのころ、ふとしたきっかけで、私はキリスト教の教会に行くことになった。私は中学生のころから、聖書の言葉を点字で読んでいたので、聖書の言葉を聞きに行くというよりはむしろ、どのような人たちが教会に集まっているのだろうかと思いながら、境界に１歩足を踏み入れた。すると、次のような聖句が、私の胸を打った。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ１１章２８節）

（私は「疲れている人」なのだろうか。もし、私が「疲れている」としたら、いったい何に「疲れている」のだろう。もしかすると私は、専攻科理療科のさまざまな授業における性別違和感に疲れているのだろうか。そうだとすれば、私はもはや、自分では気づかないくらいにその「疲れ」を自明のこととし、その「疲れ」にどっぷり浸かっているのではないか。）そんな疑問や葛藤が頭の中を駆け巡るようになった。そしてついに、「私は一体どんな「治療家」になりたいのか」という疑問に直面した。（私が「疲れている」とすれば、少なくとも疲れている状態で治療することなどできない。では、どうやってその「疲れ」を癒し、重荷を下ろすのか。）

そんなとき、一人の男性の英語教師が、マラソンをすることを勧めてくれた。体を動かすことが好きだった私は、放課後その先生に伴走してもらい、盲学校の運動場や、盲学校の周辺道路を

走るようになった。その先生と走っている間は、授業のことも、性別違和感に翻弄されていることも忘れ、ひたすら無心になれた。体は走っているので疲れているにも関わらず、精神的には「重荷を下ろした」という感覚に、私はひたすら酔いしれるようにして、ほとんど毎日、その先生と一緒に走り続けていた。

4　女性として「働く」ということ

盲学校の専攻科理療科卒業後、今度は別の盲学校で、理療科教員養成施設の受験のために、1年間学んだ。しかし、私は理療科教員の道は選ばず、就職してあちこちの治療院に、女性として勤めた。

私が勤めた治療院は、ほとんどが男性で、治療院に勤める女性は少ない。そんな中で私は、治療院で働く男たちを観察していて、次のようなことに気づかされた。

①「周辺化された男たち」の存在

心身に障碍がないこと、外見へのコンプレックスを感じていないこと、女性を性愛とする異性愛規範に則った性的嗜好を持っていること、その上で、所帯をもち、かつ、稼ぎ手になっていることなど、何らかの基準を共通に満たしていることを条件に、男社会が構成されているように思われている。しかし、現実の男たちは、これらの基準をすべて満たしているとは限らない。そこで、一般的とされている男社会の基準を満たしていないと思われている男たちを総称して、「周辺化された男たち」と意味づけた。その上で、どのようにして、男たちの中から、「周辺化された男たち」が存在しているのかについて記述する。

②二重の「周辺化」

これは、心身に障碍のある男同士のホモソーシャルな関係性において、最も重い障碍がある男たちが更に「周辺化された状態」をいう。したがって彼等は、一般的な男性社会から周辺化された上に、自分より軽度の障碍のある男たちからも周辺化されているという「二重に周辺化された状態」におかれている。逆の言い方をすれば、軽度の障碍のある男たちが、自分たちより重度の障碍のある男たちを周辺化することで、より一般の男社会のあり方に近づこうとする現象、つまり、他者を周辺化することで、自分の優位性を堅持したいという心性がそこにある。その代表例が「ジェンダー化された治療院システム」である。

③ジェンダー化された治療院システム

1）ジェンダー化された治療院システムの概要

一般的に、「男は女より体力があり、力も強いが、女は身体も小さいし、体力も力もない」という、男女の生物学的構造の相違を根拠としたジェンダー意識の下、治療院でもその意識を自明のこととしている。だから、強いマッサージを希望する場合は男・それほど強いマッサージを希望しない場合は女、というように、来院者が希望するマッサージの強度と術者の性別が記号化されて割り当てられることもしばしばである。このようなジェンダー意識は、治療院に従事している

術者だけではなく、事務の受付や個々の来院者も共通に内包している。もちろん、術者個人名で指名する来院者もいるが、例えば来院者で、初めから強いマッサージを希望する場合は男性・それほどの強いマッサージを希望しない場合は女性、というように、術者個人名で指名するのではなく、術者の性別で指名することも多い。

2）視覚障碍以外の障碍または病気を持つ鍼灸マッサージ師の男へのバッシング

しかし、このようなジェンダー意識に基づいた自明性は、しばしば裏切られることがある。すなわち、男であっても、視覚障碍以外の何らかの病気を有していることで、体力や力不足に悩む男たちがいるということである。

特に、視覚に障碍のある人たちが中心で経営している治療院は、交通機関の利便性を問わず、一般社会から周辺化されたコミュニティーとして認識されている。その中でも、視覚障碍のみを有する彼等と比較して、視覚障碍以外の障碍や病気を有する彼等が、体力や力不足による業績の低迷によって、視覚障碍のみを有する彼等からより周辺化された状態に置かれやすい。これは、視覚障碍以外の障碍や病気を有する彼等が、ジェンダー化された治療院システムから逸脱していること、つまり、そのような彼等とて、男の身体を有するゆえ、体力も力もあって当然、というジェンダー役割を果たしていないことを示している。そのような彼等へのバッシングは、視覚障碍のみを有する彼等だけに留まらず、来院者からの直接・間接的な方法で行われる。そこに、「男の癖に」というジェンダーバイアスが加わると、彼等の男性性が疑われるほどに貶められる結果にもなる。したがってこの局面では、彼等が視覚障碍以外の障碍や病気を有していることへの配慮はなされず､視覚障碍のみを有する彼等と同等の体力や力があるものとして扱われるのである。

また、視覚以外の障碍や病気を有する彼等へのジェンダーバイアスをかけた視覚障碍のみを有する彼等の心理状態として、視覚以外の障碍や病気を有していないことへの優位性を堅持しながら、かつ、一般の男社会に近づこうとする心性が見て取れる。すなわち、視覚以外の障碍や病気を有する彼等を周辺化しなければ、自己の優位性を保証することができない、あるいは彼等を周辺化することによって、より一般的な男社会に近づくという幻想を持っているといえるだろう。

3）周辺化した彼等を鼓舞する目的で利用された自己の女性の身体

更に、彼等へのバッシングはそれだけに留まらない。

治療院に勤めていた当時の私は、マラソンやその他のスポーツを熱心に行っていたため、学生時代とは異なり、体力も力もいわゆる「男並み」にあった。だから、自己の体よりはるかに大きな男の体も平気でマッサージしていた。しかし、このことは一見よさそうに思えて、実は私よりも体力や力の無い男たちを鼓舞するために、私が他の男たちから「女性の体を利用された」のである。

つまり、男の身体を持つ視覚障碍以外の障碍や病気を有する彼等が、ジェンダー化された治療院システムからの逸脱者というだけではなく、女性の身体を持つ私の、これまたジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績を引き合いにして、更に彼等を鼓舞しようとする意図が見て取れる。そこには、ジェンダー化された治療院システムからの逸脱者である彼等を、「男の癖に」

というジェンダーバイアスによって、いったん男性性を疑わせるようなバッシングをしておきながら、女性の身体を持つ私が、ジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績を示していることをうまく利用して、彼等を鼓舞しようとする意図が伝わってくる。

要するにここでは、視覚障碍のみを有する彼等によって、視覚障碍以外の障碍や病気を有する彼等を周辺化した上で、その周辺化した彼等を鼓舞する目的で、「私」が利用されたのである。もっと言うなら、周辺化した彼等を鼓舞するための材料として、女性の身体を持つ自己のジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績ではなく、「女性の身体」が、周辺化した彼等を鼓舞するための材料として利用されたのである。

5　終わりに　―　今、男性として再就職

今年、私は勇気を出してハローワークに行った。最初は、鍼灸マッサージではなく、他の職種を探していたのだが、担当者から、「整形を成り立たせるという目的で、3 療の資格を生かしたら」というアドバイスで、私は男性として再び鍼灸マッサージの職種を見直し、再就職した。

現在は、在宅マッサージといって、何らかの病気や歩行困難などで、自宅でマッサージを希望する人たちの家に出向いてマッサージを行うという、私にとっては新しい仕事に着いている。今のところ、まだ始めたばかりであるが、治療院で勤めていたときのように、男女の性別を意識することなく、また、動き回るのが大好きな私にとっては、要約「適職」といえる職にありついたのではないだろうかと考えている。

まだ始めたばかりではあるが、私が気づかされているのが、「私がマッサージをしたから患者さんに喜ばれる」のではなく、個々の患者さんの中に、もともと「喜ぶ力」が存在していた、ということである。言い換えれば、私が表立って誰かを「助けた」のではなく、私の行為によって、知らず知らずの内に「助かった」と言って「喜ぶ力」が、個々の患者さんに存在していた、ということである。今後、私がマッサージを仕事としていく中で、わざわざ「対人援助」なんていわなくても、個々の患者さんの「喜ぶ力」を自然に引き出すことができればよいと考えているのである。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

トランスジェンダーをいきる（１６）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

２つの「障碍」のハザマで

１　始めに

鍼灸マッサージ師免許取得後、1 年間の理療科教員要請過程の勉学を経た後、2 年間のインターン生活が始まる。あるとき、行きつけの喫茶店で、当時付き合っていた男と口論していたとき、思いがけなく心理カウンセラーの女性と出会う。阪神・淡路大震災から 3 ヵ月後に、神戸の鍼灸マッサージ治療院に就職した後も、心理カウンセラーの彼女との電話での交流が続く。彼女とのいろいろな議論を重ねていくうちに、社会的に構築されている男らしさ・女らしさを創傷して「ジェンダー」という概念を知り、体の性別と心理的・社会的な性別が不一致であることに改めて向き合わされ、その現象を、「性同一性障碍」という概念を知ることとなる。そこで当時、視覚障碍と性同一性障碍とのハザマで、何を思考し、現在に至っているかについて記述する。

２　心理カウンセラーとの出会い

鍼灸マッサージの免許取得後、1 年間の理療科教員養成課程の勉学を終えたあと、インターンとして就職していたある日、いきつけの喫茶店で、一人だけ異様に声のキーが高い女性が出入りしていた。その人が、心理カウンセラーであることがわかったのは、私がその喫茶店で、当時付き合っていた男と口論になり、仲裁に入ってくれたことがきっかけであった。

当時、喫茶店で口論になった男は、声や話し方が女性性の高かい雰囲気だったので、筆者の好みのタイプであったのだが、その男に彼女がいると知ったとき、筆者はおもいっきりショックを受けた。と同時に、気持ちが男であると自覚していた筆者は、やはり彼との恋は実らない、と知りつつも、日に日に彼への嫉妬心を強めていき、逃げる彼を追いかけるようにして交際を迫った。そんなさなかの彼との口論は、周囲から見ても異様な雰囲気をかもし出していただろうと、今に

なって懐かしく思い出される。

ところで、彼と筆者の口論の仲裁に入ってくれた高いキーの女性の第一印象は、とにかく声のキーが異様に高かったので、高い女性性を連想させた。そのため筆者は、最初のうちは、彼女との接触を拒絶していた。

しかし、彼女と会う回数が増えるにつれ、いろいろな話をしていたあるとき、筆者はいつの間にか、既存のジェンダー、特に、自己への社会的・文化的な「女らしさ」を押し付けられることへの不満を話題にしていた。筆者のそのような話題に彼女は共感し、自分が心理カウンセラーであることを明かしてた。そして、彼女自身も、既存のジェンダー役割への疑問を持っていることを吐露してくれた。それ以降、彼女と筆者との間で、ジェンダーの話題で意気投合した。彼女との出会いが、後に後述するように、「性別違和感」の正体を明らかにし、約 12 年間、筆者の友人として、この「性別違和感」について議論し合うことになる。

3　衝撃的な言葉に説得と納得

①「性別違和感」に付与された障碍名

阪神・淡路大震災が発生した 1995 年 3 月、インターンが終了し、同年 5 月から、最神戸の鍼灸マッサージ治療院に勤務した。その勤務の傍ら、筆者と心理カウンセラーである彼女は電話で、「性別違和感」について議論したり、京都で会ったりしていた。

そんなある日、筆者がいつものように女性性を押し付けられることへの違和感を話題にしたとき、彼女から衝撃的な言葉を聞かされた。「あなたのように、体の性別と自分が認識している性別が一致しない人のことを、「性同一性障碍」って言うのよ」。

この言葉は、「衝撃的な障碍名」として、当時の筆者の前に立ち表れた。すなわち、今まで抱いていた「性別違和感」は、そのままそっくり「障碍名」として証明されたと感じたからである。

②2 つの「障碍」の間にある質の違い

その一方で、「性同一性障碍」という言葉に対して、以下のようなことにも気づかされ、ショックを受けた。

筆者の場合、生来の「視覚障碍」は、自己の自覚に関わらず、「身体障碍」として認識していた。したがって、この場合の「障碍」という言葉に関しては、比較的自然な形で需要することができた。しかし、もう 1 つの生来の「性別違和感」を「性同一性障碍」として提示された場合、そこには自己の自覚が多分にあり、悩んでいたが、それをあえて「障碍」と提示されたことによって、「視覚障碍」と「性同一性障碍」の 2 つの「障碍」の間に質の違いがあることにいやおうなく気づかされた。この 2 つの「障碍」の間の質の違いとは、両者の「障碍」の間に注がれる社会の側のまなざしの相違である。すなわち、視覚障碍に対しては、差別や排除のまなざしがあるとはいえ、比較的厳格さは少ないと思われる。これに対して、性同一性障碍の場合、いくら「障碍」と提示してみても、視覚障碍とは異なり、身体の領域による性差の厳格さと、ジェンダーの領域による性差の厳格さという 2 つの厳格さによって、視覚障碍より差別と排除のまなざしが強いということである。さらに、視覚障碍の場合は、白杖の携帯や行動・文字情報の制限など、機能障碍による制限や社会的に不利な扱いを受けていることが表面化しやすい。これに対して、性同一性

障碍の場合は、身体に何らの障碍も認められないので、日常生活への直接の困難が本人にしかわからず、まして性別違和感など口にすることもはばかられる傾向にある。このため、「障碍」と提示しても、なかなか表面化しにくい。したがって、筆者の場合は、「視覚障碍」は表面化しても、「性同一性障碍」は「視覚障碍」に回収され、なかなか表面化しにくいことに気づかされた。このため、「視覚障碍」より障碍の質が重度であることに気づかざるを得ない、という状況が、当時の筆者を困惑させた。

③新たに知った、「トランスジェンダー」・「トランスセクシュアル」という言葉

そのような「障碍の質の違い」に戸惑いつつも、生来からの性別違和感を「性同一性障碍」という疾患名として納得した。そして、自ら女性であることへの違和感について、心理カウンセラーからあらゆる角度で質問された結果、次のようなことに気づかされた。

乳房のふくらみや生理・声の高さ、あるいは女子トイレや女子更衣室使用の際の苦痛など、身体レベルでの違和感もさることながら、女性の友達より、男性の友達の方が付き合いやすいなど、社会的・文化的に構築された女性ジェンダーへの違和感の方が顕著に現れていた。そこで、当時の筆者の認識として、ジェンダーレベルでの性別違和感の強い現象を「トランスジェンダー」、身体レベルでの性別違和感が強い現象を「トランスセクシュアル」という言葉も同時に知った。

1995 年当時、「性同一性障碍」という言葉は、社会的にまだ認知され始めたばかりであった。このため、一般的に浸透しているとはいえなかったが、心理カウンセラーとのこのような話し合いによって、「性同一性障碍」という言葉が、当時の筆者の認識として、生来の性別違和感を自己証明する上で納得し、他者への説明に関しても説得力を持つのではという安堵感を覚えた。

④情報収集

このやりとり以後、メディアや書籍による情報収集を行い、その都度心理カウンセラーと議論することになる。

（1）MTF 歯科医師の苦悩への共感

1998 年のある週末の深夜番組である。私とは逆の MTF トランスジェンダー（身体は男性・ジェンダーは女性）の歯科医師のエピソードが報道されていた。そこには、歯科医師の女性性の高い話し方や行動様式のひとつひとつに対する、女性看護師からの突き刺さるような視線に苦悩する様子が描かれていた。視覚に障碍のある筆者は、直接その場面の映像を見ることはできないのだが、歯科医師の語りの内容や声の雰囲気から、その苦悩が手に取るように伝わってきた。

医療現場では、身体の性別が重視される。このため、ジェンダーの性別との不一致への配慮や考慮はほとんどなされていない。このことは、筆者の普段の日常生活や鍼灸マッサージの仕事を通しての体験からも明らかになり、改めて医療現場での性別に対する厳格さをまざまざと見せ付けられたような思いであった。

また、歯科医師自身の男性の身体への強烈な違和感にも注目した。そこには、医学的知識を有する一人の医療者として、この局面をどのように受容するかが問われる内容であった。このことは、鍼灸マッサージ師である筆者自身の問題とも深く関わった。すなわち、一人の医療者として、自己の身体を嫌悪するという感情が「忌むべきもの」として認識されたこと、その「忌むべき感情」を持ってして、医療行為をしていることへの罪悪感が垣間見えたのである。

このドキュメントをきっかけに、筆者のように「性同一性障碍」に悩む人がいることを知り、また、治療法として、精神療法（カウンセリング）・ホルモン療法と手術療法があることを知った。しかし当時は、社会のまなざしや世間体を意識してか、治療に対しては消極的であった。

（2）FTM トランスジェンダー当事者への性別適合手術のニュースを皮切りに「治療」の 2 文字

1998 年 10 月、埼玉医科大学で、日本で最初の FTM トランスジェンダーへの性別適合手術が行われたニュースを視聴した。このニュースは当時のメディアをにぎわせたが、筆者にとっては朗報であると同時に衝撃を受けた。2001 年放映の『3 年 B 組金八先生』のドラマで、性同一性障碍の生徒のモデルとなった虎井まさ衛の NHK でのドキュメント番組では、米国で女性から男性への性別適合手術を受けるための資金をあらゆる手段で工面し、手術を実現させた内容が語られていた。更に 2002 年 3 月には、競艇の安藤千夏（女子）選手が、自ら性同一性障碍であり、「大将」という男性名に変更し、女子選手から男子選手への移行を記者会見で発表していた。これらの情報をメディアだけではなく、書籍でも確認し、しばしば「点字の男読み」で一夜を明かすことも多かった。

このような情報収集を通じて、筆者の脳裏に浮かび上がったのは「治療」の 2 文字であり、手術の必要性への将来像であった。すなわち、どの時点で「治療」に踏み切るか、どの段階で「手術」を決行するかという人生設計図を描くようになった。しかし、決して自暴自棄になったわけではなく、絶えず心理カウンセラーとのやり取りがあった。「確かに、性別に違和感に苦しむのはわかるけど、今（当時のこと）は無理やり、ホルモン療法や手術療法までしなくても。あなたの場合はトランスジェンダーだから、ホルモンを打つにしても、手術するにしても、もうちょっと考えてもいいんじゃないの？」というのが彼女の意見であった。

FTM トランスジェンダーの色が濃い筆者にとってのホルモン療法や手術は、必要性はあっても、すぐに決行しなくてもよい環境がそこにあった。それは、この話題に対して、常に心理カウンセラーとの対話や議論がスムーズに行われていたからである。

（3）特例法施行

心理カウンセラーも、情報収集に協力してくれた。2004 年 4 月、「性同一性障碍の性別の取り扱いの特例に関する法律（以下、「特例法」と表記）が施行され、性別適合手術を終えた人たちへの戸籍の性別変更が認められた。このことについても、彼女との論争になった。すなわち、ホルモン療法や手術の方向性を模索している筆者に対して、彼女はあくまで冷静に、トランスジェンダーの色が強いことを主張し、手術を思いとどまるよう、筆者を説得し続けた。筆者と心理カウンセラーとの議論は、一見平行線のような議論に見えても、そこには双方の歩み寄りを意識した率直な関係性の下で行われた議論であった。このため、切羽詰ったムードにならなかったのが幸いした。

心理カウンセラーとの議論の結果、また人生設計図を描き直した。すなわち、「両親のどちらかが他界してから」という時期区分を設け、この時点では、限られた資源の中で、男としてのリアルライフ構築、すなわち、服装や髪型など、今すぐにできそうな男としての日常生活を送ること、を念頭においた生活を継続することで、心理カウンセラーとの「性別違和感」の件についての議論はいったん終止符を打つことになった。

４　終わりに――「視覚障碍」と「性別違和感（性同一性障碍）」とのハザマで

「僕にとってはね、視覚障害より、性別違和感の方が、障碍としては重度なんですよ」。

2014 年 4 月のある日、筆者は病院の面談質で、ケースワーカーに訴えるように言った。「もし、僕が何らかの病気で入院するとなれば、僕の性別違和感への配慮はしていただけるのですか？」という相談をしていたときの一幕である。「視覚障碍より、性同一性障碍の方が、障碍としては重度である」という感じ方は、1995 年当時、2 つの障碍のハザマで思考したことと同じである。ただ、現在変化しつつあるのが、「むしろ、社会の側に「障碍」がある」ということだ。つまり、視覚障碍であれば、社会の側が公文書の点字や録音データを用意していない、性同一性障碍であれば、社会の側が男女という 2 つの性別しか用意していない、そればかりか、いろいろな書類の記載欄に「性別」が設けられていること、など、社会の側に「障碍を問う」という姿勢である。既存の社会のあり方を問い直し、その問いを社会に還元していくことで、筆者の「障碍観」が少しずつ変化していくのではないだろうか、というのが、筆者の現在の「2 つの障碍」との向き合い方である。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

トランスジェンダーをいきる（１７）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

リアルライフの構築に向けて

１　始めに

リアルライフ構築とは、体・書類上の性別とジェンダーの性別が不一致である場合、自己のライフスタイルをジェンダーの性別に移行させることを言う。すなわち、筆者の事例では、体・書類上の性別は女性であるが、ジェンダーの性別は男性であるため、自己のライフスタイルを女性から男性に移行させる、ということである。

自己のライフスタイルをジェンダーの性別に移行するということは、たとえばそれまで身に着けていた女性物の服や小物を男性物の服や小物に変えていく、それまで「私」という自称詞を使っていたのが、「僕」・もしくは「俺」に変えて、男言葉を使用する、名前を男性名にする、などである。

今回から３回に渡って、筆者がどのようにして女性から男性への性別移行を行ったのかについて詳述する。第１回目の今回は、リアルライフ構築の最初の段階として、女性から男性への服装や小物の移行について、視覚に障害のある筆者が、どのようにして男女の衣服を区別するのか、実際に女物の衣服や小物から男物の衣服や小物に変えていく過程で、どのような心理的変化が起きたか、また、どのようにして紳士物の衣服や小物を購入しているのか、そして現在、男物の衣服や小物を身に着けることが「当たり前」の段階に至るまでになった経緯について述べてみる。

２「家族の洗濯物」から学んだ男女の衣服の違いと、「食器洗い」から学んだ男女の食器の違い

筆者は学生のころ、学校の長期の休みになると、「女の子であることを理由に」、家の手伝いとして洗濯を任されていた。夏休みには玉のような汗をかきながら、冬休みには、凍りつきそうな手で、毎日のように洗濯物を干していた。そして、時間を決めて、洗濯物を取り込み、たたんでたんすの中にしまいこんだ。

そのような一連の行為の中で、筆者は知らず知らずの内に、男女の衣服の違いに気づいた。ま

ず、同じ下着でも男女によってデザインや大きさが違うこと、生地の厚さが男物の生地は厚くて少々重いのに対し、女物の生地は薄くて軽いこと、そしてデザインにいたっては、男物はシンプル・女物はレースがついていてなんとなく華やか、という具合である。同様に、シャツ・セーター・ズボンに対しても、男物は生地がしっかりしていて厚みがあるのに対し、女物は生地が薄くて男物よりは小さく、しかも襟が小さい、などである。視覚に障害のある筆者は、触覚によって男女の衣服の違いを観察していたのである。

そのうち筆者は、洗濯物を干しながら、あるいは洗濯物をたたみながら、いちいち「これは男物のパンツ、いいなあ、俺もこんなパンツ、人生で1度でいいから履いてみたい」、「これは女物のTシャツ、俺は男なのに、こんな小さくて薄っぺらなTシャツを着せられてなんだか惨めやなあ」というように、一つ一つの洗濯物に、言葉にならない感想を交えながら観察していった。2歳年上の兄の洗濯物を触ったとき、「俺、本当はこんな下着や服を着るはずやのに」と、言い知れぬ興奮と羨望が入り混じった複雑な気持ちになったことを今でも記憶している。

また、筆者は毎晩のように、「女の子であることを理由に」、食事の後片付けをやらされていた。そのとき筆者は、男物と女物の茶碗と箸の違いにも気づかされた。すなわち、男物の茶碗は女物より大きくて重い、男物の箸は、女物より長くて太い、ということである。「なぜ俺は、こんな小さな女物の茶碗で、しかもこんな短い女物の箸で、毎食の飯を食わなければならないのか」と、食器を洗うたびに情けない思いに駆られていた。

3 女性としての服装から、男性としての服装への移行

①男物の下着を購入し、身に着けたことへの罪悪感

本格的な一人暮らしを始めた 1996 年ごろから、筆者は男物の下着に興味を持ち、仕事の休みを利用して、遠方のスーパーで、男物の下着を購入するようになった。

帰宅後、どきどきしながらスーパーで買った男物の下着を恐る恐る開けてみた。ブリーフ・トランクス・シャツ、、、。どれもこれも柔らかな手触り。女物よりさらさらとした生地でありながら、縫い目がくっきりと出ている。その手触りにかっこよさを覚えた筆者は、顔を赤らめ名がら、男物の下着をたんすにしまった。そして入浴後、いったんたんすの中にしまった男物の下着のなかから、ブリーフとシャツを取り出し、それを身に着けた。

別に悪いことをしているわけではない。まして一人暮らしであるから、誰が見ているというわけでもない。しかし、体が女性である筆者の心理状態として、男物の下着を触っただけで興奮しながら身に着けたことに、筆者は罪悪感を覚えた。そこには、「隠れて男装している自己」に対する軽蔑も含まれていたのかもしれない。

②男物のカジュアルな服装が「似合う」と実感して

男物の下着を購入し、触って興奮したり、身に着けたことへの罪悪感は、知らず知らず消えていった。すると今度は、「男物のカジュアルな服装」を「をしてみたいと思うようになり、それとなく紳士服売り場に立ち寄るようになった。

視覚に障碍のある筆者が、どのようにして衣服を選ぶのか。当時は、前項で詳述した洗濯物を

通じての触覚、つまり、記事の手触りが主流で、後は男性店員から色やデザインの説明を受け、試着をしながら購入した。そのような購入の仕方を繰り返しているうちに、「俺のような細井体系でも、男物の服が着れる」という自信がついてきたのか、2005 年ごろからは、週に 2 度の仕事の休みの度に、紳士服売り場に行くようになった。そしていつの間にか、衣服のデザインと色にも興味を持ち始め、ジェンダー化された自己の男イメージのデザインと色を図式化するようになった。すなわち、黒・紺・茶・グレーなどの色で、縫い目や仕立てがしっかりしている衣服は「男」というように、視覚に障害があっても、自ら積極的に色やデザインなどをある程度指定して、男性店員と相談しながら購入する、という仕方で変化していったのである。

③スーツ・ネクタイ・革靴その他の小物

2006 年になり、いよいよスーツ・ネクタイ・革靴その他の小物にも興味が沸いた。財布やバッグは、比較的身に着けやすかったものの、スーツ・ネクタイ・革靴を最初似身に着けたときは、それなりの「ハードル」を感じてしまった。(体系が細井俺が、男物のスーツを着て、ネクタイを締めて、その上革靴まで履いて、、、) と、自己のそのような姿に奇異な感覚を覚えて困惑した。

実際、女性の服装から男性の服装への移行期には、当時勤務していた鍼灸マッサージ治療院の患者さんたちから、筆者の服装に関する苦情が出ていた。また、職場の上司や同僚たちは全員視覚に障害があるにも関わらず、患者さんたちからの苦情を受けて、筆者を奇異な目で見るようになった。さらに、男物の服装で実家に帰省したときは、(すでに髪型は短髪だったので)、両親からの小言が絶えなかった。父にいたっては、「そんな男のかっこうで帰ってくるな！」と怒鳴られた。紳士服売り場ではうきうきしながら衣服の品定めを行っている一方で、通勤時や勤務中は、冷たい視線にさらされる。家族からは小言を言われ、半ば家から追い出されそうな迫力で怒鳴られる。「移行期」とは、なんと複雑でデリケートで脆弱な期間なのか、と、筆者はつくづくと思い知らされた。

4 終わりに―「私が男物の服装をし、男物の小物を身に着けるのは当たり前」

男物の下着を触って興奮し、身に着けたときに罪悪感を感じた日から早 20 年。「かっこいい」・「センスいいね」など、服装をほめられる機会が多くなったことで、筆者は年々メンズファッションにこだわるようになった。現在では、「男物の服装をし、男物の小物を身に着けるのは当たり前」と心底から思っている。

それでもたまには女性と見間違えられることがあるのだが、その度に、「女がこんなかっこうしとるか。あんた、ちゃんと目が見えとんか」と、人前で真正面から堂々と怒れるようになったことは嬉しい。

「服装の乱れは心の乱れ」という言葉をよく耳にする。今後、どんなに病気がちであっても、何らかの事情で、男物の衣服や小物を購入することが難しくなっても、今持っている男物の衣服や小物で、自己のメンズファッションにこだわりたい。

うしわか　こうじ（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

トランスジェンダーをいきる（１８）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

リアルライフの構築に向けて（２）

名前と自称詞（前編）

１　始めに

ここでいう「自称詞」とは、他者に対して自己のことをなんと言うか、である。たとえば、一般的に女性であれば「私」、男性であれば「僕」、もしくは「俺」、「わし」、「わい」などなど。

体の性別とジェンダーの性別が不一致であり、しかも自分の名前が、自他共に男女いずれかの性別とはっきり認識される場合、堂々と自己の名前を名乗ることができない、というのは苦痛である。その苦痛は、堂々と名前を名乗ることができない自己に対する恥ずかしさや、親からもらった名前を人前で堂々と名乗ることができない恥ずかしさの２重う大別することができるだろう。

また、日本語には、男女によって自称詞を使い分ける特性がある。この特性によって、筆者のように、体の性別とジェンダーの性別が不一致であると、多くの場合、体の性別に基づいた自称詞を選ばされてしまう。

体・書類上の性別は女性、ジェンダーの性別は男性の筆者は、子どものころから「私」と言っていた。いや、本当はジェンダーの性別を優先して、「僕」もしくは「俺」と言いたかったが、両親や周囲の大人たちから、体・書類上の性別に基づいて、「私」ということを強制された、と言った方が正確だろう。

今回は、リアルライフ構築の ２ つ目のテーマの前編として、「名前と自称詞」について、子どものころから抱いていた女性名に対する激しい嫌悪・一般的に女性の自称詞として使用されている「私」という自称詞への違和感・男性名にして、一般的に使用されている男性の自称詞である「僕」、もしくは「俺」という自称詞を使用するまでの過程について詳述する。

２　女性名に対する激しい嫌悪と、「私」という自称詞への違和感

①女性名に対する激しい嫌悪

当然と言えば当然であるが、女性として出生した筆者は、両親から女性名を付けられ、牛若家の長女として位置づけられて育った。将来結婚して、牛若家から出て行くことを想像して、父の名前を１字付したということを、筆者は後になって知った。

ところが筆者は、、子供のころから、視覚障害と共に、身体・書類上の性別（女性）に対して、常に違和感を持っていた。つまり、体、書類上の性別は女性であるにも関わらず、心理的には男性であると認識していた。両親や盲学校の先生や友達から女性名で呼ばれたり、女性名を省略した愛称で呼ばれたりする度、恥ずかしくてまともに返事をすることができなかった。また、女性名で呼ばれることで、体や書類の性別だけで女性と判断され、ジェンダーの性別が軽視されていることへの苛立ちや悲哀缶を覚えていた。そこで筆者は、友達に手紙や年賀状を書くときは、「牛若」という苗字だけを書いて、下の女性名は書かずに投函した。

家業が美容院と理髪店という職業柄か、両親はそのような筆者に対して、特に服装や身だしなみの面で「女らしさ」を強制してきたので、そのたびに喧嘩が絶えなかった。その喧嘩の際、両親から、女性名で叱責されたときは、「名前で呼ぶな！」と大声を張り上げて怒ったものである。また、当時は父方の祖母と同居していた。明治生まれの祖母は、男尊女卑の考え方が寝ずよく残っていた人であった。そこで、筆者のさまざまな「女らしくない態度」に対して「あなたは、眼が見えない女性であることを意識しながら生きていかなければならないんだよ」と説教していた。祖母もよく、筆者の女性名を呼んで叱っていたが、「祖母の言うことには口答えをしないこと」という、牛若家の家訓に逆らうことができなかったので、ぐっと耐えるしかなかった。

②「私」という自称詞への違和感

女性名を付けられたことに伴い、両親や周囲の大人たちからは、他者に対して自分のことを「私」と言うように強制された。筆者はこの「私」という自称詞に対しても、違和感があった。

2歳年上の兄は、筆者からみて男らしい名前であったので、自分のことを「僕」、もしくは「俺」と言っていた。筆者は子どものころから、言葉の響き方や音に対して興味があったので、この「僕」、もしくは「俺」と言う自称詞に対して密かに憧れを抱いていた。兄は、男らしい名前を付けられたことで、このどこか自由で力強い「僕」、もしくは「俺」という自称詞を自由に使えるんだな、その反面、女性名を付けられたことに伴って筆者に強制された「私」という自称詞には、どこか重苦しく自由さがないなあ、というのが、筆者の自称詞に対する率直な感想だった。

ところがあるとき、ひょんなことから、ある男性が「私」という自称詞を使用していることに気づいた。それまで、「私」という自称詞は、一般的に女性が使用するもの、と思っていた筆者は、ある男性が「私」という自称詞を使用していることに、最初は違和感を覚えた。しかし、「私」という自称詞を使用していたのは、その男性だけではなく、複数の男性、それも、テレビ番組や講演などの公的な場で「私」という自称詞を使用していたことに気づいたとき、筆者はほっとすると同時に、それでも、筆者自身が「私」という自称詞を使用することに対しては、根強い違和感

を覚えずにはいられなかった。

３　男性名にして、「僕」、もしくは「俺」という自称詞を使用する

①　男性名にするまでの経緯

鍼灸マッサージ師の資格を取り、就職してから一人暮らしをして数年経ったころ、祖母が亡くなった。そのことをきっかけに、筆者はひそかに、次のような計画を立てるようになった。それは、「両親のどちらかが亡くなったら、男性として生きていくために男性名にすること」である。視覚に障害があるため、書類などの名前の記入欄に女性名を代筆していただくときの恥ずかしさは、今思い出してもぞっとするほどであった。

２００５年１１月、立命館大学の社会人入試に合格したことを母に知らせる電話をしたとき、母に大腸癌が見つかったことを、母自身から告げられた。そのとき、（いよいよ、男性として生きていくための決心を固めて、男性名を決めなくては）と考えた。そして、このころから、性同一性障害に関する手記を読み、名前を男性名にするには、まず、病院で性同一性障害の診断書をもらって、それを申立書と一緒に家庭裁判所に提出する、という手順を知った。

２００７年５月、母が亡くなった。実家に帰り、母の遺体と対面し、通夜・葬儀に参列したとき、近いうちに病院で性同一性障害の診断書をもらって、男性名にすることを決意した。

２００８年２月、ぼう大学病院のジェンダークリニックに通い始めた。そこで真っ先に聞かれたのは、「通称名は決まっていますか？」ということであった。そこで筆者ははっと気づかされる。男性名にしたいという気持ちはあっても、子供のころから視覚に障害があり、点字を使用していたので、視覚に障害のない人たちより、漢字の知識が乏しいことを理由に、今まで具体的にどんな男性名にするかを決めていなかった。そこで、筆者の女性名に由来した名前で、とっさに出てきた１時名で、その日１日診察を受けたが、どうもしっくりこなかった。ちょうどそのころ、ある授業で、「儒教文化」について学んだ。その儒教文化にヒントを得て、考え出した 1 時名をしばらく使っていたが、これもしっくりこなかった。そこで今度はパソコンで、ジェンダークリニックで診察を受けた際の男性名と、儒教文化にヒントを得た男性名が一緒に使われている男性名があるかどうかを調べてみると、「孝治」という名前が出てきた。最初は、この名前に対して、あまり乗り気ではなかったし、なんだか古めかしくてどうなのか？と疑問を抱いていたのだが、その一方で、なんだかこの「孝治」という名前が気になって仕方がなかった。そこで、点字の感じの辞書で調べてみると、女性名を逆にして、その上に冠を付けて完成させたシンプルな名前であることが分かり、ぱっと電流が走ったようなショックを覚えてびっくりした。（この名前なら、家族を納得させることができる）と確信した筆者は、その日から通称名として、「孝治」という名を使用することにした。

②「僕」、もしくは「俺」という自称詞を使用する

やっと決めた男性名を使用して 2・3 日経過したころ、ある集会で筆者は、通称名で参加した。そして、集会の場で、次のように言ってみた。「私はこれから、「孝治」という名で生きていきま

す。そこで、「私」とは言わずに、「僕」、もしくは「俺」と言ってもいいですか？」。すると、ものすごい拍手の嵐。

だが、実際に「僕」、もしくは「俺」という自称詞を使用してみると、最初はやはりなんだかしっくりこないような気がした。まるで、新しくかぶせた歯が、なかなか他の歯となじまないような感覚であった。特に、「俺」というのは、「僕」より強くてかっこいい印象がある分、なんとなく気後れがしそうだった。(自分のジェンダーの性別は男なのに、そして男性名を通称名として使用しているのに、なぜ「僕」、もしくは「俺」と言ったとき、こんなにも気後れがするのか) と少々悩みながらも、いつしかこの「僕」、もしくは「俺」という自称詞が、筆者の自称詞として自然に使用することができるようになっていった。

４　終わりに

次回は、「名前と自称詞（後編)」として、戸籍上男性名にしてからの自己の変革について詳述する。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

トランスジェンダーをいきる（１９）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

名前と自称詞（後編）

１　始めに

今回は、「名前と自称詞」の後編として、体・書類上の性別は女性、ジェンダーの性別は男性である筆者が、戸籍上男性名を取得したことで、どのような自己変革をしていったかについて詳述する。その自己変革の過程で、名前と言うものが、いかに自己にとって重要であったかに気づかされる。それまで忌み嫌っていた「泣く」ということを再評価した上で、「男泣きに泣く」ということを反復経験することで、さまざまな場面で今までとは異なった視点に出会う。

なお、名前を変更することを一般的には「改名」というが、本稿では「（男性名に）戻す」と表現する。「改名」という言い方は、女性から男性に「変える」というニュアンスが強い。社会的にみれば確かにそうだが、筆者の立場としては、もともとジェンダーが男であるため、そのような自己に女性名を付与したこと事態が間違っている、だからジェンダーが男である筆者には、男性名を付与しなおすのは当然、という考え方から、「（男性名に）戻す」と表現することにしたのである。

２「男泣きに泣く」というプロセスを反復経験することによって自覚した男性としてのアイデンティティー確立

男性名である「孝治」という名を通称名として使用したころから、急速にこの名前への親近感が沸き、友人たちとの関係も良好になってきた。また、通称名として使用した名前が、約８ヶ月ほどで公的に承認されたのは異例の早さであったことは、筆者が行っている自助グループの人たちの話で明らかになった。

公的に男性名が認められて以降、しばらくの間、「男泣きに泣く」日々を送った。それは、一人きりの自宅であっても、友人に男性名に戻したことを知らせる手紙を書いていても、また自助グループや各種コミュニティーの中で男性名に戻したことを知らせている際も、名前の話になると、ひとりでに涙がこみ上げてきた。そのような中で、一人私と一緒に涙を流しながら喜んでくれた男の友人がいた。在日朝鮮人の彼は、日本名から朝鮮名に戻すために、約 20 年間裁判で戦った

という経歴を持っていた。そのため、筆者の名前が公的に男性名に戻ったことを喜んでくれた。

彼との出会いを通じて、筆者は子供時代を振り返る。なぜ、在日韓国・朝鮮人には、日本名と朝鮮名の 2 つの名前を持っている人たちがいるのか、彼ら・彼女等は、なぜこの 2 つの名前の間でもがき苦しむ必要があるのか、なぜ私には 1 つの名前しかなく、それもなぜ女性の名前が付けられているのか、、、。彼との出会いの中で、私は子供のころから、名前にこだわっていたこと、を思い出したのである。

このようにして、あちこちで男泣きに泣きながら男性名に戻したことを知らせていたとき、あることに気づかされた。それは、自己の名前を公的に男性名に戻したことによって、通称名として使用していたときと比較して、更に男としてのアイデンティティーが確立してきた。しかも、その確立の仕方は、ただ男性名に「戻した」というだけに留まらず、「男は強くたくましく、人前で涙を流さない」という、従来の自己の男性性への疑問を呈するようになった。特に、「人前で泣く」という行為は、悪しきもの、恥ずべきこととして忌み嫌い、排除してきた筆者が、「男泣きに泣く」という経験を繰り返したことで、「泣く」という行為への恥ずかしさが少しばかり軽減してきた、といえるだろう。

3 産婦人科への通院時に気づいた「ある異変」

公的に男性名に戻し、「男泣きに泣く」というプロセスが一段落したある日、性同一性障碍の診断に必要な要件に関わって産婦人科に通院したとき、ある異変に気づいた。

待合室で待っているときである。女性ばかりの患者の中に、男の私が一人ぽつんといるような心理状態には変わりはなかった。だがそのような状況の中で、次のような疑問が沸きあがってきた。妊娠している人、子宮・卵巣・乳房などの婦人科疾患を持っている人、不妊治療を受けている人など、一つの待合室にランダムに集められているが、社会が女性をひとくくりに「子どもを産む性」として規定しているのではないか、ということである。つまり、社会が女性をひとくくりに「子どもを産む性」として規定しているとすれば、何らかの理由で子どもを望んでも産めない人、中絶を余儀なくされている人、そもそも子どもを望まない人など、「社会が規定した産む性」にアクセスできない、アクセスしたくない人たちが、妊娠している人たちと待合室を共にするということが、彼女たちにどのような心理状態をもたらすのかということである。では、なぜそのような疑問が沸きあがってきたのか。機能異常のない子宮・卵巣・乳房を有している筆者の身体が「女性であるから」ではなく、そのような自己の身体と「孝治」という自己の男性名との間に一定の距離ができたことで、新たな思考変動によって、従来嫌悪していた女性たちへの共感を示す余裕が生まれてきたからかもしれない。今までただ嫌悪していた「産婦人科」という場に改めて焦点を当ててみたとき、それまで気づかなかった産婦人科の不備な点や残酷な一面が見えてきたといってもよいだろう。

4 男性名を武器として使用することによる、他者の視聴覚的自明性の崩壊へ

名前を公的に男性名に戻したとはいえ、現時点ではホルモン療法や手術療法といった医学的治療を受けていない筆者の姿は、他者の視聴覚レベルでは女性であると規定される。しかし、だか

らといって、そのような他者の視聴覚レベルで、自己の性別を勝手に規定されてよいはずがないと筆者は考えている。いや、かえって他者から不用意に自己の性別を規定される行為は、筆者にとっては不条理である。そこで筆者は、他者からのこのような不条理な扱いを是正するための役割を果たしているのが、やはり自己の男性名である。この場合、上記 2 つの自己の男性名の意味する事柄とは異なり、他者から女性として規定された場合の武器弾薬としての意味が含まれている。すなわち、筆者の姿を視聴覚レベルで女性と規定した他者への行動として、自己の男性名を文字情報として提示することによって､他者が筆者の体を視聴覚的に規定した女性という性別と、文字情報として提示した男性名である「孝治」という名前との間で右往左往し、著しく混乱を起こし、ひたすら謝っている姿は、筆者からしてみると、自ら男性であることを証明するという役割を果たしたことになるだろう。それだけではなく、視聴覚レベルで自己を女性と規定した他者の自明性をも崩壊させるという構造をなしている。このような戦法で自己を女性と規定した他者と向き合ったとき、視聴覚レベルでの自己の性別と、文字情報で提示した名前の性別との不一致に不安を抱いたり、ひたすら謝っている他者に対して、個々人の視聴覚を疑うことなく他者の性別を規定する権利はないということをとうとうと語り、また、個々人の視聴覚を疑わないことそれ自体に「障碍があること」などをことごとく主張した上で、そのような他者の前でひたすら「勝利感」を抱いている筆者の存在は、ともすればそれでも、何がしかの疑問を抱いているかもしれない他者からすると、納得がいかない奇異な存在に思えるかもしれない。それでも筆者は、他者の視聴覚レベルによる自明性を根底から崩壊させたという目的達成によって、自己の男性名が他者への武器弾薬として他者に正しく認識されたと筆者が認識したとき、他者が筆者の前でひたすら謝りながら、個々人の視聴覚レベルの未熟さや恥を、筆者の前で露呈させたことへの反省の言葉や態度を筆者が目の当たりにすることができたということへの優越性が「勝利感」へと繋がっていくのであると筆者は信じている。

ただし､このような目的達成を得るためには､｢孝治｣という筆者の名前が男性名であることを、筆者の姿を視聴覚レベルで女性と規定した他者との間で共通認識があること、戸籍の性別が女性であるため、住民票や保険証などの戸籍と連動している公的書類の提示を不可とし、性別記載が男性であるものまたは性別記載がない書類に限ることにも留意しなければならない。

5 終わりに

「やっと、自分の名前に誇りが持てるようになりました」と、堂々と胸を張って言える様になったのは、公的に男性名に戻して 1 年も経つか経たないかぐらいだっただろう。その一方で､「あなたのように名前にこだわるのはおかしい」と言われたこともあった。だが、筆者は言う。「名前とは人格である。だから、自分の名前にこだわるのは当然。名前で苦しみ、名前で苦労した分、その後の喜びはどれだけ金を積んでも買えるものではない。だから俺は、これからも自分の名前に誇りを持って生きていきたい」。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

トランスジェンダーをいきる（２０）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

力関係を意識させられる他者（１）

医療者・医療現場とどう付き合うか

１　始めに

体・書類上の性別は女性、性自認が男性である筆者は、ときに必要以上に相手との「力関係」を意識させられる場面が多い。とりわけ、視覚に障碍のある筆者に対する他者からの直接的・間接的な支配、もしくは力の行使によって、筆者が苦痛を感じたとき、即座に「ノー」の意思を表明できなかったことへの無力感とふがいなさ・恥といった感情は、ともすれば自己の構築してきた男性性を一気に失墜させられるのでは、という危機感を覚えてしまう。

こうした力関係を意識させられる「他者」の代表的な例として、医療者、もしくは医療現場と、家族、あるいは職場の上司や同僚などが考えられるが、今回と次回の 2 回に渡って、筆者が最も困惑している医療者、もしくは医療現場と家族との力関係を意識させられる場面について考察してみたい。

今回は、「医療者・医療現場とどう付き合うか」がテーマである。そこで今回は、当時住んでいた自宅近くのクリニック 2 軒のジェンダークリニックでの医師たちが、視覚に障碍のある筆者に対してどのように関わってきたか、また、彼らの関わりに対して、筆者がどのような力関係を意識させられ、ときには困惑しながらも、どのように対処していったかについて論じる。

２　自宅近くのクリニックへの通院

「性同一性障碍」という言葉が社会に登場し始めた 1990 年代半ばより、当時付き合っていた心理カウンセラーの助言も合って、当時住んでいた自宅近くのクリニックに通院していた。そのクリニックでは、医療者特有のパターナリズムな雰囲気が希薄で、不必要な薬を処方されることも少なく、カウンセリング中心の治療であった。

通院時の主な症状は、体の性別への違和感と、体の性別と自らの性自認との不一致であった。そのため、カウンセリングででは、意思から言われる間もなく、「性同一性障碍」という用語を積極的に多用しながら、自己の性別違和感についての説明をしていた。

今にして思えば、医師に対する語り方は、強固な男性性を誇示するような語りではあったのかもしれないが、ジェンダークリニックの専門医ではなかったためか、筆者が医師に語る際には、医師に対してそんなにナーバスになる必要はなかったように思う。「スカートを嫌い、ズボンを好む」、「誰かと口論したときにすぐに手が出る」といった筆者の語りは、日常的なものであり、その語りに対する医師からの叱責や苦言はなかった。「語りたいだけ語る」、「語りたいまま語る」という筆者の語りのスタイルと、それを静かに受け止める医師とのコミュニケーションを通じて、筆者自身の心の深層部にある攻撃性や暴力性に直面させられた場面もあった。そんなとき筆者は、自然に「内省感情」と出会う機会を何度も繰り返した。そのことが、筆者にとっては功を奏したといえるかもしれない。

3　母の死をきっかけにジェンダークリニックへ

自宅近くのクリニックでは、度々ジェンダークリニックへの受信を勧められたが、なかなか踏ん切りがつかなかった。ところが、母の死をきっかけに、ついにジェンダークリニックを受診した。以下、ジェンダークリニックでの語りについて詳述する。

①A ジェンダークリニックでの語り

（１）自己の身体への違和感に関する語り

ジェンダークリニックへの通院当初は、男性ホルモン投与も手術も望んでいた筆者は、初回時、特に体への違和感を強調した。特に、せいりがあり、胸が膨らんでいる自己の身体を「間違った身体」・「自分ではない借り物の体」として位置づけた上で、医師に語っていた。その語りは、実際に感じている身体違和感より誇張した部分もあったように思われる。

（２）異性愛規範を意識した語り

しかし、筆者にとっては、前項の身体違和感への語りより、不本意な語りをしなければならなかった場面があった。

初回時の筆者の服装は、紳士用のスーツにネクタイ・革靴だった。医師は、筆者の服装について、次のように言った。

「「あなたは十分「男性」として見えるし、彼女もいそう」。

筆者の服装は、この時点で医師への男性としての印象操作は、一応成功したといえるだろう。しかし、「彼女もいそう」という医師の発言に愕然としたのは、医療現場においても、異性愛規範が自明のことのようにまかり通っていたことである。そこで筆者は、やむなく次のような語りをしてしまった。

「確かに俺も「女の人から「男らしくない」って言われるのは、男の人から「男らしくない」って言われるより身にこたえる」

「彼女もいそう」と言った医師への答え方としては、少々的外れな答え方だとは思うものの、

当時の筆者はそのように答えるのが精一杯だったのだろう。もしかすると、医師へのこのような答え方は、明らかに通常の男性と同じく、女性を性愛の対象にする、つまり、異性愛規範にのっとっていることを無意識のうちにアピールしなければ、男性として認めてもらえない、というあせりにも似た気持ちがあったのかもしれない。

その一方で、筆者は男として、女性を性愛の対象としているのか。答えは「ノー」である。筆者の性愛の対象は男性であるから、ジェンダーレベルではゲイであるが、身体レベルでは女性として男性を性愛の対象とする、いわゆる異性愛規範にのっとっている。社会は、ジェンダーの性別より、身体の性別を重視するわけであるから、社会の側からすれば、一見何の問題もないように思われる。しかし、男性ジェンダーを重視し、女性の身体を否定している筆者にとっては、女性としての異性愛規範にのっとっていること自体をタブーとして認識しているわけであるから、身体レベルでの異性愛規範にのっとっていることを容認していない。したがって、恋愛に関する語りそのもの自体に嫌悪し、回避しているというのが真実である。にも関わらず、筆者はなぜわざわざ医師に男性として女性を性愛の対象としているかのような語りをしなくてはならなかったのか。そこには、「彼女なんていません。俺、男が好きやねん」と仮にストレートに言ったとしたら、医師から、「それではあなたは女性じゃないの？」という答えが返ってきそうな雰囲気を察知したからである。つまり筆者がいくらこの場面で真実を語ったとしても、それは社会の異性愛規範にのっとり「男が好きなあなたは女性」として扱われるのではという恐れが、真実をそれ以上語らせようとしなかった、といえるだろう。

このように考えてみると、医療現場というのは、いかに「真実を語らせないか」が見て取れる。それは一見真実を語ってもよいような空間でありながら、実はその中に、「マニュアルにないことは異常であるから語ってはいけない」、「医療者側の都合の良いことしか語らせない」という暗黙のルール規定と、医療者側のご都合主義による情報操作が存在する。そのことを受けて患者側は、知らず知らずのうちに、そのような医療者側の「顔色伺い」を行いながら、真実とは異なる語りをしてしまうという構図にはまっていき、自ら患者になっていくという一端をうかがい知ることができた。

（３）不自然な語りの中に存在する「挑戦の意味」

しかし、「性同一性障碍」のマニュアルに従うような医師の顔色を伺っているだけの語りをしているわけでは決してなかった。それは、視覚に障碍はあっても、診断書の必要性をもくろんだ語りでもあった。

医師との面接を重ねたある日、たまたま医師に子ども時代の写真を見せた。たまたまその写真に写っていた筆者の服装はスカートだったようだが、嫌なことがあったのか、筆者の顔に笑顔がまったくなかったそうだ。医師は、スカート姿の筆者の写真を見ながら、「これ、スカートだけど、このときは女の子の気分だったの？」と聞いた。そこで筆者はすかさず即答した。「俺には、１度として、女の気分になったことはありません」。

筆者の周囲には、「障碍のある人たちは無性である」とか、「性別を意識させない」などという

人が多い。このことは、男性として生きようとしている筆者にとっては非常に残念であり、そうした考え方は間違いである。なぜなら、特に子どものころから障碍のある人たちの中には、学校教育や私生活において、周囲の大人たちから、障碍のない子供たちよりジェンダー化された教育やしつけがなされていることも多い。まして筆者のように、ジェンダーの性別と身体の性別が不一致な場合、必ずジェンダーの性別は否定され、身体の性別にあわせたジェンダーを強制される。それだけではなく、そのことが「善意」として行われているため、正面切って反抗したりカムアウトしたりすることが難しい場面も多かった。この現象は、医療現場においても同じことが言える。性別違和感に起因する内容の症状においても、医師によっては「障碍」によるものと関連付けて解釈する人もいる。そのような状況を回避すべく、性別違和感に伴う症状に対して、視覚に障碍があることを理由にはさせないという強い意志の下、実際より誇張した語りや、「性同一性障碍」のマニュアルを意識した語りになっていたことは事実であった。

その一方で、社会は特に視覚によって他者の性別を識別することが多いのだが、そのような社会のガイドラインを解体すべく、医師に対して、視覚による性別の識別ではなく、スピリチュアルな性別（自己の魂が男女どちらの性別に属しているか、という観点から、自らの魂が男性に属しているという語り）を重視することを語りの中に盛り込んだことによって、全体としては不自然な語りの中にも、医療現場への「挑戦の意味」を含んだ強烈な語り方になったことは事実だろう。

（4）「挑戦の意味を含んだ語り」の最後は、「真実な語り」、「診断書交付」へ

そのような挑戦の意味を含んだ語りをした後に、筆者は次のような「真実な語り」をした。「俺の体の性別違和感は、視覚障碍とはまったく関係ありません。これは俺が生まれたときから視覚障碍とたまたま一緒に持ったもんです」。医師へのこうした「挑戦を含んだ語り」の「挑戦」とは、医師への一方的な勝負師としての挑戦とは別に、医師の力量を試すための挑戦であったのかもしれない。すなわち筆者は、医師として、筆者のこのような「挑戦を含んだ語り」に誠実に向き合うかどうかを、無意識のうちにテストしていた、ともいえる。その結果、筆者の「挑戦を含んだ語り」に誠実に向き合った医師に対して合格点を与え、最後に「真実な語り」へと導き、「診断書交付」にいたったのである。

②2 軒目のジェンダークリニックでの語りによる診断書交付

正式に「性同一性障碍」の診断を下すには、2 人以上の医師の一致した見解が必要であるから、2 軒目のジェンダークリニックでも、やはり誇張した語りをせざるを得なくなった。しかし、今度は、特に身体的な違和感についての語りだけではなく、鍼灸マッサージ師としての医学的知識を根拠に、「自分の体には、こんな広い骨盤は不釣合いだ」・「テストステロンを注入することで意欲的になれる」など、男女の身体の違いを明確にした上で、明らかに女性の体を嫌悪していることを切々と訴えるようにして語った。この戦法は、視覚に障碍のある人への診断を下すのが初め

てであることで慎重になっている医師を半ば説き伏せるようにして診断書を取得するのに成功したというのが実情であろう。そして、「あなたがそこまで言うのであれば、あなたの意思は堅いようですから、診断書を書きます」という医師の言葉を引き出し、診断書が交付されたときは、「勝利感」まで味わった。

4　終わりに

筆者の感覚では、ジェンダークリニックをはじめとする性同一性障碍に関連する専門医は、それまで通院していたクリニックよりパターナリズムの様相を呈していたように思えてならない。それは、この社会がいつでもどこでも何度でも、「性別」を意識させられる場面を用意し、その度に半ば当たり前のように男女に振り分け、そのことにほとんどの人たちが何の疑問を持っていない、逆に言えば、筆者のようにいつもいつもそのことに疑問を抱き、不快感を表しながら駆け込むジェンダークリニックと言うのは、筆者からすると、言語化できない脅威的で恐意的なものを感じたのかもしれない。そのことが、医師たちへの「力関係」を意識させられ、「挑戦を含んだ語り」にもつながったのだろう。

筆者のように視覚に障碍があり、ともすれば視覚に障碍の無い医師たち中心の仕方で医療が提供されようとしたとき、もしそのようなやり方が筆者にとって不都合な場合、筆者は医師たちに対して、はっきりと「ノー」といえるだろうか。ジェンダークリニックに関わらず、この課題は依然として筆者の前に課せられているのである。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

トランスジェンダーをいきる（２１）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

力関係を意識させられる他者（２）

家族へのカミングアウト

１　はじめに

体・書類上の性別は女性、、性自認が男性である筆者は、ときに必要以上に相手との「力関係」を意識させられる場面が多い。とりわけ、視覚に障碍のある筆者に対する他者からの直接的・間接的な支配、もしくは力の行使によって、筆者が苦痛を感じたとき、即座に「ノー」の意思を表明できなかったことへの無力感とふがいなさ・恥といった感情は、ともすれば自己の構築してきた男性性を一気に失墜させられるのでは、という危機感を覚えてしまう。

前回は、こうした力関係を意識させられる「他者」の代表的な例として、医療者、もしくは医療現場、つまり、筆者が受信した２件のジェンダークリニックでの事例を挙げたが、今回は、筆者と家族との関係を通じて、家族へのカミングアウトの事例を中心に考察してみたい。

２　筆者と家族との関係性

筆者は、牛若家の長女として出生し、女の子として育てられたのだが、子どものころから視覚に障碍があったことに加え、3・4 歳ごろから、自分は男の子だと思うようになっていた。そのような筆者に、明治生まれの父方の祖母からは、たとえ視覚に障碍があっても、将来は家族に頼らず、1 人前に独立しなくてはならないと教え込まれた。祖母は、筆者が祖母の期待に沿うようなこと（たとえばよい成績を収めた、当時習わされていたピアノの練習の成果が認められ、発表会に出場して高い評価を得たなど）に答えたときは、今から考えると異常なほど褒めた。褒めたというより、褒めそやした、と表現した方がよいかもしれないほど、祖母は筆者に対して情緒的に接していた。筆者は子供心に、祖母のそのような接し方に違和感を覚えながらも、ここは一つ、男の子として、祖母の期待を裏切るわけにはいかない、と思い、黙々と努力していた。その一方

で祖母は、筆者に「女の子らしくあること」を教え込もうとしたのだが、「女の子やったらめそめそするな、女の子ははきはきものを言え」という祖母の教えが、社会の風潮とどこかミスマッチであることを、筆者は子ども心になんとなく気づいていた。このような体験が、結果的には現在の筆者の男性性を構築する源になっていると思われる。

筆者が一番心を痛めているのは父と兄との関係である。特に、筆者と父は、何かと言い争いが絶えなかった。父は筆者に、女の子らしい服装や、女の子らしく軟らかなものの言い方を強要する。筆者はその度に父と口論になり、あるときには父につかみかかったり物を投げたりして怒りを爆発させる。ヒートアップしている 2 人を見かねた母が仲裁に入ってくれるも、些細なことで言い争いが再燃する、という悪循環を延々と繰り返す。父は、機嫌のよいときは筆者に優しいのだが、いったん機嫌が悪くなると、母や筆者、つまり、女性の体を持つものに対して辛く当たりをする傾向にある。特に、筆者のように障碍があり、ジェンダーは男の子でも、体は女の子であるということが、機嫌の悪い父にとっては 2 重の好条件で、筆者に当たりやすかったのだろう。筆者にとって父は、父と子の力関係とは別の力関係を意識させられる相手、ということがいえるだろう。

兄はといえば、父から視覚に障碍の有る女の子の筆者を「守ってやれ」と言い渡されていたのか、口げんかをしても、筆者に辛く当たることはなかったように思う。その代わり、自分の気持ちを言語化したり、感情を露にしたり、ということが少なかった性か、筆者にしてみると、「何を考えているか分からない不気味なやつ」として敬遠していた。

筆者にとっては、母との関係性が一番安定していると思われる。母は、女性の体を持ちながらも、それ以上に男性性が強い。そのために、筆者と母との間でも口論になるのだが、父と違って母は筆者に、反論できないようなことを言って、筆者の言い分を説き伏せたり、筆者の論理の誤りを指摘する。その一方で、高校を卒業し、鍼灸マッサージ師免許を取得する年齢になってもなお、女の子の服装を嫌う筆者と買い物に行ったとき、紳士物ではないにしても、できるだけ紳士物に近い洋服を選ばせてくれることもあった。ただ、筆者が時々紳士物の服で実家に帰省したときなどは叱責し、その度に筆者と言い争いになった。

以上、筆者と家族との関係を簡単に見てきたが、筆者を含め、障碍当事者にとって家族の存在は、多かれ少なかれ、支配・非支配の関係になりやすい。そこには、「あなた（障碍当事者）のことは、私たち（家族）が一番よく分かっている」という家族の思い込みから、しばしば障碍当事者のニーズや希望などの主張が無視されたり、軽視されたりするる。以下では、筆者の家族を事例に、父や兄に、筆者の思いや主張が通じなかったことについて詳述する。

3　祖母と母が亡くなった後の父と兄との関係

①父への「反抗」

「性同一性障害」という言葉が社会的に認知され始めた 1996 年、祖母が亡くなった。祖母の死をきっかけに、筆者はいよいよ男として生きていきたいという希望を具体的に持つようになった。既に、一人暮らしをして 3 年ほど経っていたので、男物の衣服を着用して通勤していたが、

帰省の際は、女性物の衣服で、ジェンダーも女性物に着替えるように心がけていた。しかし、単発にしていたので、帰省の度に父からは酷くののしられ、罵声を浴びせられた。

2007年5月、母が亡くなった。亡くなる2、3日前、父から母の容態が急変したことを告げる電話があったとき、父は次のように言った。「あんた、髪の毛の短い頭で帰ってきたら承知しないぞ！」と。その瞬間、筆者の中でぱちんと何かが切れる音がした。

（いよいよ「父への反抗のときが来た」というように、筆者は電話口で父に向かって言った。「お前は今、お母さんが死ぬかもしれないと言う言うことで電話をかけてきたんだろう。そのことと、俺の身だしなみとどう関係があるのか言ってみろ！」あきれた父からは、「親に向かってそんな口の聞き方があるか」と言ったきり、答えはなかった。筆者の家では通常、「目上の人には口答えしてはならない」というのが、暗黙のルールとしてあったのだが、筆者はこの家の「暗黙のルール」を破って、父に向かって反撃ののろしを上げたことになる。そのことで筆者としては、「この問題は、俺が決めて、俺が全部責任を取る。お前（父）にはもう、何も言わせないし、異論を挟む余地も与えない」というメッセージを父に向かってぶつけたわけであるが、実家に帰省し、通夜・葬儀に参列したとき、父はなおも筆者の身だしなみについて事細かに文句を言っていた。

父にしてみれば、筆者への身だしなみに口出しするという行為は本の些細なことであって、それ以上の深い意味はないのだろうが、筆者にしてみれば、またしてもここで、父との「力関係」を意識させられる。その「力関係」というのが、単なる父と子のみならず、障碍の有る娘と健常者の父、もっといえば、障碍のある女と健常者の男、というように、力関係の質まで異なってくる。筆者は、父との間で、複数の「力関係」を意識させられたことで困惑し、「犯行」という強い態度に出たのであろう。

②父と兄へのカミングアウト

2008年2月、某大学病院のジェンダークリニックに通い始めたころ、父と兄に電話で、生来からの体の性別への違和感についてカミングアウトした。本来であれば、実家に帰省して、父と兄と向かい合って、きちんとカミングアウトするのが筋として正しいのだが、視覚に障碍の有る筆者の「重要な決定」に対して、常に無視するか、軽視するかで、まったく取り合ってもらえないことが多かった。そこで、ともに相手の表情の分からない・声だけの電話でのカミングアウトであれば、筆者だけがいつも健常者の父や兄から一方的に「見られる」という不平等を味わわなくてもよい、という理由がその背景にあった。

父からは、「そういう兆候があることは、亡くなったお母さんから聞かされてはいるが、お前は目が見えないから、女としてのよさが分からないだけ」と言って、やはり取り合ってもらえなかった。「男になったら、酒でも酌み交わそう」と冗談を言ってみても、「そんなやつとは酒も酌み交わしたくない」と一蹴された。兄からは、「あんたはなんでも好きなようにしとるから、これからも好きなようにすればよい」と、こちらも投げやりな言い方であった。「好きなようにすればよい」という言い方は、一見その生き方や考え方が認められたように思われるかもしれないが、実際に兄からそのように言われた筆者にしてみれば、単なる投げやりでしかなく、心ここにあら

ず、といった調子で、およそ関心ももたれていないような冷たい雰囲気をかもし出していた。筆者は未だに兄の「好きなようにすればよい」という言葉に怒りを禁じえない。やはりここでも筆者は、健常者である兄、もっといえば、健常者である男に対する「力関係」を意識しているのかもしれない。

4　終わりに

女の体を持つ祖母と母が亡くなったことで、筆者の家族は男ばかり。やはり、男と言うものは不器用で、言葉の選び方が下手、といわなければならないだろう。そして、カミングアウトする筆者もまた、ジェンダーが男であるから、カミングアウトの仕方が「下手」なのだろう。加えて、筆者のように障碍がある場合、「どうせ何を言っても取り合ってもらえない、現にずっとそうだったから」というあきらめにも似た心理状態が、カミングアウトを逡巡させてしまう。家族だから否定されたくない、と思うばかりに、大事なことがなかなか伝わらない、といのはどこの家族にもあることだとは思うが、とりわけ筆者のように障碍のある場合、もう生き方に協力してくれないのではないか、絶縁状態になってしまうのではないかなど、マイナスの方向に考えてしまいがちになる。タブーの多いこの社会。だからこそ、カミングアウトに慎重にならざるを得ないのではないだろうか。

トランスジェンダーをいきる（２２）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

セルフヘルプグループへの参加

１　始めに

筆者は 2008 年現在、身体・書類上の性別は女性・ジェンダーの性別は男性と言う FTM トランスジェンダーの当事者に会ったことがなかった。そこで筆者は、ジェンダークリニックへの受信を始めた 2008 年、ある友人に誘われて、性同一性障碍・トランスジェンダーに関するいくつかのセルフヘルプグループに参加した。今回は、筆者が参加したいくつかのセルフヘルプグループを通して、当事者としてどのように生きて生きたいかを模索しながら、セルフヘルプグループの持つ問題点についても記述する。

２　医療化された「男」と「女」の身体

①　生態観察で思い知らされた、ホルモンの威力」に圧倒されて

鍼灸マッサージ師免許を取得している筆者は、性ホルモンの機能に関する知識はそれなりにあったものの、性同一性障碍・トランスジェンダーの当事者たちで、ホルモン投与や手術などの医療行為を受けている当事者たちに会ったことがなかった。特に、性ホルモンを投与している当事者たちと会話しながら、身体のあちこちを観察していると、自己のそれまでの医学的知識や想像を絶するほど、ホルモン作用の威力に圧倒された。すなわち、FTM は男声化、無月経、筋肉質の体型、髭、太い眉、MTF はきめ細やかな肌、細い髪、丸みを帯びた体型、軟らかな筋肉などがそれぞれ際立った特徴として、筆者をうならせた。ただし、ホルモン作用は個人差によって異なるし、MTF の当事者は、女性ホルモンを投与しても、女声化は起こらない人が多い。

そのような生態観察は、筆者にとってはコミュニケーションツールとしての役割を果たした一方で、通院当初で、ホルモン投与や手術などの医療行為を望んでいた自己の心を流行らせ、まだ何も医療行為を行っていない自己の身体を、「この人たちより劣った存在」として、自ら貶めてし

まうような心理状態に陥ってしまった。
そして、、医療行為によって男女のカラーが際立っていた集団への帰属意識をかき立てられるように、将来、自己の身体への男性ホルモンの投与による体型の変化を、青写真に描くようになった。もちろん、男性ホルモン投与による副作用を覚悟の上でのことである。

②筋トレの効果によるホルモン投与や手術への微かな違和感

筆者は、セルフヘルプグループで、ある FTM の友人から、筋トレを勧められた。最初は、筋トレに対して乗り気ではなかったが、ここは一つ、「男らしくチャレンジ」と思い、筋トレを始めた。その筋トレで、当初予想していたよりトレーニングの効果が出てきたこともあってか、それまで望んでいたホルモン投与や手術などの医療行為への微かな違和感を覚えるようになった。それと同時に、医療行為によって構築された男女のカラーが際立っているセルフヘルプグループの人たちの中で、なんとなく中性的な自己の身体が「空気を読めない」というように浮いた存在になっていたことへの違和感をも覚えるようになっていた。。

３　ジェンダー役割の確認は、そのまま異性愛規範へ

①セルフヘルプグループ内で押し付けられた「男らしさ」への違和感

宿泊をかねた飲み会でのことである。真夜中、たまたま筆者の横に座っていた MTF の彼女からいきなり「抱いて」と迫られた。その迫り方は、女性の色をふんだんに使用し、身のこなし方も、FTM の筆者を誘惑しようとする動きであった。ところが筆者は、女性嫌悪という性質上、彼女の求婚をすぐには受け入れられなかった。そのような筆者に対して、彼女は「男としての女の抱き方」を教えようとした。その彼女の行為に、筆者はジェンダーの男としてのプライドを傷つけられた。彼女にしてみれば、視覚に障碍のある筆者にわざわざ親切にも「男としての女の抱き方」を教えたつもりであったのだろうが、筆者にしてみれば、女が誘惑するように男に迫ってくる、そのこと自体に嫌悪を抱き、しかもそれをジェンダーが男の筆者に「押し付ける」という行為にも反発したのである。

この出来事から浮かび上がってきたことは、「男は女を抱くもの」というジェンダー役割を内面化していた彼女からの要請への筆者の反発であり、「彼女の要求する男らしさを押し付けられたことへの憤りであり、それはそのまま異性愛規範へと連動している証である。そこには「女は男に抱かれるもの」というジェンダー役割に固執した彼女が、女を積極的に抱きたがらないジェンダーが男の筆者へのもどかしさの故、「男としての女の抱き方」を筆者に教えることで、男としてのジェンダー役割を、筆者により強固に押し付けようとしている戦略的方法が見て取れ、その影には異性愛規範がベースになっている。したがって、彼女の発想からは、「女が男を抱く」というジェンダー役割の逆転化や、「男同士・または女同士で抱き合う」などの同性愛的関係性への想像が欠落しているといわざるを得ないだろう。

②自らゲイであることに明確に気づく

場所や地域を問わず、FTM のセルフヘルプグループでの話題は、ほとんどが異性愛規範に基づいたジェンダー役割の確認、つまり、「彼女がいることが前提」で話題が盛り上がる。FTM を対象にしたこの日の自助グループの場でも、ご多分に漏れず、異性愛規範に基づいた恋愛の話題で持ちきりで、ここでも集まった当事者すべてに「彼女がいる」という前提で話題が勧められていった。

そんなとき、筆者一人だけが話題から取り残されていることに気づいた。その原因が何であるかにうすうす気づいていた筆者は、前夜一睡も眠れなかったせいで、突然眠気に襲われた。しばらく夢の中で、当事者たちの恋愛話を聞いていたとき、リーダーの「彼女おるんか」という質問にはっと目覚めた。そこでいきなり、前夜一睡も眠れなかった理由を話した。

前夜、集まりの帰り、ゲイの彼が筆者をバス停まで誘導してくれた。そして別れ際、無言のまま、いきなり彼が筆者にハグをしてきた。ゲイの彼からハグをされるのは初めて、ましてや FTM トランスジェンダーとして生きようとするなら、やっぱり女を好きになった方がよいのか、それとも男が好きなままでもよいのか、と迷っていた最中だけに、筆者はそれに応じながらも、内心ショックを受けた。そのショックは一晩筆者を眠りに陥らせないほど強いものであり、結局そのショックに悶々としながら一夜を明かした。

しかし、このことを冷静に考えてみると、筆者がショックを受けたのは、ハグをしたゲイの彼を否定したのではなく、彼がいきなりハグの行動に出たからである。確かにそのショックによって一睡も眠れなかったのだが、彼がいきなりハグをしたということは、筆者を FTM トランスジェンダーであることを認めた上で、筆者を男として扱ってくれたことへの証であろう。そのことを全員の前で話すと、リーダーから、「孝ちゃん、もしかしてゲイか？」と聞かれた。このとき筆者は、自らゲイであることへの明確な気づきを得た。その気づき方は、今までのぼんやりとしたおぼろげな、何か容認しがたいフォビアの様相ではなく、フォビアのないはっきり容認した形での気づきであった。そして、この気づきによって、今まで恋愛または恋愛感情に陥った際の複雑なねじれ現象を回避すべく自己のあり方に対しても腑に落ちた。

また、ジェンダーレベルで自己のゲイであることへの気づきを得たときの FTM のセルフヘルプグループ全員からのからかいや誹謗中傷がなかったことが、自己のジェンダーレベルでのゲイを恥じることなく容認できたのだろう。そのことによって、今までに体験した男たちとの恋愛の際に生じた苦しみの意味を見出すことができた。そこには、他者がゲイであることは容認できても、自己のジェンダーレベルでの性嗜好がゲイであることへのフォビアによって、恋愛を「ねじれた忌むべき感情」へと低次元化しつつも、その恋愛に格闘技としての意味を付与した上で、自己の男性性を鼓舞するために嗜癖的に繰り返すというメカニズムに陥ってしまうプロセスが、無意識のうちに自己のジェンダーレベルでのゲイを否定していることにも気づかされた。

このような気づきを得たうえで、セルフヘルプグループでは、「恋愛は極力避けたい」と発言している。FTM トランスジェンダーのセルフヘルプグループの話題は、異性愛に基づいた恋愛話が多い中、このような発言は、ともすればセルフヘルプグループの場を崩壊させるような逸脱的な

発言に思われるかもしれない。しかし、「言いっぱなし」、「聞きっぱなし」という性質の濃いセルフヘルプグループであれば、この発言も場を崩壊させるものではないだろうと考えている。

4　通常の視聴覚レベルでの性別規定はタブー

①視聴覚レベルの性別規定は、当事者自身の性自認より効力がない

私たちは、初対面の人と会ったとき、必ずと言ってよいほど年齢と性別を規定したくなる。その判断材料は、視聴覚レベル、特に視覚に特化した外見であろう。中でも性別は、服装や持ち物、行動様式などから瞬時に規定できると思い込んでいる人が多く、他者の性別を無意識に規定し、その規定した性別に無理やり他者を当てはめようとする強引さ、つまり、自分たちの勝手なものさしで、他者の性別を無意識に規定し、無理やり他者を押し込めようとしていることに、ほとんどの人が気づいていない、いや、気づこうとしていない。そればかりか、自己の勝手な判断で他者の性別を規定していることに何の疑いを持っていない人が大半であるだろう。

しかし、そのような他者への性別規定が、必ずしも自明でない場がある。その一つが、性同一性障碍・トランスジェンダー当事者のセルフヘルプグループである。

性同一性障碍・トランスジェンダーのセルフヘルプグループで、視聴覚レベルで当事者の性別を規定したとき、100 パーセント当たらないばかりか、場合によっては他者からの一方的な性別を規定されたことへの怒りを露にする当事者もいる。つまり、このセルフヘルプグループでは、視聴覚レベルによって、他者の性別を規定すること自体タブーなのであるといえるだろう。そこには、個々の当事者がそれぞれの性自認に合わせた服装や行動様式を身に付けることで、その性別で日常生活を送りたい（その性別としてパスしたい）、決して外見の身体の性別で規定されたくない（リードされたくない）という強い姿勢が伺えるからである。

それに、性同一性障碍・トランスジェンダーのセルフヘルプグループに参加している当事者は、必ずしもホルモン投与や手術などの医療行為を受けている人ばかりではなく、かえって医療行為を受けることに否定的な当事者もいる。ホルモン投与や手術などの医療行為によって、視聴覚レベルで個々人の希望する性別と一致した性別規定が可能な人もいれば、医療化を否定しながらも、身体の性別だけで、性別を規定されたくない当事者もいる。つまり、医療行為を否定しているからといって、身体の性別を容認しているわけではない。したがって、性同一性障碍・トランスジェンダーのセルフヘルプグループ内での視聴覚レベルによる性別規定は、個々の希望する性別で生きようとする当事者の努力を踏みにじる行為であるばかりか、当事者自身の性自認より効力がない。

②性自認の表明は自由

前項で述べた、視聴覚レベルでの性別規定は、当事者の性自認より効力がないことを受けて、では、当事者全員が性自認を表明するかといえばそうではない。積極的に個々人の性自認を表明する人、話の流れの中で、徐々に性自認表明を思わせるような発言をする人、まったく性自認を表明しない人などさまざまである。したがって、自助グループ内での性自認の表明は自由である。

性別は、極めてプライベートなことである。そのプライベートな事柄である性別を、視聴覚によっていとも簡単に規定してしまうこと自体タブーである。だから、性自認の表明においても、わざわざプライベートな性別をむりやり表明する必要はない。また、このことは、「性別をカテゴライズされたくない権利」を保障する重要な要件であると筆者は考える。

③男女どちらでもない性自認

男女のカラーが際立っている当事者の中で、必ず一人は、男でも女でもない性別、すなわち、身体は男性（女性）でありながら、ジェンダーは男女いずれでもない性自認を有する人たちがいた。この当事者たちがもっとも嫌悪する質問は、「あなたは男女どちらですか？」である。一見自明のことと思われているこの質問に、なぜ当事者たちは嫌悪するのか。

私たちが他者の性別に関する質問を行う際、「男性」と「女性」の 2 つの選択肢しか用意していない。これは、性別に関する直接口頭での質問だけでなく、書類の性別記入欄にも、男女のいずれかに印を付すような様式がまだまだ多い。仮に、性別欄が男女 2 つに区分されていなくても、性別欄があるだけで、男女いずれかを記入しなければならない恣意的な物さえ感じてしまう。そこには、無意識の内に内面化している性別二元性が、このような質問を生み、書類に性別欄を設け、強制的に記入させる構造を作ってしまうのだろう。

また、この手の質問には、男女いずれかの性別で答えなければ許されないという厳格さまで含んでおり、そこには「男女いずれでもない性別」という答えはあいまい、または「中性」などと揶揄した上、却下することも多い。しかし、セルフヘルプグループに参加して分かったことは、男女という性別二元論だけでは収まらない領域、つまり、男女いずれでもない性別で生きている当事者たちがいたという事実であった。だから、性別二元性を背景にしたこの手の質問は、男女いずれでもない性別で生きている当事者たちを困惑させるだけではなく、性別をカテゴライズされたくないという権利保障、更には、性自認を表明しない自由までも奪ってしまう性質を持つ残酷な側面を持っているといわなければならないだろう。それゆえ、セルフヘルプグループの中では、性別に関する質問を却下する空気が伝わってくるし、「性別は身長や体重をむやみに聞くことと同様にプライベートな事柄）として意味づけた上で、「それを聞かない、ましてや視聴覚レベルで勝手に規定しないこと」を暗黙のルールにしているのだろう。

④社会への課題

このような状況を受けて、筆者はあえて社会に次のような課題を提示する。他者の性別を勝手に規定することはタブーである。それはもとより、むやみに他者の性別を問わないこと、すなわち、性別とは身長や体重と同様、プライベートな事柄であるから、性別に関する直接口頭での質問や、各種書類記載などに、不必要に性別欄を設けないことである。「性別は個人を特定するのに必要だ」という認識を持っている人が多いが、そもそも男女という 2 つだけで、個人を特定できるはずがない。個人を特定したいなら、実際には男女以外の多様な性別が存在していることを容認する必要がある。この手の内容は、4 つの血液型の特徴を定め、それに無理やり他者を押し込

めていることと同様の原理を持つ強引で恣意的な思考停止の下で行われている。だから、このような内容に話が及んだときに、「それは難しい」と言って問題から回避しようとする人が出てくるのは、当に「思考停止」の表れである。筆者を含め、このような思考停止の思考性から脱却し、多様な性別を容認した上で、他者の性別を規定しないことが、これからの社会への重要な課題であると筆者は考える。

5　終わりに――セルフヘルプグループの問題点

「言いっぱなし」、「聞きっぱなし」という、一見開放的に思われるセルフヘルプグループのルールにも問題点はある。そこで最後に、そのようなセルフヘルプグループの問題点に触れておく。

①ローカルな言語による「医療化」

性同一性障碍・トランスジェンダーのセルフヘルプグループに参加すると、当事者特有のローカルな言語が使用される。そのローカルな言語は、ホルモン投与や手術などの医療行為によるもの（医療化）から派生する性質を持つものが多い。

たとえば、「ホル注（ホルモン注射）」という言葉は、当に「医療化」から派生した言葉の代表例である。また、「パスする（服装や持ち物などで、自己の希望の性別と一致しているように見られること）」、「リードされる（体の性別で判断されること）」などの言葉は、その言葉自体、一見すると医療化とは無関係に思われるが、視聴覚レベルで性別を規定されるという行為の中に、ホルモン投与や手術などの医療的側面も含まれているので、間接的な「医療化」から派生した言葉であると言えるだろう。

性同一性障碍・トランスジェンダーのセルフヘルプグループに参加している当事者たちの多くは、このような医療化から派生したローカル言語を「知っていて当然」というように使用している。しかし、当事者たちの中には、体の性別に違和感があっても、あえて「性同一性障碍」と位置付けたくない、つまり、そのような自己を「医療化したくない」という人もいる。そのような当事者たちにとっては、このセルフヘルプグループが息苦しくなって去っていくことも多い。

筆者が参加したいくつかのセルフヘルプグループでも、グループ全体が医療化されていることを自明視している感が強かった。今後のセルフヘルプグループのあり方として、「医療化を嫌悪する当事者への配慮」が必要である。

②「言いっぱなし、聞きっぱなし」の弊害

セルフヘルプグループのルールとしての「言いっぱなし、聞きっぱなし」は、一見すると緩やかなつながりのように思われる。しかし、このルールには、2つの問題点がある。

第1に、「言いっぱなし、聞きっぱなし」の持つ一見自由な性質を持つ相互行為ではあっても、そこに必ず自己の価値観や思い込みを強制してくる当事者がいる。そのような当事者に対して、自己の意見を提示することができずに去っていく当事者も多い。

第2に、「言いっぱなし」の場面では自己の体験を際限なく語るが、逆に「聞きっぱなし」の場面では、他者の体験を聞くことができずに言葉をさしはさみ、発言している当事者の気分を害

する当事者もいた。このため、一見自由な「言いっぱなし、聞きっぱなし」のルールはものの見事に無視された。その結果、当事者同士のつながりを難しくしている側面を垣間見ることができた。筆者はこのような体験を通して、現在はセルフヘルプグループには参加していない。

③セルフヘルプグループから去っていった当事者たちを、どのようにサポートするか

そこで浮かび上がってきた課題は､｢何らかの理由でセルフヘルプグループから去っていった当事者たちをどのようにサポートするか」である。この場合、新たなセルフヘルプグループを立ち上げたり引き戻したりすることは、②で示した「言いっぱなし、聞きっぱなし」による弊害を招く恐れがあるので得策ではないと筆者は考える。

何らかの理由で、セルフヘルプグループから去っていった当事者たちは、往々にして社会から孤立してしまうことが多い。その孤立をどのように防ぐかが、今後の重要な課題であろう。